
ダメ男依存症候群 ～俺は彼女に中毒症状～

霧谷香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダメ男依存症候群 ～俺は彼女に中毒症状～

【Nコード】

N9186B

【作者名】

霧谷香住

【あらすじ】

『ダメ男依存症候群』の旬視点のサイドストーリー。奈津美と旬の出会いの詳細や初デートのエピソード、そして前作の話の裏での旬の心情など……。旬の一人称でお送りします。 前作『ダメ男』をお読みになってない方は、そっちを先に読んだ方が話に分かると思います。

1 人生の転機

それは、俺が高三……それも卒業間近の時のこと。
全てはここから始まった（と思う）。

「よっしゃ！ 受かった！」

「俺もあつた！」

「俺も！ よかったー」

大学の合格発表の掲示板の前で喜びガッツポーズをする俺の友達たち。

その中に、俺は入れなかった。

「おい、匂。お前はとうだつたんだよ？」

「落ちた」

俺が即答すると、その場の空気が凍った。

まさか、落ちると思っていなかったんだろう。

確かに、俺が受けた学部学科は、倍率が一・五倍で、受験者の半分以上は受かる、それぐらいの確率だった。

実際、俺の番号の前後十人ぐらいは、抜けることなく続いている。周りの雰囲気も、受かって喜んでいる奴が多い。そんな状態だっ

た。

「でも結果は分かってたようなもんだって。入試も全っ然手応えなかったし」

「ま、まあ、お前滑り止めも受けたんだろ？ そっちはまだ分かんねえしな」

俺を励ますためか、そういう風に周りは言った。

滑り止めも、全く自信ないけど、これ以上気を遣わせるのもなんだから、とりあえず何も言わなかった。

「旬！」

そう呼ばれた方を向いてみると、

「あ、ミキ！」

俺の彼女がいた。

ミキも同じ大学を受けた。

学部は違うから、また別の所で合格発表を見てきたはずだ。

「ミキ、どうだった？」

ミキのもとに行って、結果を聞いた。するとミキは、笑顔で

「受かったよ！」

と言った。

「おー！ よかったな！ おめでとー！」

俺は心から嬉しくて、ミキにそう言った。

ミキが受けたのは、この大学で一番偏差値が高くて一番人気があるって、倍率も五倍近くある、難しい学部 of 学科だった。

ミキは本当にこの大学に行きたがっていて、夏から予備校に通ったり、遊ぶのも我慢して頑張っていたのは知ってるから、俺は自分のことのように嬉しかったんだ。

「ありがとう。……それで、匂は？」

嬉しそうな顔から、少し深刻な顔になってミキは俺を見上げる。

「ダメだった」

ミキにも気を遣わせないように、俺は明るく笑顔で言った。

でもやっぱり、ミキの表情は暗くなる。

「そっか……あ、でも、もう一つ受けた方があるもんね」

ミキも皆と同じようにそうやって笑顔で言う。

「うん」

ミキには尚更、手応えがなかったなんて言えなくて、俺は頷いておいた。

その後、友達とは別れて、ミキと二人で帰った。手を繋いで歩いていた。

ミキとは、高三の夏に告白されて付き合い始めた。

うちの学年一可愛くて、性格がよくて、スタイルがよくて（特にDカップのおっぱいは素晴らしい）モテるミキ。

お互い受験生だし、周りには受験が原因で別れた奴らも多かったけど、俺達は順調にやってきた。

そして、それはこれからも続いていくんだと思っていた。

「ミキ、マジでよかったなー。俺、何か自分のことみたいに嬉しい」俺はその時の気持ちを素直に、ミキに言った。

「うん……ありがとう」

ミキはそう言いながら、複雑な顔をしていた。

やっぱり、俺がダメだったから、喜びにくいのだろうか。

「これからどうする？ あ、どうか店入ってミキの合格祝いしよ！」思い付いたことを、俺はそのまま言った。

でも、ミキは黙って首を横に振った。

「ううん……今日は、親がお祝いするから、すぐ帰ってきてって言われたの……」

「あ……そっか」

その言葉が、少し残念ではあったけど、俺はしょうがないとすぐ

に思い直した。

ミキの親だって、ミキのことを応援してたはずだから、今日は、家族水入らずでお祝いしてほしいのも、本心だ。

「旬の合格決まったら……二人でお祝いしようね」

「うん」

ミキが笑ってそう言ってくれたから、俺は全く自信ないのにも関わらず、はつきりと頷いてしまった。

そして、数日後。

郵送で大学の合否通知が届いた。

薄っぺらいハガキで一枚。

『本学の入学試験の結果、あなたは不合格と判定されました』

素っ気なくなっただけ書かれていた。

この前と同じように、特にショックではなかった。結果は分かっていたし、元々滑り止めのところは、担任に受けておいた方がいいと言われて受けただけで、行きたかったわけではない。

そして、俺は不合格だったという結果をミキに電話で伝えた。

「……そっか」

ミキはただそれだけ呟いた。

電話越しにでも、気まずい雰囲気伝わってくる。

「それで……匂はどうするの？」
深刻な様子でミキは聞いてくる。

といつても、実はそう気づいたのは、後になってからのことだ。
この時の俺は、世界一のバカだったから、とても脳天気な、言葉を発してしまっていた。

「まあ、とりあえず専門（学校）行くなー。別にそっちでも興味あることできるし、資格も取れるし」

「……後期試験は受けないの？」

「そんなん無理に決まってるじゃん！ 後期だったら倍率がハンパなく上がるし。やっぱ、ハナから俺が大学受験なんて無理だったんだよ」

そう言つて、俺は笑い飛ばした。

このことも、後になって本当にバカなことをしたつて思い知る。

「ミキとは……学校離れちゃうけど、それでも会えないわけじゃないんだし、それよりもミキが一番行きたかったとこに受かってよかったよ」

「何それ……匂、勝手すぎ」
ミキの声の様子が、いつもと違った。

「え？」

「旬は……大学落ちて当たり前だよ。勉強してなかったんだからこんな風に、ミキに厳しく言われたのは、初めてだった。」

「旬は元々大学希望じゃなかったもんね。大学受けて落ちても、専門学校行けばいいって言ってたし。初めからそうやって安全な道を決めて、必死に頑張ったりしなかったんだよね」
ため息混じりに、そう言われた。

「え……でもそれはミキと一緒に大学行きたかったから……」

「本当に？ それなら何で勉強しなかったの？ それどころか、教習所行ったりバイト増やしたりしてたよね。普通あり得ないよ。受験生なのに」

返せる言葉はなかった。全部、ミキの言う通りだ。

「私……旬が私と同じ大学行きたいって言うてくれたの、本当に嬉しかった。わざわざ、進路変えてまで私と一緒に大学行きたいって言うてくれて……でも、結局、旬は口ばかりだよ……」

最後の方は、涙声に聞こえた。

「もう別れよ……私、これから旬と今まで通り付き合える自信ない」
そうやって、突然別れの言葉切り出され……俺達は終わった。

本当は、何かを言うべきだったのかもしれないけど、ミキの言う

ことがあまりにも正し過ぎて、俺が言うことなんて間違いだらけのような気がして、『ごめん』以外特に何も言えなかった。

ただ思ったのは、俺はどうしていればよかったのか……それだけだった。

ミキの言うとおり、俺は元々専門学校志望で、大学を受験しようと思ったのは、夏休み頃……ミキが大学志望で、ミキが行きたいと言った大学のパンフレットを見ていたら、俺の興味ある資格が取れると言ったことを知った。それに俺と同じクラスの数人が受けるという学科だったから、俺も受験することにした。

ミキと同じ大学に行きたいと言った俺を、ミキは止めたのに、それでもミキと一緒にいいから頑張ると言っただのは俺の方だ。

それで夏休みまでは、受験勉強らしい勉強をしていたけど、俺は十八になる秋から教習所に行き始めて、免許を取った。

そして、冬には教習所でなくなった金を稼ぐために、バイトを増やした。

普通、大学を受験する奴には有り得ない。

他の受験生が真剣に勉強してる時に、俺は全く違うことをしていた。

ミキも心配してくれて、勉強のことを注意してくれていたのに、俺は気楽に考えて、結局はちゃんと勉強しなかった。

でも、言い訳のようになるかもしれないけど、免許を早く取りたかったのは、受験が終わって卒業したら車でミキと色んなところに遊びに行ったりしたかったからで、バイトを増やしたのは、金がなか

つたら、ミキと遊べないし、三月にミキの誕生日があるから、その時にプレゼントとか買いたかったからだ。

これをミキに言えば、別れることはなかったのだろうか……

それとも、結果は同じように不合格になっていたにしても、形だけでも勉強を少しでも頑張っていればよかったのだろうか……

最初から、いい加減に大学受験を決めないで、そのまま専門学校希望でいればよかったのか……

色々考えたけど、もう遅い。ここまで気付かないなんて、やっぱり俺はバカだ。

ミキのためにしたつもりのことは、結局ミキの望むようにはなっていないかった。

それだけがショックだった。

ミキと別れて一週間。

俺は毎日バイトを入れて、働いているうちに、段々と立ち直ってきた。

ショックでなくなったとか、そういうわけではないけど、確かにミキとこのまま付き合っても、これからミキは大学生、俺は専門学校生なわけで、そのうち溝ができてしまっていたんじゃないかと思うようになった。

今日は、六時から居酒屋でのバイトだ。

ここのバイトは、少し時間が遅いけど、時給はそれなりにいいから気に入っている。

「いらっしやいませー」

やってきた客に、俺は声をかけた。

入ってきたのは、OLっぽい感じの女の人だった。

その人は、きれいな人だったけど、何だか暗い顔をしていて、黙ってカウンターの空いていた席に座った。

その時は、特に何も思わなかった。

まさか、この人との出会いが、俺の人生を左右することになるなんて、知る由もなかったんだ。

2 最悪な出会い方（前書き）

一話目で伝え忘れていたのですが……この話は旬が主人公の旬の一人称なので、不意に下ネタ的発言が飛び出すことが多々あります。（何せ旬ですので…）

そういったものが苦手な方は予めご注意下さい。

2 最悪な出会い方

彼女の前に、次々と空のジョッキが増えていく。

もう一時間も飲みつぱなしだ。

「大丈夫なんすかね、あの人……」

俺はカウンターの奥で肉じゃがを盛っている店長に言った。

「あの人？ 誰だ？」

「あのカウンターで飲んでる女の人です。もう大分飲んでるみたいですけど……」

「ああ、あの娘か」

俺が指した方を見て、店長はそう言った。

「知ってるんすか？」

「いや、知ってるつつうか、常連だよ。よく来るんだ。いつもは誰かしらツレと一緒にんだが……今日は一人か。確かにいつもより飲んでるなあ」

店長も彼女を見て、少し気にかけた様子だった。でもすぐに、

「まあ、あんまりひどくなるようなら止めてやってくれ。……ほら、持ってけ。二番テーブル」

そう言って、俺の前に器を置いた。

確かに、無茶な飲み方をする客なんてたくさんいるから、いちいち気にもしれられない。

逆に、絡まれることもあるから、苦手だ。

なのに俺は、やたらと彼女のことが気になって、バイト中何度も彼女のことを盗み見た。

なんか、やけ酒っぽいな。しばらく見ていてそう思った。

仕事が上手くいってないとか、嫌なことあったとか……？
いや、見る限りそんなキャリアウーマンのような雰囲気でもないし……
やっぱ、女の人が一人でやけ酒っていったら、失恋とかかな。

と、俺はよく考えれば失礼なことまで考えていた。

でも、もし失恋っていうなら……少し親近感がわくかも……

「ビールおかわり！ あと焼酎も持ってきて！」
彼女はまた酒ばかりをカウンターに向かって注文している。

彼女の前には、明らかにさっきまでより大量の空きグラスやビンが置かれて、彼女の両隣の席まで広がっていた。

流石にもうヤバそうな気がする。
そう思って、俺は彼女に近付いた。

「……グラスお下げしまーす」

いくらなんでもいきなり注意ができなくて、とりあえずそう言いながら彼女を盗み見る。

彼女は、グラスに日本酒を注ぎ、それを一気に飲み干した。

見てみると、本当につまみも料理もなく、ただ酒だけを胃に入れているようだった。

「お客さん……ちょっと飲みすぎじゃないですか？」
見かねて俺は控えめにそう言った。

すると、彼女は俺の方を向いて、

「何。客に文句つける気!？」
そう言っただけだ。

俺は一瞬で後悔した。

「何よ。一人で飲んで淋しい女って思っただけでしょ」

うわー……絡まれた。

「え……いや、そんなことは……」
客の手前、俺はそう言うしかない。

「思っただけでしょ! 正直に言いなさいよ!」
彼女はそう言っただけで俺を解放しようとはしない。

『正直に言いなさい』って……

「まあ……少しだけ……」

そりゃ、一人で飲むのが好きそうな人じゃないし……淋しそうって言われればそうっぽいし……

そう思っただけは頷いた。

その次の瞬間、俺は彼女に腕を掴まれた。

「ちょっと座って!」

そう言われ何故か無理矢理隣に座らせられた。

「あたしだって好きで一人で飲んでるんじゃないわよ。昨日、男と別れて、しかもこういう時に限って友達皆デートだし……飲まなきゃやってらんないっての!」

「はあ……」

何か……いきなり愚痴られてるみたいだった。

「でも……酒に頼るのはよくないですよ」

「何よ! お金払ってるんだからあたしがいくら飲もうと勝手にしろよ!」

注意したのも、また睨みで返された。

「あーもうっ! お金って言ったたらあの男のこと思い出したじゃない! どうしてくれんのよ!」

「えっ……」

それって言いがかりじゃ……

「何よあいつ！ 一流だか超一流だか知らないけど、どうせ親のコネで会社入ったんでしょ！ 結局は親のお金なんでしょ！」

「はあ……」

何かよく分からないけど、ここにはいない誰かに対しての文句が炸裂している。

多分元彼なんだろうってことは、すぐに分かった。

「もう最悪！ 男なんて皆女のことバカにしてんのよ！ 自分の方が立场上だって勝手に思ってるんだから！」

「いや、決してそんなことは……」

「何様のつもりなのよ！ あいつ！」

聞いてない……。よっぽど頭にきてるみたいだ。

それから暫くの間、俺は彼女の愚痴を聞くはめになった。

気づけば十一時をとくに過ぎていた。

今日は十時上がりなのに、俺が席を立とうとするのを彼女は許してくれない。

「だって……一カ月ぐらい前から何もしてこなくなったのよ？ 家に泊まりに行っても、夜、隣で寝てても『今日は疲れてるから』とか言って相手してくれないのよ？ 何かおかしいって思うじゃない。だから昨日会った時、最近冷たくない？ ってそれとなく言ったの。」

そしたらなんて言ったと思う?。」

「さあ……」

さつきからこんな調子で、俺にも話し掛けてくるけど、何を言え
ばいいか分からなくて適当に相槌を打っていた。

「『何か、君じゃ何も感じないんだよね。もしかして、不感症?』」

うわー……元彼、言っちゃったんだ……

「はあ!? 何好き勝手言ってるのよ! こっちだってあんまり気
持ちよくなかったわよ! でもそれはアンタが下手だからでしょー
!」

確かに、女の人にそれはひどすぎだ。俺なら絶対言わない。

「それ言ったの?」

俺は、彼女が客だということも忘れて(本当ならとくにバイト
終わってるから関係ないのかもしれないけど)、自然とタメ口にな
っていた。

「言ってるじゃない」

彼女は別に気にもならなかったらしく、そう答えて口を尖らす。

「言えばよかったのに」

「言われた時はそこまで頭回らなかったのよ! こついつのつて後
からくるからム力つくー!」

俺の言葉に、彼女は再び憤慨して、今度は俺の腕を掴んで激しく
揺さぶった。思いつきり揺さ振った。

揺さぶられて、俺の体が左右に動く。

そして、彼女の方に体が傾いた時、腕が柔らかいものに当たった。それは考えるまでもなく、彼女のおっぱいだった。

そこで初めて気付いた。彼女の、その二つの膨らみの大きさに……

自他共に認めるおっぱい星人の俺は、見るだけで女の人の胸のサイズが分かる。（これちよっと自慢）

そして、彼女はE^{カップ}は固い。

俺としたことが、迂闊だった。目の前にこんないいモノがあつて気づかないなんて……

ちくしょうっ……もっと早くから見とけばよかった。

「もうそれだけが心残りなの！ 絶対忘れられないわよ、あの男」

俺が考えていることに気付きもせずに、彼女はまだ何か言っている。

「お客さん、そろそろ看板なんだけどね。そいつもそろそろ解放してやってくれないか」

カウンターから店長が俺達に声をかけてきた。

助け舟だろうけど……もう少し遅くなってもよかったのに。

「悪かったな。今日の分、給料に上乘せしとくからよ」

俺を見て店長はそう言って、調理場の方に戻って行った。

「マジっすか？ やった〜儲け〜」
前言撤回で俺は喜んだ。

何気に仕事してないし、しかもおっぱい大きいお姉さんと一緒にいて得した。

「んじゃ、お姉さん。お勘定……」
俺は少し気分よくそう言って立ち上がった。

でも、彼女の手は、俺の腕を掴んだままだった。見ると下を向いている。

「……ない」
そのまま、彼女は何かを言った。

「え？」
俺にはそれが聞き取れず、屈んで顔を覗き込んでみた。

「……帰りたくない」
彼女は、何だか機嫌が悪そうな顔でそう言った。

「え〜……さすがにちょっとそれは困るって、お姉さん……」

いくら何でも、俺だってそろそろ帰りたい。
そりゃこのおっぱい……いやお姉さんをこの状態で帰すのは、惜しい……いや心配なことだけだ。

「だって……帰ったら一人で急に現実に戻されて……絶対に自己嫌

悪しちゃうもん」

意外にも、そんな理由で俺は驚いた。

「だったら飲まなきゃいいのに」

酔いながらそこまで考えて、どうなるかが分かっているのに、どうしてこんなに飲むのか、俺には分からない。

「分かってるわよ！ でも飲まなきゃやってらんないんだからしょうがないでしょ！」

彼女は少し声を荒げて、グラスに少し残っていた焼酎を飲み干した。

ある意味、羨ましいと思った。

失恋して、直接ではないけど、自分の思っていることを、素直にぶつけることができることが……

俺は直接でも、別の何かにでも、そういう風にはできなかった。

「分かった。一人になりたくないなら、ホテル行く？ 俺と……」

口が勝手に、そう言っていた。

2 最悪な出会い方（後書き）

『ダメ男依存症候群　～俺は彼女に中毒症状～』を読んでいたとき、
ありがとうございます。

執筆し始めて思ったのですが、匂って単純なようで難しい！（汗）
前作は奈津美メインで書いていたので気付かなかったのですが（
仮にも作者なのに…）匂は意外と設定が多いんですね……
それについて少しずつ触れようとしたら、前作より長くなってし
まいそうです（苦笑）

何かと忙しいので、更新が滞りがちになるかもしれませんが、是
非とも最後までお付き合い願います。

3 始まりは下心（前書き）

描写は控えめにしたのでR指定というほどではないと思いますが、エッチなシーンがあるので、苦手な人はご注意ください。

3 始まりは下心

『ホテル行く？ 俺と……』

なんでそんなことを言ったのか、俺自身よく分からない。

下心と言えば確かにそうだ。

目の前でめちゃくちゃスタイル（胸）がよくて、しかも顔も俺のストライクゾーンだし、そんな彼女が帰りたくないとか言い出すから、男として何も言わずに帰せるわけではない。

ミキと別れて欲求不満というのもある。

でも、店員として、客である彼女が酔って帰りたくないとか言い出すから、こう言えば流石に冷静になるだろうとか、思ったのも確かだ。

何にせよ、まさか彼女が素直に頷くとは思わなかったんだ。

「ねえ、どこのホテル行く？」

店を出て、フラフラと歩きながら大きな声で彼女は言った。

「向こうの裏道行ったらラブホいっぱいあるよー」

何気に詳しいらしい。

よっぽど酔ってるだけなのか、意外と乗り気なのか、彼女は自分からそう言って俺の腕を掴んで引く張る。

俺を誘導するみたいに引く張ってはいるけど、千鳥足で歩き方が真っ直ぐでなく、すぐによるめいて、転びそうになった。

「大丈夫っすか？」

俺は彼女の体を支える。

「うふふつ。だーい丈夫ー」

さっきまで酔って怒っていたのに、今度は笑ってる。

面白い人だなあって、この時は思った。

「うふふつ。早く行こー」

彼女は笑いながら俺の腕にしがみつくようにして体をくっつけ歩き出した。

そうすると……おっぱいめちゃくちゃ当たってますけど、いいんですか！？

裏道を抜けると、彼女の行った通り、所謂ホテル街に出た。

「どこ行こっかあ」

彼女がキョロキョロ辺りを見回して言ったのも、今の俺には左から右に抜けていく。

そんなことより、俺の腕に密着状態の感触にばかり神経が集中してしまう。

「あ、あのホテル可愛いー！」

そう言っただけで彼女がま指差したホテルの看板には、

『ホテル キャッツ』

その下には、スマートな黒猫の絵もかかれています。

洒落たデザインの看板だけど、やっぱりホテルがホテルなだけに、いやらしく見えるのは気のせいだろうか。

「キャッツって、ニャンニャンするからなのかなあ？」

そう言っただけで彼女は俺を見上げる。

さらっと下ネタ言っただけ、この人……

「そうなんすかね」

俺は答えて、彼女を見た。

俺を見上げる彼女の顔は、予想以上に可愛いくて、不意を衝かれて余計にドキリとしてしまった。

「じゃあ行こー」

そうして引っ張って行かれ、俺らは『ホテル キャッツ』に入っ
た。

キャッツという名前のくせに、他のホテルと大して変わりなく、名前なんて関係ない雰囲気だった。

「ホテルって久々。ベッド大きい！」

部屋に入って、彼女はやたらとテンション高く、中央にあるベツドにダイブした。

その瞬間、彼女のスカートの裾が捲れた。

ピンクに白レース……

見せちゃってもいいんすか！？

「ん……」

彼女は、ベッドの上でごろりと寝返りを打って俺に背中を見せる。

見るからに、無防備なその姿……（おまけで太ももの際どいラインのチラリズム付き）

俺は、ベッドに片膝をそっとついて、彼女に近づき、手を伸ばした。

「あ」

突然彼女の体が起き上がり、俺は驚いてはねのいた。

「シャワー浴びないと。あたし先に浴びていい？」

俺に振り返り、彼女はそう言った。

「うっ、あっ、ハイ！」

俺は狼狽えて言葉を噛み、声を裏返しながら頷いた。

「じゃあ行つて来まーす」

彼女は、ベッドから下りて、鼻歌混じりに風呂場に向かった。

彼女が居なくなつて、俺は頭を抱えた。

俺……今、普通に何しようとした？ていうか、何でここまで来ちゃったんだ？

いや、でもあんな風におっきいおっぱいくっつけて引っ張られて、ふりほどけるか？

無防備でむしろ自由にご勝手にパンツとか足とか見せられて、手が伸びないなんて有り得るか？

男なら、それも健全な男子なら、どっちもノーだ。そのはずだ、多分。

て、ことは、だ。

こうなつたからには、欲情するのが当たり前だ。それが自然の摂理！何も恐れることはない（はず）！

ここまできたら、やることは一つしかない。

しかも、相手も了承してるみたいだし……ここでやらなきゃ男が廃るってか！？

……と、考えていると風呂場のドアが開く音がした。

そっちの方を向くと、バスローブに濡れ髪で、さっきまで着ていた服を持っている（ちらつと下着類も見えたから、多分下はマッパだ）彼女が現れた。

「お先に出たよ」

髪を拭きながら彼女は俺に向かって言う。

化粧がシャワーで全部落ちて、彼女はスッピンだった。

でも、『誰！？』と言うほどの大差はなくて、印象が少し幼くなっただけだった。

それもまた何か可愛くて、またもや俺はドキッとしてしまった。

「あ、シャワー浴びて来る？」

「え！？ …… あつ、はい。浴びます」

俺は必要もないのにやたら畏まって、敬語で頷いて、風呂場へと行った。

頭から熱いお湯を浴びながら、俺はうなだれた。

何か俺……やたらと緊張してる。

まるで、初めて彼女が出来た時みたいに、初めて彼女とキスするときみたいに、初めて彼女とセックスする時みたいに……

でも、言いようによれば、こんなことだって初めてだ。

俺は、ラブホなんて付き合ってる彼女としか来たことがない。(普通そうだけど)

もちろん、セックスもするのは彼女とだけ。付き合ってもない女の子と、一晩きり、一度きりの関係なんて持ったことはない。

なのに今ここに一緒に来てしまったのは、今日初めて会った女の人で、しかもバイト先の常連さんだ。

普段ならまだ理性がきくのに、今晚に限ってやたら興奮してるみたいだ。

どうしてなのか、全く分からない。

体をざつと洗い、俺は風呂場を出た。

脱衣所にあったバスローブを着て部屋に戻ると、彼女はさっきと同じように俺に背中を向けてベッドに横たわっていた。

寝ちゃったのか……？

俺が出たのに全く反応を示さないので、俺は初めそう思った。

俺は、そつとベッドに乗り、彼女のそばに寄った。

もし寝てしまったなら、間違いが起きる前でよかったと思ったけど、残念がついている自分がいるのも確かだ。

本当にどうかしてる……

彼女を覗き込んでみると、目をつぶっていて、やっぱり寝ているようだった。

胸元が少し開いていて、谷間が見える。裾からは、白い足がむき出し状態になってる。

無防備全開の、その姿を見て、俺はもう生殺し状態……着々と、体の方の準備ができてきつつある。

無意識に……言い訳じゃないけど、本当無意識に、俺の手は彼女の方に伸びていた。

男としての悲しい性……やっぱり、俺はこんな状況で我慢出来るほど、大人でも紳士でもない。

俺は彼女の腰のあたりから、体のラインをなぞった。

ウエストはキュウツとしまっていて、それでいてやっぱりおっぱいとか、お尻の方は柔らかそうに膨らんでる……

理想的な女の人の体型……

「ん……」

俺が触ってるのに気付いてなのか、彼女はゆっくりと目を開いた。

一瞬ヤバいと思った。それぐらい、俺はやましいことをしているんだ。もし、彼女が我に返って冷静になっていたら……

しかし、彼女は仰向けになってトロンとした目で俺を見ると、とても優しく微笑んだ。

もう我慢の限界です。

俺は、バスローブの上から彼女の胸を触った。

彼女の体は、ほんの少し反応したけれど、抵抗はされなかった。

そのまま俺は彼女に覆い被さって、彼女にがつついてしまった。

おっぱいは俺の手でも余るくらいの大きさと、肌が綺麗ですべすべしていて、揉むとマシユマロみたいに柔らかかった。

すぐに乳首は固くなって、それを指で触るたびに、彼女から小さな声が聞こえた。

そういえば、元彼に不感症って言われたって言ってたけど本当にそうなのかな……

変に興味がわいて、俺は彼女の下半身に片手を伸ばした。

「あっ……」

内ももに手が当たっただけで、彼女の体がピクリと動いた。

俺はそのまま手を滑らせて、女の人のアソコに触れた。もうそこ

はしつとりとしていて、手を動かすとどんどん濡れてくる。

「や……ダメ……あつ……」

彼女から、一際大きな声が出る。彼女の一番弱い所を見つけた。

「いやっ……んっ……」

彼女は眉間に皺を寄せて、唇を噛み締めて俺の下で体をくねらせている。

その顔が、その動きが、とてもセクシーで、それだけで俺の臨界点は突破してしまった。

俺は、彼女と一つになって、情けないくらいにあつという間に果ててしまった。

一通りのことが終わった後、ほぼ同時に果てた彼女の荒い呼吸が、俺の耳元で聞こえる。

俺が彼女の上で動いていると彼女の腕が俺の首に回って、必死にすがりつくように抱き締められた。

すぐに果ててしまったのは、その状態で耳元で色っぽい喘ぎ声を聞いていたから、余計に興奮してしまったのもあると思う。

そして今も、彼女の腕は俺を離さず、まるで恋人同士のようにピッタリとくっついている。

耳に彼女の熱い息がかかって、俺はまたも興奮して、その気にな

れば、もう一回出来そうだな。

本当にどうかしてる。

俺は、いくらタイプの女の人でも、彼女じゃない女の人には欲情したことなんてなかったのに……いくら今は彼女が居ないからと言っても……どうして今日は、こんなに興奮して、やっちゃったんだろっ……

俺はそつと彼女の腕を解くようにして、体を起こそうとした。

彼女の腕は、いとも簡単に解けたけど、今度は彼女の手が、俺の首から滑って顔へ行く。

そのまま俺の顔を、彼女の両手が挟むように、するりと撫でられた。

今度は一体何なんだろうか。

わけも分からず、そのを外そうとも出来ないで、俺は彼女を見下ろした。

え……？

そう思った時には、彼女の顔が近付いてきて、俺の唇を塞いでいた。

しかもそれは、とても濃厚なもので、彼女が積極的に舌を俺の口の中に入れて、動かしている。

口の中の隅々まで、彼女の舌が舐めまわして、舌を絡められて、音を立てて唇を吸われた。

俺は、まさかそんなことをされるとは思わなくて、呆然と固まって、彼女にし返すこととか出来なくて、されるがままになってしまった。

しばらくそうされた後、彼女はゆっくりと唇を離した。彼女の唇は、濡れて光っている。

思わず見とれていると、彼女の唇はゆっくりと開いた。

「ねえ……名前、なんていうの？」

一瞬何を聞かれたか、分からなかった。

「え……」

「あなたの名前……何？」

「え……あ……旬。沖田旬」

自分の名前を言うだけなのに、どもってしまった。

俺の名前を聞くと、彼女再び、微笑んで、

「そう……旬……」

そう言っ、俺の頬を撫でた。

「旬が……あたしの彼氏だったらよかったのになあ……」

ポツリと呟いたその言葉に、胸の奥がぎゅうつと締め付けられた。

「あつ……あなたは……」

ちゃんとした言葉で、彼女の名前を聞き返したいのに、もどかしいぐらいに、上手く話すことができない。

でも、彼女は分かってくれたみたいで、ゆっくりと口を開く。

「あたしはね……ナツミ」

彼女の目が段々とトロンとしてきて、声も小さかった。

だけど俺は、聞き逃さなかった。

「ナツミさん……」

「ん……」

ナツミさんは、返事をしてくれたかどうか微妙な声を出して、目を閉じてしまった。

俺の頬からもするりと手が滑って落ちた。

「ナツミさん？」

返ってきたのは、ゆっくりとした寝息だった。表情も無防備なほどに優しくて穏やかだった。

ヤバイ……

気付けば俺は、目の前のこの彼女に、恋に落ちてしまっていた。

4 運命の人

おかしいって思うんなら、勝手に思っておけばいい。
俺だっておかしいと思う。

だって、ミキと別れてそんなに経ってないのに、こんなにすぐに好きな人ができるなんて、思いもなかった。

しかも、その相手は、今日初めて会って話をして、お互いの名前を知る前にホテルでヤッちゃった人だ。

それに今だって、彼女は『ナツミ』としか言わなかったからフルネームは知らない。

それでも俺は、彼女に恋してしまった。

別に、ヤッちゃったのが先だったからって、体目当てってわけじゃない。

そりゃ、スタイルはめちゃくちゃ俺好みではあるけど。

でも、顔とか、スタイルだけでなく、ナツミさんの存在そのものが、悉く俺のツボにハマっていた。

今まで、彼女以外の女の子とやるなんて、無意味としか思えなかったのに、ナツミさんとは最後までできたのは、俺自身気付かないままに、ナツミさんに惹かれていたからだと思う。

ぶっちゃけ、一目惚れ？ いや、一目ではないか。

でも、ナツミさんは俺の『ストライクゾーン』なんじゃなくて、
『超どストライク』。

野球で言うなら、ノーヒットノーラン。ワールドゲームで完封勝利。

ボーリングで言うなら、パーフェクト。
それぐらいだ。自分で言って意味分かんないけど。

とにかく、ナツミさん以上の人は、俺のこの十八年間の人生に現れなかったし、これからも現れないと、直感的に思ったんだ。

この気持ちに気付いたのは、あの瞬間。

『旬が……あたしの彼氏だったらよかったのになあ……』

そう言われたのか、単純に嬉しかった。

あの言葉は、俺を受け入れて俺を必要としてくれたものだったから……

そういう風に、誰かに必要とされることがこんなにも嬉しいことなんて、思いもしなかった。

そして、それ以上に、あの瞬間から俺にとって彼女が必要な存在となってしまった。

欲しくて欲しくて、たまらないよ。ナツミさん……

「ナツミさん、起きた?」

翌朝、目を覚ますと、ナツミさんのが先に起きていたので、俺は体を起こしながら声を掛けた。

やっぱり、昨夜久々にやったせいで体がだるい。

「何で名前知ってるの……？ ていうか、誰？」

ナツミさんは、シーツで裸の体の前を隠そうとしながらそう言った。

別に隠さなくても、昨夜全部見たのに。

それよりも。

「ナツミさんから聞いてきたのに……？ もしかして俺の名前覚えてないの？」

そう聞いたら、ナツミさをは黙って頷いた。

軽くシヨックだった。

やっぱり、ナツミさんは酔ってたし、覚えてないのか……

あの嬉しい言葉を言ってくれたのも……覚えてないってことか……

でも、昨夜は余裕がなかったっちゃった感じだから、よかったっていえばよかったかも……

「……ていうか、私達……やっちゃったの？」

俺は、昨夜のことを思い出す。

「うん」

思い出すと、自分でも分かるぐらい、にやけてしまった。

「すっげー良かったよ。ナツミさん、めちゃくちゃスタイルいいし、感度最高だし。不感性とか言った男、バカだなあ」

本当、バカだよ。不感症はお前じゃん。

ナツミさんは、お前が思ってるより、ずっと魅力的な人なんだから。

「ナツミさんも気持ち良さそうだったし、やっぱり下手だったんだよ。元彼と別れて正解じゃん」

「う……ごめんなさい!」

いきなり、ナツミさんに謝られた。

「なんか酔って迷惑かけちゃって……」

そう言いながら、ナツミさんはベッドの下の方にあったバスローブ羽織った。

「り、料金は払うから……本当にごめんなさい!」

「待って」

ベッドから降りようとしたことナツミさんの手首を、俺は掴んでいた。

「え……?」

「ナツミさん。俺と付き合って」

俺は、考える前にそう言っていた。

多分、本能的にここで言わないと思って思っ、口が動いたんだ。

「えっ？」

ナツミさんは、元々はつきりしてる目を、更に大きく見開いていた。

「順番逆になったけど……でもそのおかげで惚れたっていうか。だから俺と付き合っ」

『惚れた』とか、めったに口に出したりしないから、ちょっと変な感じだった。

でも、俺の気持ちは、その言葉通りのもので、こう言うのが一番しっくりくる。

「何言っ……」

ナツミさんは固まっていた。

そりゃ確かに、きっとナツミさんにとっては、こんな状況で、初対面同然の男にいきなり告られても、困るだけだと思う。

それでも、ナツミさんに俺の気持ちをちゃんと伝えたかった。軽い気持ちじゃなくて、真剣なんだって、分かって欲しかった。

「俺と付き合っして下さい！ お願いします」

俺は、きちんと正座して、ナツミさんに頭を下げた。

俺なりに考えた、誠意の込め方……ナツミさんに伝わって欲しいという、そんな気持ちだった。

「ちよっ……やめてっ。顔上げて……」

ナツミさんの言葉にも、俺はそのままだった。

「やだ。ナツミさんがいいって言うまでこのままでいる」

後で思ったことだけど、これじゃあ誠意を表すっていうより、ただの迷惑行為だったかも……

その時は、そんなことを考える余裕なんてなくて、必死だったただけけど。

「そんなこと言われても……ねえ、とりあえず一回顔上げて？」

何を言われて、肩を揺すられたりしても、俺は頭を上げなかった。俺が待ってるのは、『いい』っていう言葉だけ。

『いい』っていう……

「ねえ、もういいから」

俺はすぐさま反応して、頭を上げた。

「いいの？」

本当に、ナツミさんと付き合えるの……？

ナツミさんが、俺の彼女……？

「やったー……！」

どうしようもないくらい嬉しくて、俺はナツミさんに抱きついた。勢い余って、倒れ込んでしまったけど、気にしない

「きゃっ！ やだ…そうじゃなくて……っん！」

ナツミさんが何か言っているのも、俺には聞こえてなくて、俺は夢中でナツミさんにキスをした。

「すっげー嬉しい！ ナツミさんが俺の彼女になるなんて」
唇を離してそう言っていると、何だか違和感があった。

「あ、付き合っただったらナツミさんってさん付けじゃなくていいか。ナツミ……ナツ。なあ、ナツって呼んでいい？」

付き合っんなら、呼びやすいように呼び合いたい。俺は愛称を考
えた。
っていうほどビネリないけど

「うん……」

ナツミさん……いや、ナツは頷いてくれた。

「ナツ……」

嬉しさとナツへの愛情（何か恥ずかしっ）を込めて、俺はナツの口とか、おでことか、ほっぺたに、たくさんキスをした。

今、俺の下にいる人が、俺の好きな人だと、それが彼女だと思っ
たら、とても愛しく思える。

昨日の今日でそうなるなんて、不思議だ。

このままナツを抱き締めて、また、一つになりたい。そう思った。

「あっ！」

ナツはいきなり叫んで、勢いよく起き上がった。その拍子に、俺の体が離れる。

「今何時!？」

ナツはベッドの側に付いていた時計を見る。

八時三分だった。

「嘘っ……もうこんな時間なの!? 仕事行かないとっ……」

ナツは慌てた様子でベッドを降りた。

あたしの服どこ!? とか、あっ、どうしよう、スッピンだ……
…とか言いながら、ナツは部屋を駆け回っている。

俺は拍子抜けして、呆然とその様子を見ていた。

「ごめんねっ……お金ここに置いておくから……」

急いで着替え終わったナツは、電話台の上に万札を置いて、部屋を出て行った。

俺は一瞬お金の意味が分からなくて、でもすぐにホテル代のことだと理解した。

止める隙もなかった……なんか、いきなり現実戻されたようだ。

「あ……」

俺は、重大なことに気付いた。

一番大事なことを、忘れていた。

俺は、彼女の連絡先を知らない。

5 俺の彼女

忘れてたっていうか、聞く暇がなかったというか……何にせよ、失敗だ。

普通、有り得るか？付き合い始めた彼女の連絡先を知らないで別れるなんて……

有り得ねーっての。

マジでどうしょ。これじゃあ、もしかしてもう会えないんじゃない……

ウソだろ……？

ちょっと待てよ。何、付き合い始めて五分ちよいで自然消滅？短すぎだろ。いや、長さの問題じゃなくて……

これって、結構危機的な問題なんじゃ……

どうしょ……

とりあえず、そろそろ終了時間になるから、俺はベッドから下りて服を着ようとした。

ふと電話台の方に目をやると、彼女が置いて行ったお金に目が行った。

二万円も置いて行っている。俺も出すから、こんなにいらぬのに……

ていうか、ナツもこういうのはすっかりしてるのに、連絡先のことかは全然頭になかったのかな……

やっぱり、付き合ってくれるのは、しょうがなく、なのかな……

俺は、ため息をついて、下を向いた。すると、そこにあるものを見つけた。

それは、白い携帯電話だった。

これってもしかして……ナツのケータイ？

お金出す時に落として、気づかずに行っちゃったとか？

俺は、とりあえずそのケータイを開いてみて、このケータイの個人ナンバーを出してみた。

『柏原奈津美』

その名前が表示される。

やっぱり、ナツのケータイだ。

ていうか……名字柏原っていうのか。名前も漢字で書くところいう字なのか……。

うん。結構イメージぴったりかも。

あ、登録しとこ

俺は赤外線で（勝手に）ナツの番号とメールアドレスを俺のケータイに送

って、ナツのケータイにも（勝手に）俺の番号とメールアドレスを登録しておいた。

……て、登録したところで結局は連絡の取りようないじゃん。

ホテルを出て、とりあえず家に帰りながら、俺は今更なことに気付いた。

いや、でもナツだってケータイなかったら困るだろうし、俺が持つてたらまだ会える可能性はあるだろ。

「ただいまー」

家に着いた俺は、玄関で靴を脱ぎながら、いつもの習慣でそう言う。

「あら、旬。今帰ったの？」

ちようど母親が廊下掃除をしていて、俺に声をかけてきた。

「遅くなるのはいいけど、電話の一つでもいれなさいよ」

「へいへい」

俺は適当に返事をしながら家に上がった。

うちは基本的には自由だから、朝帰りなんてしても全然平気だ。何も言わなくてもこの程度だし、『今日は帰らない』とかだけでも

ちゃんと連絡したら本当に何も言われない。

「あ、旬。あんた専門学校の願書とかちゃんと書いてるの？ ギリギリになって忘れてたなんてやめてよ」

言われてその現実的なことを思い出した。
すっかり忘れてた。

「うん。大丈夫だって」
そう言って、俺はリビングへ行き、朝飯に菓子パンを二つ持って、自分の部屋に行った。

現実的なことと言えば、今俺の中で一番大事なのはこっちだ。

ベッドの上にナツのケータイを置き、パンを頬張りながらそれを見つめる。

また会える可能性はあっても、問題はそのきっかけがないんだよなあ。

やっぱこっちからは連絡の取りようがないわけだし。

「あーあ……やっぱ待つしかねえのかなあ……」
独り言を言いながら、俺はケータイの隣に寝ころんだ。

すると、ちょうど腹も満たされたこともあって、俺はすぐに眠り込んでしまった。

次に目が覚めたのは、時間はいつか分からなかったけど、ケータイが鳴る音でだった。

鳴ってもそのままにしている、なかなか鳴り止まないから、電話のようだ。

俺は、目を閉じたまま手探りでケータイを取って、開いて通話ボタンを押して、耳に当てた。

「はい？」

いつもと違う着信音に、いつもと微妙に違う勝手に、何かおかしいとは思ったけど、寝ぼけていたせいで、それに気付いたのは電話の向こうの相手の声を聞いた後だった。

「あの……その携帯を落とした者なんですけど……」

一瞬で目が覚めた。

俺は体を起こし、電話を耳から離して見た。俺が出たのは、ナツのケータイだ。画面の着信は、『三枝カオル』になっている。

でも、電話の向こうの声は、間違いなくそのナツ本人のものだった。

「もしもし……もしもし……？」

「あっ……ごめん、ナツ」

俺は慌ててケータイを耳に戻す。

「え……？ えっと、誰ですか？」

ナツの混乱したような声が聞こえる。

あ、そうだ。ナツには俺だって分かってないんだ。

「俺。旬だよ」

「え……あ……朝、の？」

ナツの声は探り探りな様子だった。

やっぱりまだ付き合い始めだし、しょうがないか。

「うん。そう。で、ナツ。ケータイ落として行っただろ」

俺は、とにかくナツとまた話せたのが嬉しくて、口が勝手に動くぐらいの勢いで、ナツに話し掛けた。

「あ、やっぱり落としてたんだ……どこに落ちてたの？」

ナツが俺の言ったことに食いつくような反応でそれだけで嬉しかった。

自分のケータイのことだから、当たり前だけど。

「ホテルの部屋の電話台んどこ。多分、ナツが財布出した時にでも落ちたんだよ」

「そっか……」

「なあ、ナツ。今どこにいる？」

「え……会社だけど……」

「どこ？ 俺、届けに行くよ」

もちろん、これはナツに会いたってだけの口実だ。
まあ、どっちにしろ会わないといけないし。

「え……いいよっ！ 一応まだ仕事だし……」

「じゃあナツの仕事終わったぐらいに行くよ」

「でも……」

気を遣ってるのか、ナツはなかなかうんと言ってくれない。

「いって、全然。俺、暇だし。ていうか、俺が会いに行きたいんだ。ナツに。それじゃだめ？」

正直、ケータイを届けるってことより、そっちの方が重要だから、俺は素直にそう言った。

「えっ……」

ナツは驚いたような声だった。

「だめ？」

「そっいつわけじゃ……」

「じゃあ、いい？」

「う……うん」

「やった！ んじゃどこ行けばいい？」

「えっと……会社は　　ってとこ。　××町のところなんだけど分かる?」

××町……あのへんか。家からそんな遠くないな。

「うん。分かった!　何時頃終わる?」

「五時ぐらい……」

「オツケー!　んじゃ会社の前で待ってるな!」

「うん……あ、そろそろ戻らないと」

「あ……そっか……」

せっかく連絡できたから、本当はもっと話したいけど、我慢しないしょうがない。

「じゃあ、仕事頑張って。また後でな」

「うん。また……」

電話を切って、時計を見ると一時前だった。

まだ四時間もある。早く会いたいな。

その時ちょうど、腹の虫が鳴ったから、俺はとりあえず昼飯を食べにリビングへ行った。

今、四時二十七分。

俺は、ナツの会社の真ん前にいる。

本当は五時十分前ぐらいにここに着けばちょうどいいぐらいだけど、それまですることが無さ過ぎて、早くに家を出てしまった。

ていうか、ナツに会いたいと思ったらいてもたってもいられなかったんだ。

まあ、俺が早く来たってしょうがないのは分かってるけど。

本当に、こういう時の時間が経つのは遅い。さっきから、二分に一度ケータイで時間を見てる。

待ちきれなくて、中に入ってみようかと思ったけど、警備員らしき人がいて（しかもかなり顔が怖い）、社員証かなんかがないと入れないっぽいから、近寄るに近寄れない。

そもそも入っちゃいけないのは分かってるけど。

俺は、会社の前の歩道と車道を区切るガードレールにもたれかかって、時間が過ぎるのを待った。

それにしても……でっかい会社だなあ。

俺は目の前のビルを見上げて思った。

よく考えたら、社って聞いたことあったかも……俺でもきい

たことあるんなら、結構有名ってことだよな。

ナツってこんなすごいトコで働いてんの？

「あっ……」

色々考えてるうちに、やっと時間が過ぎてくれたらしい。
会社の中に、歩いているナツを見付けた。

ナツは、早足で歩いて出入口に向かっていている。俺もそれに合わせて、ガードレールから離れて、ビルに近寄った。

「ナツ！」

ナツが出てきたと同時に俺はナツを呼んだ。
ナツは、すぐに反応して俺の方に向いた。

「仕事お疲れ！」

「あ……うん」

ナツの目の前に立ってそう言った俺に対して、ナツは少し緊張した表情だ。

「あ、そうだ。はい。ケータイ」

俺はGパンのポケットからナツのケータイを出して、ナツに差し出した。

「あ、ありがとう」

ナツはケータイを受け取る。

「何か、ごめんね？ わざわざ来て貰っちゃって……」
ナツは俺の顔を見上げてそう言った。

その顔が可愛くて、俺はときめいた。

「うん！ 全然！ 言っただろ？ 俺、暇だから」
思わず興奮して、声が強くなってしまう。

「それより、ナツ。今日はもう帰るの？」

「うん。そうだけど……」

「じゃあ、送ってくよ」

「えっ……そんな……いいよっ！ わざわざここまで来て貰ってるのに、そこまで……」

ナツは首と手を横に振って断ってきた。

軽くシヨックを受けた。

一応、付き合い始めたはずなのに、やっぱり、ナツはちょっと遠慮きみな感じだ。

それでも、ここで引いたら負けだ。

「送るよ。もう暗いんだから女の人危ないし。……ていうか、俺が送りたいだけだけだよ」

俺は気持ちだけほんの少し強めにそう言った。

「……じゃあ……うん。お願いしよう……かな」
ナツは、急に下を向いて、小さくそう答えた。

よし！ と、俺は心の中でガッツポーズをした。

俺達は、並んで歩き始めた。
やっと形だけでも恋人っぽくなった。

「あ、そうだ。ナツのケータイに俺の番号とメアド入れておいたから」

念のため（ていうか、言わないといけないことだけど）俺はナツにそう言っておいた。

「え……あ……そう」

ナツは、微妙な反応をする。（そりやそうか）

「ナツって名字柏原っていうんだな。昨日は下の名前しか聞いてなかったから今日初めて知った」

空気を悪くしないように、俺は必死に取り繕ったように話をした。

「……うん。ねえ……あの、旬君？」

ナツが俺の方を見て、話し掛けてきた。

「なに！？ なになになにー？」

俺は嬉しくて、必要以上に食い付いた。

「あの、あたしは……旬君の名字知らないんだけど」

ショック……

俺、昨日フルネームで名乗ったはずなのに……

いや、でもナツは昨日のことは覚えてないっぽいんだった。朝なんか『誰?』だったし……

「沖田だよ。沖田旬」

シヨックなことは置いて、俺は笑ってそう答えた。
今は知らないことの方が多いんだし、これくらいどうってことない。これから、知っていつて貰えばいいんだから。

「沖田、旬君……?」

確認するように、ナツは俺を呼んだ。

「うん!」

俺は頷く。

どうしてだろう……。

ただ名前を呼んで貰ったってだけなのに、しかも名前を忘れられて、覚え直されただけなのに、それがすごく嬉しい。

「ねえ……旬君って、年いくつなの?」

ナツにそう聞かれた。

ナツの方が俺に興味を持ってくれてるみたいで、それもまた嬉しかった。

「俺、十八だよ」

思わずにやけながらそう答えると、ナツの表情は固まっていた。

「十八……? ってことは高校生?」

ナツの顔は引きつっていた。

もしかして、年下って引かれてるのかも……

「今はまだそうだけど……でも今月で卒業だから。今年十九になるんだ」

俺も意地で、もう高校生じゃ……子供じゃないってことを少しでもアピールするように言った。

「そう……」

でもやっぱり、それぐらいのことでナツの俺に対するイメージが変わるわけもない。

「ナツは？」

俺は、気にしないように話を進めた。

「え？」

「ナツはいくつなの？」

女の人にこんなことを聞くのは失礼かとも思ったけど、彼女の年を知らないままにいるわけにもいかないと思ってそう聞いた。

「あたしは……今、二十二」

少し声が小さかったけど、ちゃんと聞こえた。

今二十二ってことは、俺と四つ差か。

うん、全然オッケー。俺的には全然いける。ナツなら俺のいくつ上だろうが下だろうが関係ない。

愛さえあればそんなん関係ない！

「でもナツってすげーよなあ。社っていったら結構有名じゃん。そんなところで働いてるとかビックリした」

俺は、色々話したいことがたくさんあるから、思いついた順に話す。

「ううん。そんな、すごいって言えるほどのことはないよ。つて、すごいのは本社だけだから。うちの会社は支社だし……それにあたしだって事務の仕事だから雑用ばっかで全然大したことないの」
ナツは大したことないって言うけど、俺からしてみれば十分すごいと思う。

一流だろうが二流だろうが、ちゃんと就職して稼ぐなんて、今の世の中じゃ難しいんじゃないか。

それに、よく見たらナツって服とか、鞆とか……キレイなもんばっかだし……わりと稼いでるんじゃないか？

ホテル代とかすつと二万も出せるぐらいなんだし

「あっ！」

そこまで考えて、俺は重要なことを思い出す。

「どうしたの？」

いきなり俺が叫んだから、ナツは驚いた顔をしている。

「こんなところで悪いけど、俺、ナツに金返そうと思ってたんだ」

「お金……？」

ナツは首を傾げる。

「ナツ、今朝二万も置いてただろ？ 俺、半分出したから、その残り」

俺はGパンのポケットから財布を出した。

「あ……ああ……」

ナツは思い出したように頷く。

「はい」

「ありがとう」

俺が渡した一万数千円を受け取ると、ナツは鞆から財布を取り出して、金をしまった。

その財布も、俺でも知ってるようなブランド物のものだった。

俺は思わず自分のと見比べる。

俺のは、三年ぐらい使い古してる、当然のようにノーブランドのもの。確か、三千円ぐらいだったと思う。

全然違うじゃん。

……もしかして、俺ってナツより大分レベル低い？

ただでさえ、ナツより年下なのに……

ちよつと俺、専門学校とか行ってる場合じゃないんじゃない……

働かねえと！

漠然とそう思った。

ナツより稼ぐとか……それは出来なくてもせめてナツに釣り合うようになんねえと……

「ねえ、旬君」

「何!？」

ナツが俺を呼んでくれるというだけで、俺はすぐさま反応する。

ナツはちよつと目を丸くしながら、

「旬君は、春から大学生？」

そう言った。

「ううん。働く」

俺は即答する。ついさっき決めたばかりのことだけど。

「一応受験はしてたんだけど、全部落ちたからさ。浪人とかしてたら金かかるし」

俺はそうナツに言うておく。

本当の理由なんて、こっばずかしくて言えないし。

「そっかぁ……」

ナツは俺の言ったことに納得したように頷いた。

あ、俺達、普通に会話できてんじゃん。
ナツの方から結構話ふってきてくれるし……しかも俺がらみのことだし？

全っ然心配ないじゃん。むしろ、絶好調なくらいだし

「あ……旬君」

早速きた！ 再びきた！ ナツの方から話題くれた！

「なにになに？」

俺はまたもや嬉しくて速攻で返事をする。

「あの……変なこと聞くけど……お昼に、あたし電話したじゃない？ あたしのケータイに。その時、あたし友達のケータイからかけたんだけど……何であたしだって分かったの？」

俺は昼間のことを思い出す。

そういえばあの時の着信って、違う人の名前だったっけ……

「うん。初めはさ、寝ぼけて自分のケータイが鳴ってると思ってとったんだよ。俺あの時寝てたから……でも分かるよ。ナツの声だから。あの時、一番聞きたいって思ってた声だったからさ」

自分で言って、ちょっと照れた。ていうか、恥ずかしっ！

「何言ってるんだろうな、俺……」

さすがに引かれたら困ると思って、俺は笑ってごまかそうとした。

ナツの反応を見ると……

「あれ……ナツ？」

ナツの顔は真っ赤になっていた。

「へ……変なこと言わないでっ……」

ナツはそう言って恥ずかしそうに下を向いた。

横を向くと、耳まで真っ赤になっているのが分かった。

その様子は、俺のツボに見事に、直撃した。

可愛すぎる……反則技だっ、それは……

今すぐにでも、抱きしめたい衝動にかられる。

思いつきり抱きしめて、頬ずりして、色んなところ撫で回したい…

…！

「あ、あたしここだから」

俺が自分と闘っていると、ナツがそう言って立ち止まる。

そこは、マンション……というより、コーポっていうのか。五階建ての建物の前だった。

「……」

「うん。二階の三階」

もっかいちゃったのか……

「部屋まで送るよ」

「うん。大丈夫。いいよ、ここで」

俺としては、あと数秒でもナツと一緒に居たかったから言ったのに、ナツは首を横に振った。

「そっか……」

しつこく言っただけでウザがられるのも嫌だったから、ここは素直に引いておいた。

「あとで電話していい？」

俺的に控えめにそう言っただけで、ナツは何でかまた赤くなって、

「うん」

と頷いた。

理由はわかんないけど、それ可愛すぎですから！

「それじゃあ、ね。送ってくれてありがとう」

俺がまた抱きしめたい衝動にかられていると、ナツの方からそう言われた。

「あ、うん。じゃ……またな」

やっぱり少し名残惜しく、言葉を交わすと、ナツはコーポの中に入ってしまった。

俺はそれを見届けると、家に向かって歩き始めた。

ナツは、可愛すぎる。いや、本当、マジで。

今日1日で、しかも付き合い始めて一目で、ナツのことをほんの少ししかしることが出来なかったけど、俺の中のナツへの気持ちは、ものすごく膨らんでいた。

それでもまだ足りないくらいに、俺はナツのことを知りたいと思っていた。

こんな気持ち、初めてだ。

6 新しい彼氏（奈津美サイド）前編（前書き）

旬のサイドストーリー……ではありますが、せっかくなので、奈津美視点の話も書いてみました。（こっちは奈津美の一人称です）
長くなってしまったので前後編に分けます。

6 新しい彼氏（奈津美サイド）前編

意味も分らないうちに、あたしには新しい彼氏ができてしまったらしい。

それは、今、あたしの上にいる、名前も知らない男。

彼は嬉しそうに、あたしに何度もキスをしている。

普通なら、名前も何も知らない男にこんなことされたら嫌悪感で一杯になるだろうけど、どうしてかこの時は、抵抗しようとか想わなかったし、嫌な気分にもならなかった。

それどころか、そうされてることが妙に心地よくて、落ち着いていた。

こういう風にされるのって久しぶりかも……

あいつ（元彼）は、全然こんなことしなかったし……

……って、元彼のことを思い出したら、ものすごく嫌な気分になった。

最悪……もうあんな男のこと思い出したくないのに……

あんな男っ……できるのは仕事ぐらいじゃない！

……仕事……？

「あっ！」

あたしは叫んで、体を起こした。

「今何時!？」

あたしはベッドの側に付いていた時計を見た。

八時三分……

「嘘っ……もうこんな時間なの!？ 仕事行かないとっ……」

『仕事』で重要なことを思い出した。

今日は思いっきり平日。出勤しないといけない日。

それに、いつもなら、もうとっくに家を出てる時間だ。

あたしは急いでベッドから降りた。

「あたしの服どこ!？」

部屋を駆け回りながら、あたしは自分の服を探した。

昨夜の記憶がないから全く分からない。

でも、幸いすぐにハンガーにかけてあるのを見つけて、あたしはすぐに着替える。

着替え終わって、ふと近くの鏡を見ると、自分の顔が映った。

「あっ、どうしよう、スッピンだ……」

酔ってたはずなのに、きちんと服をハンガーにかけてたり、肌のために化粧も全部落としてたり、やることはきちんとしている自分が、この時ばかりはちょっと憎らしかった。

今はとにかく時間がないからしょうがなく、会社に行ってから化粧をしようと思って、とりあえずあたしは支度を急いだ。

鞆を持つて、ふとお金のことが頭をよぎって、

「ごめんねっ……お金ここに置いておくから……」

それだけ言って、電話台の上に適当にお金を置いて、部屋を出た。

その時はあまりにも急いでいたせいで、すっかり色んなことを忘れていたのに、気づきもしなかった。

「奈津美、おはよー。今日はいつもより遅いじゃない」

ロッカールームへ行くと、先に来ていたカオルに声をかけられた。

幸い、ホテルが会社とそんなに離れていないところにあつたおかげで、タクシーを使って何とか時間ギリギリにここまでこれた。

「うん……ちょっと色々あつて……」

あたし自身よく分からない事情を、しかもことがことだけに、カオルに言えるわけではない。

だけど、カオルは予想以上に目聡かった。

「あれ？ 奈津美、昨日と服一緒じゃない？ ……しかもスッピン？」

カオルからの鋭い指摘に、口から心臓が飛び出そうなくらいに驚いた。

「あ……もしかして……？」
カオルはにんまりと笑う。

何を考えているのか、大体は予想がついた。ていうか、あたしのこの状態はそれしか連想させないから、しょうがないけど……

「なにになに？ 昨日は何があつたの？」
カオルは、じりじりとあたしに詰め寄ってくる。明らかに、面白がつてる顔だ。

「ナっなにつて別に何も……」
声が裏返ってしまい、自分でも動揺してるのが分かる。

「何もつてことはないでしょ？」
更に詰め寄られ、背中のに汗が流れるのを感じた。

「ちょ……ちょっと、そんなことより化粧させてっ。着替えもまだだし……」

あたしはそう言つて話をそらそうとした。

すると、カオルは意外とすぐに引いてくれた。……と、思ったのは間違いだった。

「ま、今は確かに時間ないからいいけど？ あとでじっくり聞かせてもらうから」

カオルはそう言つて小悪魔っぽく笑顔をあたしに見せた。

「じゃ、あたしは先行くからね」
手を振ってカオルはロッカールームを出て行った。

あの調子じゃ絶対白状させられる……

そう思いながら、あたしは制服に着替えて、簡単に化粧をして、オフィスへ向かった。

「へへえ？」

昼休みあたしは社員食堂でカオルに昨日の出来事を全て話した。
というか、予想通り白状させられた。

一人で居酒屋に行つて酔いつぶれて、その居酒屋の店員に愚痴つて、その店員とホテルに行つて、朝氣付いた時には、もう全て終わった後で……そしてその男に告白されて、付き合うことになったという……覚えてる限りで全部話した。

それを聞いた後、カオルはにんまりと笑つてあたしを見ている。

「なーによお。一昨日男と別れて落ち込んでると思つたら……切り替え早いじゃない」

こういう話題が好きなカオルは、面白そうにそう言う。

「きつ……切り替えなんて……そういうつもりじゃないし！」

そう……全くそのつもりはなかった。

なのに、何でこんなことに……

「それで？ 相手ってどんなの？」

カオルに興味津々な聞かれて、あたしはふと今朝の彼を思い出そうとする。

思いだそうとしたんだけど……

「……あんまり覚えてないかも」

「は？」

あたしが呟くと、カオルは素っ頓狂な声を出した。

「覚えてないって……彼氏でしょ？」

カオルに言われて、あたしは返す言葉もない。

でも、覚えてないのは本当だからしょうがない。

「本当に覚えてないの？ 顔とか……」

あたしは必死に昨日の夜と今朝の記憶を辿って、思い出そうとする。

すると、薄ぼんやりとしていた印象が、段々はつきりしてきた。

「顔は、格好いい方に入と思うよ……ていうかどちらかと言うと可愛い系？」

そうだ、確かそうだ。

男のわりには目鼻顔立ちとか、結構整ってて、でも、印象的には、幼いっていうか、話し方のせいかな……

「へえ？ 年下？ 年上？ 同い年？」
畳みかけるようにカオルは聞いてくる。

それを聞いて考えて、あたしはふと気付いた。

「あたし……知らない」

「え？」

「その人のこと、全然知らない……年どころか、名前も……」

あたしは、急いでいたとはいえ、あの男に何も聞かずにホテルを出てきてしまった。

「え……もう一回言うけど、彼氏でしょ？」

「かつ……彼氏って言っても、あたしは別に付き合おうってわけじゃ……相手のことだって、好きどころか知らないし！」

あたしは、まるでカオルに弁解するように必死になってそう言った。

あたしは別に、あの人と付き合ってもいいって思ったわけじゃない。

冗談じゃない。何で酔った勢いで一回やっちゃった相手といちいち付き合わないといけないの。

「でも告られてOKしたんでしょ？」

「それはっ……元はといえば勘違いで……」

「その誤解も解かなくてもう付き合う方向で考えてるんじゃないの？」

それを言われたら、ぐうの音も出ない。

確かにあたしは、告白されて、勘違いされて、それからでも弁解すればいいものを、相手がもう付き合う前提で言ってきた言葉に思わず勢いで頷いてしまつて……

それでしようがなく、付き合うみたいになつて……

「でもっ……あの場では頷くしかなかったんだってば！」

そう……あんな嬉しそうな顔をされたら、後になつて勘違いなんて言う方が悪い気がして……言えるわけがない。

「ふーん。奈津美つてそんなに押しに弱いんだ。断れないような状態だったら、誰にでもOKしちゃうの」

「違うわよ！ そんな人聞きの悪いこと言わないでよ！」
あたしは、カオルの言うことに猛否定した。

そりゃ確かに、押しに弱いことは認めるけど……

「だったら何？」

「何って……その、あたしは連絡先とかも知らないわけで……」

そう言つと、カオルにため息をつかれた。

「奈津美……百歩譲って断れないにしても普通さあ、相手の名前と連絡先くらい聞くでしょ」

カオルの言うことは尤もだ。尤もすぎる。

「でも……一回聞いたのに名乗らなかったのは向こうだし（昨夜聞いたらしいのに忘れてるのはあたしだけ）、向こうだって連絡先とか聞いてこなかったし……」

言い訳かもしれないけど、これだって事実。あたしだけが悪いんじゃない。

「それもそうかもしれないけど……どうすんの？」

「どうって……どうしようもないし……」

「あ、居酒屋の店員なんでしょ？ そこに行ったら会えるんじゃない？」

「いつ嫌！ 絶対、嫌！」

カオルの発言に、あたしは首を思い切り横に振った。

「あたし昨日、酷い酔いつぶれ方したのよ！？ 他の店員とかにも覚えられてるだろうし……店長なんか顔見知りなのよ！？ 行けるわけじゃないじゃない！」

あの店には、もう二度と行かない。そう決めたのに……わざわざ行きたくななんてない。

「じゃあ、どうすんの？」

もう何度目かのカオルの問い……

やっぱり、あたしの口から出る言葉はない。

だって、本当にどうしようもない。

そりゃ、あたしが意地を張らないで店に行けば早い話だけど……
正直、そこまで執着してるわけでもない。恥を忍んでまで、行きた
くなんてない。

「もう忘れる！ 犬に噛まれたと思って忘れる！」
あたしはそう断言した。

そうだ。くよくよ考えるからどうしようもなくなるのよ。

「ふーん」

カオルは訝しげな顔になった。

言いたいことは痛いほどに伝わってくる。

あたしは手持ち無沙汰になって、椅子の後ろに置いていた鞆を膝
の上に置いて中身を漁った。

「何か相手の人カワイソー」

カオルは横から色々と言ってきたけど、あたしは気にしないフリ
をして鞆の中をいじる。

「あれ……？」

特に意識もせずに鞆を漁っていたけれど、途中で何かたりないこ
とに気付いた。

財布に、ポーチでしょ？ 手帳に、鍵もあって……あれ？

いつもあるはずのものが、見当たらない。

あたしは、行儀が悪いとも思いながら、テーブルの上に鞆の中身を出していく。

「どうしたの？」

突然のあたしの行動に、カオルは首を傾げている。

あたしは鞆の中身を全部出して、頭の血が引くのを感じた。

「……ない！ どうしようっ……携帯なくした！」

中身を全部出した鞆の中には、あるはずの携帯はなかった。

「落としたの？」

「多分……どこか分かんないけど……」

あたしは焦って記憶を辿る。

最後に携帯出したのいつだっけ……

昨日……居酒屋入った時まではあったはず。そこからは、記憶ないし……

落としたしたら、居酒屋の中？ ……ホテル？ 朝のタクシー？
それともどこか道の途中かもしれないし……

「どうしようっ……」

何にしても、あたしは途方に暮れるしかなかった。

「かけてみたら？ あたしの携帯貸すから。誰かいい人が拾ってたらどっかに届いてるでしょ」

カオルがそう言って携帯を差し出してくれた。

「あ、ありがとう」

「あたし的には拾ったのが相手の人っていうのを願ってるけどね。それか、居酒屋に落としたのが届いてるか」

携帯を受け取ると、カオルは嫌なことを言った。

「……電話したくなくなるようなこと言わないで」

そう言いながらも、結局携帯がないと困るだけだから、少し緊張しながら、あたしは自分の携帯にかけた。

「はい？」

三回目のコール音が鳴ったとほぼ同時に、相手が出た。ちよつと太い感じの、男の声だった。

「あの……その携帯を落とした者なんですけど……」

誰か分からない相手にそう告げると、何の返事もない。

「もしもし……もしもし……？」

「あっ……ごめん、ナツ」

「え……？」

やっと声が返ってきたと思ったら、馴れ馴れしくあだ名で呼ばれた。

何となく、聞き覚えのあるような……

「えっと、誰ですか？」

失礼だとも思いながらそう尋ねた。

「俺。シュンだよ」

「え……」

あたしの知り合いに、シュンなんて男は居ない。

その時、頭に過ぎったのは、朝の出来事だった。

「あ……朝、の？」

あたしは一か八かでそう尋ねてみる。

「うん、そう。で、ナツ。ケータイ落として行っただろ」

なんて偶然なんだろう……

あたしの携帯を拾ってくれたのが朝の人で安心したような、そんなでもないような……

ていうか、カオルの言った通りになってるし……

「あ、やっぱり落としてたんだ……どこに落ちてたの？」

頭の片隅では少し違うことを考えながら、あたしは彼に尋ねた。

「ホテルの部屋の電話台んどこ。多分、ナツが財布出した時にでも落ちたんだよ」

「そっか……」

あの時か……

急いでたから気づかなかったんだ。

「なあ、ナツ。今どこにいる？」

「え……会社だけど……」

いきなり聞かれ、あたしはとっさに答える。

「どこの？ 俺、届けに行くよ」

そのいきなりの発言に、あたしは驚いた。

「え……いいよっ！ 一応まだ仕事中だし……」

まさかそこまで言われるとは思わなくて、あたしは何故か焦りながらそう言った。

電話だから別に必要もないのに、首も思い切り横に振っていた。

「じゃあナツの仕事終わったぐらいに行くよ」

「でも……」

こないきなり会うなんて、何となく会いづらいと言つか、なん
というか……

「いって、全然。俺、暇だし。ていうか、俺が会いに行きたいん
だ。ナツに。それじゃだめ？」

「えっ……」

さらりと言われた言葉に、あたしは言葉を失った。

『俺が会いに行きたいんだ』

頭の中でリピートし、顔が熱くなるのを感じた。

「だめ？」

「そういうわけじゃ……」
思わずそう言っていた。

「じゃあ、いい？」

「う……うん」

頷いてしまった。

というか、この状況もまた、朝と同じように頷くしかできない。

「やった！ んじゃどこ行けばいい？」

あたしが頷いただけで、シュン君は朝のように喜んでいる。

「えっと……会社は　　ってとこ。××町のところなんだけど分か

る？」

あたしは自分分からない。どうしてこうまで流されまくりなのか……

「うん。分かった！ 何時頃終わる？」

「五時ぐらい……」

「オツケー！ んじゃ会社の前で待ってるな！」

「うん」

ふと食堂の時計を見ると、もうすぐ昼休みが終わる頃だった。

「……あ、そろそろ戻らないと」

「あ……そっか……じゃあ、仕事頑張つて。また後でな」

「うん。また……」

電話を切つてあたしはしばらく画面を見つめたままだった。

本当に、何て偶然なんだろう。

まさか、もう二度と会うことはないだろうっていう状況で、こんなふうに同じ人間に繋がるとは思わなかった。

……そう言えば、あたし今カオルの携帯からかけたのに、何であたしだって分かったんだろ……

色々考えながらふとカオルを見ると、カオルはにんまりと笑ってあたしを見ていた。

「で？」

カオルは身を乗り出すようにして、そのにんまり顔をあたしに近付けてきた。

「で？　って……何」

あたしはなんだか心の中を見透かされているような気さえしながら、必死に平静を装った。

「何ってことはないでしょ。昨日の人だったんでしょ？」

本当に見透かされてる……

「何で分かるの？」

「顔見てたら何となくね。だって奈津美、電話で話してる時、表情違ったもん」

「え……」

「ほら、また赤くなってる」

「なっとなってないし！」

からかうカオルに、ムキになってそう言ったけど、顔を押さえると本当に熱かった。

「もういいでしょ！　そろそろ戻る！」

あたしはその場から逃げるように席を立った。

「ふん？ 別にあたしはいいけど。後でまとめて話聞いた方がねえ？」

一体力オルの中ではどれぐらい話が進んでいるんだろう……

後で無理矢理白状させられると想ったら、気が気じゃなかった。

……ていうか、こんなんだったら、会いづらいよ……

7 新しい彼氏（奈津美サイド）後編

何でこういう時は時間が過ぎるのが早く感じるんだろう……
いつもはやたらと長く感じるのに。

時計を見ると、五時六分。もう来てるんだろうな……

エレベーターで一階に降りながら、あたしは数え切れなくらい
ため息をついた。

カオルに、これから会うのだと言ったら、『何そんなにのんびり
してるのよ』と、急かされた。

そして、ロッカールームを出る時に『しっかりね！』と、激励（
？）された。

一体何をどうしてすっかりすればいいのか……それを教えて欲し
かった。

でも何にしても、あたしの携帯を持つてるのは向こうだから、い
ずれ会わないといけない。

……そうだ。別に携帯を受け取るだけなんだから、こんなに憂鬱
になる必要なんてないんじゃない。

別に相手を意識しなければ大丈夫。気まずいのは我慢すればいい。
そう思いながらあたしはエレベーターを降り、正面玄関に向かっ
た。

「ナツ！」

外に出たのと同時に、その声が聞こえた。

朝に、そして昼に電話で聞いた声……

あたしは声のした方に向いた。

「仕事お疲れ！」

予想通りの声の主、シュン君は、あたしの目の前に駆け寄ってきた。

「あ……うん」

ちゃんと気合いは入れたものの、やっぱり緊張して、あたしはただ頷くことしかできなかった。

「あ、そうだ。はい。ケータイ」

すぐにシュン君はそう言って携帯を取り出して、あたしに差し出してくれた。

「あ、ありがとう」

あたしは、それを受け取りながらお礼を言った。

「何か、ごめんね？ わざわざ来て貰っちゃって……」

そう言いながら、シュン君を見上げてみると、意外と背が高いことに気がついた。

「うつん！ 全然！ 言つたる？ 俺、暇だから。それより、ナツ。今日はもう帰るの？」

「うん。そうだけど……」

何故だかテンション高めなシュン君に聞かれ、あたしは頷く。

「じゃあ、送つてくよ」

笑顔で、とても自然に言われ、あたしは一瞬何を言われたか分からなくなった。

「えっ……」

帰るの？ 二人で？

「そんな……いいよっ！ わざわざここまで来て貰ってるのに、そこまで……」

ただでさえ会うことに躊躇してたのに、いきなり二人でなんて、どう接して何を話したりしたらいいのか分からない。

正直言ったら悪いけど、勘弁してほしい。

「送るよ。もう暗いんだから女の人には危ないし。……ていうか、俺が送りたいだけだよ」

なのにシュン君は、少しはにかんだ表情でそう言った。

あたしは何だか恥ずかしくて、下を向いた。

どうしよう……あたし、一瞬『キュン』ってしちゃった。だってちょっと可愛かったし……

でも、これじゃあ……

「じゃあ……うん。お願いしよう……かな」
こうやって頷くしかないじゃない……

ああ……あたし、本当に流されっぱなし……

ちょっと泣きたい気持ちになった。

そしてあたし達は、並んで歩き始めた。

「あ、そうだ。ナツのケータイに俺の番号とメアド入れておいたから」

先に話し出したのはシュン君の方で、そんな内容のことだった。

「え……あ……そう」

さらっと言った彼に、あたしは呆氣にとられた。

入れといたって……どんだけ勝手なことしてんの、この人で、直接は言えないけど……

「ナツって名字柏原っていうんだな。昨日は下の名前しか聞いてなかったから今日初めて知った」

シュン君は、笑顔で楽しそうに話している。

そう言えば……

「……うん。ねえ……あの、シュン君？」

あたしが、ちょっとシュン君の方を向いて声をかけると

「なに！？ なになになにー？」

シュン君が何故か勢いよく反応してきて少し驚いた。

「あの、あたしは……シュン君の名字知らないんだけど」

もしかしたら昨日聞いていたのかもしれないのに、こんな聞き方はすごく失礼なのかもだけど、知らないのだから、結局こう聞くしかなかった。

「オキタだよ。オキタシュン」

シュン君はすぐに笑ってそう答えてくれた。

「オキタ、シュン君……？」

この期に及んで聞き間違いとかがあったら怖いから、あたしは確認のために繰り返した。

「うん！」

シュン君は元気よく頷いた。

なんか、幼稚園児でも相手してるような気分になってきた。ちよつと、シュン君って思ったより幼そうな感じかも。

「ねえ… 旬君って、年いくつなの？」

思い切って聞いてみた。

居酒屋に結構遅くまでいたし……多分二十歳は越えてるよね？

「俺、十八だよ」

シュン君はまたすごく可愛らしく笑いながら、そう答えた。

十八……十八……！？

「十八……？　ってことは高校生？」

自分でも顔が引きつるのが分かった。

「今はまだそうだけど……でも今月で卒業だから。今年十九になるんだ」

「そう……」

高校生……いくらもうすぐ卒業でも、高校生……

ていうか、未成年。

あたし……未成年とやっちゃったの？　覚えてないけど……でも、それって淫行？　犯罪？

あ、でも多分合意のはずだし、大丈夫よね？

ていうか、いくら高校生じゃないからって……未成年じゃないからって……年下には変わりないじゃない！

あたしは、今更になってそんなことに気付いた。

ちょっと待ってよ……あたし、年下となんて付き合ったことないんだってば！

「　　は？」

シュン君の声で、あたしは我に返った。

「え？」

何も聞いてなかったあたしは聞き返す。

「ナツはいくつなの？」

え……聞くの？ それ……

この話の流れで、自分の年なんて言いたくない。

ちよつと躊躇ってから、あたしは声を小さくして答える。

「あたしは……今、二十二」

そう言つて、あたしはシュン君みたいに今年二十三になるとは言わなかった。

先に若い年を言われると、こっちが余計老けているように思える。

ていうか、年上だからって引いたりしないかな……

「でもナツってすげーよなあ。社つていたら結構有名じゃん。そんなところで働いてるとかビックリした」

あたしの思っていることをよそに、シュン君は違う話題を口にする。

別に年のことは何も思っていないみたいで、あたしはほつとしながらシュン君が言ったことに答える。

「ううん。そんな、すごいって言えるほどのことはないよ。　　っ

て、すごいのは本社だけだから。うちの会社は支社だし……それにあたしだって事務の仕事だから雑用ばっかで全然大したことないの」

確かに、うちの会社はネームバリューはあるみたいだけど、給料は月並みだし、他は知らないけど、仕事の内容だって、誰だってできるようなことだし……

「あっ！」

そこでいきなりシュン君が叫んであたしは驚いた。

「どうしたの？」

「こんなところで悪いけど、俺、ナツに金返そうと思ってたんだ」

「お金……？」

返す……？

何のことか分からなくてあたしは首を傾げた。

「ナツ、今朝二万も置いてっただろ？ 俺、半分出したから、その残り」

シュン君は財布を取り出しながらそう言った。

「あ……ああ……」

それが。そういえばあたし、適当にお金置いて来たんだった。まさか、二万も置いて行ってたなんて……

「はい」

「ありがとう」

あたしはシュン君に渡されたお金を受け取って鞆の中から財布を

取り出した。

正直、朝にタクシー使ったおかげで少しピンチだったから、返してもらえて助かった。

そう言えば……

財布にお金をしまいながら、あたしはまたあることが頭に浮かぶ。

「ねえ、シュン君」

「何!？」

何故かシュン君の食いつきはやたらと早くて、ちょっとびっくりする。

「シュン君は、春から大学生？」

頭に浮かんだその疑問をシュン君に言う

「ううん。働く」

即答で返ってきた。

「一応受験はしてたんだけど、全部落ちたからさ。浪人とかしてたら金かかるし」

シュン君は続けてそう言った。

「そっかぁ……」

もう四年も前のことだけど、あたしが高校生の時も確かにそういう人が何人かいた気がする。

進路指導の時も、先生がそんなことを言っていた。

浪人しても、よくて今の学力キープが精一杯で、それで予備校の授業料とかで、結局は大学の約一年分の授業料がかかるって……

「あ……旬君」

あたしはふとしたことを思い出し、再びシュン君に話し掛けた。

「なにに？」

今度の食い付きは、慣れたせいかな驚かなかった。

「あの……変なこと聞くけど……お昼に、あたし電話したじゃない？ あたしのケータイに。その時、あたし友達のケータイからかけたんだけど……何であたしだって分かったの？」

お昼から、少し気になっていたことだ。あの時、何の躊躇いもなく、シュン君はあたしの名前を呼んだ。

初めて電話を通して話したはずなのに……

「うん。初めはさ、寝ぼけて自分のケータイが鳴ってると思ってとったんだよ。俺あの時寝てたから」

シュン君は、笑顔を絶やさないでそう話す。

「でも分かるよ。ナツの声だから。あの時、一番聞きたいって思ってた声だったからさ」

シュン君の顔が、より一層綻んだ。

それはとても優しく、純粹で……

そんな顔でそんなこと言われたら……

「何言ってるんだろうな、俺……」

ハハッ……と軽く笑いながら、シュン君はあたしの方を見た。

「あれ……ナツ？」

顔が熱くなっているのは自分でも分かったけど、あたしはその顔を隠すこともできないで、固まっていた。

「へ……変なこと言わないでっ……」

そう言っのが精一杯で、あたしは下を向いた。
きつと、思いつき見られたに違いない。

でも……面と向かってそういう風に言われたのって、初めてだし……それに、表情とかでそれが嘘じゃないって、本気だってことが、伝わってきたから……そうすると、赤くならずになんて、無理だった。

気がつくと、もう家の近くまで来ていた。

「あ、あたしここだから」

コーボの前に着くとあたしは立ち止まってシュン君に言った。

「……」

シュン君も立ち止まって、コーボを見上げる。

「うん。……この三階」

無事に（？）ここまで帰ってこれたことに、あたしは安心していった。

でも、心の奥片隅では、もう着いちゃったのかと、どこか残念がっている自分がいるのも、確かだった。

「部屋まで送るよ」

「うん。大丈夫。いいよ、ここで」

シュン君の親切を、あたしは首を横に振って断った。

これ以上シュン君と居たらあたしの心臓がもたない。

「そっか……」

シュン君は、まるで捨て犬のような顔をしていて、ほんの少し、あたしの良心が痛む。

「あとで電話していい？」

その捨て犬の表情で小首を傾げ、あたしをじっと見つめてくる。

「うん」

また顔が熱くなるのを感じて、あたしは頷くことで隠そうとした。

「それじゃあ、ね。送ってくれてありがとう」

そうやって誤魔化すようにあたしは言った。

「あ、うん。じゃ……またな」

シュン君の声が寂しそうに聞こえたのは、多分あたしの気のせいだ。

あたしは、逃げるようにコーポの中に入っていった。

階段で二階まで上がっていったら、自然とため息が出た。

結局、何もなかったけど……むしろほとんど初対面のわりに話せてたのってどうなの？

でも……あのシュン君って人は、結構喋りやすいつてことが分かった。

全然悪い人じゃないってことも……

それに、こういうふうに言ったら自意識過剰なのかもしれないけど、シュン君があたしに……好意を持ってくれてるのは、物凄く伝わってきた。

昨日の今日で何で？ とは思う。

あたしは昨日のことを覚えてないからよく分からないけど、でもかなり酷い状態だったはずなのに、そんな女に好意を持つなんて、どれだけ物好きなんだろう。

あたしはもう一度大きなため息をついた。

何にしても、これから大丈夫なのかな……

7 新しい彼氏（奈津美サイド）後編（後書き）

奈津美視点のストーリーはいかがでしたでしょうか。

旬の話の裏側を、思い付いたから書いたという自己満足的な話（苦笑）ですが、前作の序章として読んで頂けたらと思います。

さて、次回は初デート編になります。こちらも旬視点と奈津美視点で、二回か三回ぐらいでお送りしたいと思います。

お楽しみに

8 初デート（前書き）

お待たせしました！ 初デート編です！ 前後編に分けようかとも思ったのですが、それも微妙だったので、一話にしました。なのでちょっと長いです。

8 初デート

九時三十一分。

約束まであと三十分だ。

俺は、待ち合わせの時計場所で、一人落ち着かなかった。

落ち着かないのは無理ない。ていうか、落ち着けっていう方が無理。

なぜなら、今日はナツとの初デートの日だから！

ナツを家まで送った日、そのあとのこと。

俺は家に帰ってから、言った通りにナツに電話した。

「……はい」

電話を鳴らして十秒ぐらいでナツが出た。

「あ、ナツー？ 俺、匂。家着いた？」

「もうとっくに着いてるよ。だって三階なんてすぐじゃない」
電話の向こうのナツは小さく吹き出していた。

「あ、そっか。へへっ。俺は今帰ってきたの」

俺も笑いながらそう言った。

「そう……」

ナツ、声だけでも可愛い！

俺は、まだ一言二言のナツの言葉だけでそう感じた。

やばいな、俺……自分で思った以上にハマりまくってる。

さっき別れたばっかなのに、もう会いたい……

あ、そうだ。

「なあ、ナツ。今度の土曜、ヒマ？」

俺は思いつくままに口にした。

「え……土曜？ ……特に予定はないけど」

「じゃ、どっか行こ！ ナツとデートしたい」

会いたいなら、会えばいい。付き合うなら、デートは基本だ。

「え……うん。いい、けど……」

ナツは小さな声で言った。

よっしゃ！ デート決定！

「じゃあどこ行く？ ナツ、どっか行きたいところある？」

「あたしは……特に……」

そうか、そうきたか。

実を言うと俺もない。

「んじゃ、俺考えとく。でも、ナツが土曜日までに行きたいとこ出てきたら言ってくれな！」

「うん……分かった」

それで今日が約束の土曜日。

十時にここって約束だったけど……俺はまたしても早く来すぎてしまった。

だって早くナツに会いたいし！（俺だけ早く来てもしょうがないって分かってるけど！）

でも流石に九時に着いたのは早すぎた。
時計を見ると、今、やつと四十五分。

「旬君っ」

俺を呼ぶ声が聞こえた。

この声は……！

声がした方を向くと、思った通り、ナツが小走りでこっちにやっ
て来た。

「ナツ！ おはよ！」

ナツを見ただけで俺のテンションは上がった。

「ごめんっ……遅れちゃった？ 約束、十時だと思ってたんだけど

……」

ナツは慌てた様子でそう言った。

「え……？ ああ、違うよ。俺が早く来すぎただけ。ナツは時間より早く来てくれたんだよ」

「なんだ……そうなの……」

ナツはほっとしたように言った。

ちよつと勘違いしちゃったナツが可愛い！

ていうか、今日のナツ、前に会った時とちよつと違う。

この間会った時は、背中までの長さの髪はまっすぐだったけど、今日は少し巻いてある。それに化粧も、瞼の辺りとかがピンク色で、前と違うのはすぐ分かった。

服も、この前はシンプルなデザインで『キレイなOLさん』って感じだったけど、今日は、ふわっとしてるスカートとか、キラキラ光るネックレスをしているとか、ちよつと雰囲気違った。

今日は『可愛くてキレイな女の人』って雰囲気だった。

「ナツ……すっげー可愛い……」

ほぼ無意識に俺は言っていた。

「えっ……」

「髪巻いてる？ 化粧も前と違う？」

「あ……うん。今日は休みの日だから、ちよつとね」

「すっげー似合う!」

勿論、今日のナツの格好がそうだけど、それよりも、俺と会ったにそうやっていつもよりお洒落したのかなって思うと、すごく嬉しかった。

「あ……ありがとう」

ナツはほんの少し頬を赤くして、恥ずかしそうに俯いてそう言った。

何、この可愛いの!? ギュッてしたくなるじゃん!

俺は今すぐにでも叫びたい。それで周りの人達に教えたい。

『この可愛くてキレイな人は、俺の彼女です!』って。

「旬君……それで、今日はどこ行くの?」

ナツが俺を見上げる。

「んー……買い物とかしよっかなーって。ナツ、何か欲しいものがある? 服とか」

俺も行くところを色々考えたけど、特にこれってというのが浮かばなかった。

映画とかも、今はイマイチ面白そうなのはやってないし、ドライブしようかとも思ったけど、俺の家の車は父さんが今日使うと言って無理だった。

それで浮かんだのが、買い物がてらのんびり街を歩こうっていう

プラン。

俺は特に買うものとかないけど、ナツが行きたい店に合わせて付き合おうって寸法だ。

「え……あたし、丁度先週に買い物に行ったから、特に必要なものなんてないんだけど……」

……うっそ!?

まさかそうくるとは……

そんな偶然に先週行っただけ……

あ、だから特に行きたいところはないって言ってたのか……
今そんなことに気付くなんて、俺ってバカ……

「旬君？」

ナツは首を傾げて俺を見ている。

「あ……じゃあ、ナツ。俺に付き合ってくんない？」
俺はとりあえずそう言った。

「うん。いいよ」

「じゃあ、行こう」

俺はナツの横に立って、歩き始めた。

「買い物って、服とか？」

歩きながら、ナツが聞いてくる。

「うん。しばらく買いに行ってたから見てみようかなーって
思ってた」

「そっか……」

正直、苦し紛れだ。しばらく服買ってないのは本当だけど、俺が買い物する予定はなかったからちよつと焦ってる。

でも、考えとくつて言つた手前、行くところないつて言うわけにはいかないし……それじゃあ何のためにナツを誘つて、バイトも代わつて貰つてまで休んだんだ。

とにかく、途中で話しながら、考えよう。

……ていうか、手……繋ぎたいなあ。

俺は横目で右側にいるナツのことを見た。

さり気なく、ナツの左手を……と思つて狙いを定めた。……が。ナツの左手にはすでに鞆が握られている。

繋げないじゃん……

こういう場合、男の方から『手、繋ごう』って言うのは、恥ずかしくて言いづらい。ていうか言えない。

かと言って、ナツの方から言ってくるのを待つのも、情けない。

でも、まだ付き合つて一週間も経たないうちの一回目のデートだもんな。今日はまだそんな段階じゃないよな。

俺はまるで初めて彼女のできた中学生のように、健全な考え方で自分を納得させた。

十八にもなって……と感じたけど、それだけ大事にしたいのも本音だ。

俺達は、俺がいつも服を買ってる店に行った。

「何買うの？」

店に入っただけすぐにナツに聞かれた。

「えーっと……Gパンとか」

俺は店を見回しながら適当に答える。

本当、何買おう……

とりあえず、俺は自分で言った通りにGパンの棚に行った。ナツもその横についてくれて、一緒にGパンを眺める。

「……ごめんな？ 付き合わせて。ナツ、暇だよな。すぐ終わらせから」

ここは男物の店だから、特にすることのないナツは退屈に決まってる。

思いつきで買い物に付き合ってたと言っただけじゃなかった。

「うっん。しばらく買い物してなかったんでしょ？ それならゆっくり見ていいよ」

優しいナツの言葉に、俺は感激する。

やっぱりナツはイイ！ 最っ高！

でも、そんなナツに罪悪感てほどのものじゃないけどを感じる。何か俺のわがままでデートしてるっていうか……

俺が考えていることをよそに、ふとナツを見ると、ナツの顔は目の前のGパンとは違うところに向いていた。

「ナツ、どしたの？ 何かあんの？」

あんまりじつと見てるから、俺は声をかけてみる。

「うん。ダウンが安くなってるなーって思ってた」

ナツの見ていた方向には、ダウンジャケットの棚があった。ナツの言う通り、セールで三割引になっている。

「時期的に冬物は安くなるけど、まだ寒いからしばらくは着れるし、今買った方が得なのよね」

ナツはまるで独り言のようにそう言った。

そうか、そうだな。と、俺は納得した。

今までそんな意識してなかったけど、確かにダウンとかジャケットとか、高いのは安くなってから買う方が得だな。どうせ来年も着るんだし。

「買おっかな……」

俺は、引き寄せられるようにダウンのそこに行った。

「買うの?」

ナツも俺の後ろからついてくる。

「うん。これ、もう袖とかボロボロだし、そろそろ替えよっかと思
つて。ちょうど安いし」

今着てるカーキのダウンは、去年買ったやつだけど、俺の着方が
悪いのか、袖はボロボロだし内側に穴が開いてたりしてる。

普段の俺なら、別に気にしないで結構平気で着てたりするけど、
何でか今日は、急に欲しくなった。

多分、ナツが言ったからだ。

「じゃあ、どれにするの?」

嬉しいことに、ナツが率先して見てくれている。

「どうしよっかなー」

目の前にあるダウンは、全部デザインは一緒で色は、黒、カーキ、
茶色、紺があった。

「今のとは違う方がいいんじゃない?」

「やっぱりそうだなー。ナツはどれがいいと思う?」
ぶっちゃん、どれでもいい俺は、ナツに聞いてみる。

「んー……」

ナツは、首を傾げて考えるような仕草を見ると、ダウンを一着ずつ手に取って俺に合わせていく。

合わせてはうーん、と唸って首を傾げ、それを戻して、違うのを取って合わせて……それを繰り返している。真剣そのものの表情だ。

なんかいい！　こういうの！　すごいデートっぽい！　（いや、デートだけでも）

ていうか、ナツが俺のために考えて選んでくれてるっていうのがすっげー嬉しい！

「紺かなあ……」

しばらく悩んだ後、ナツは言った。

「じゃあ、紺にする」

俺はすぐ決めた。

「えっ……いいの？」

ナツは目を丸くしている。

「うん。紺がいい」

ていうか、ナツが選んだ色がいい。

「そう……？」

さっきまではどれも一緒に見えたのに、ナツが選んだ途端に、紺色のダウンが他とは違って輝いて見えた。

このダウンは絶対大事にする！

結局、俺のダウンだけを買って、店を出た。

すると丁度よく腹が減ってきた。

「ナツ、どっか飯食いに行かない？ 俺、腹減った」

「そうね。もうお昼時だし」

ナツは店の中の時計を見ながら頷いた。

「どこ行く？ 何か食べたいのある？」

「何でもいいよ。この辺って何があるの？ あたし、あんまりご飯
食べには来たことないから」

「色々あるよ。歩きながら探す？」

「うん」

ナツが頷いて、俺達は歩き出した。

あゝ……マジでいいなあ、こういつの……

ただ並んで喋りながら歩くということだけが、特別に感じた。

この雰囲気だったら、ナツも俺のこと、彼氏だって思ってくれて
るって思っているのかな……

俺にはそれが不安だった。

よく考えたら（考えなくてもだけど）告ったのは俺からで、好きになったのも俺からだ。これまでの展開だと、ナツが俺のこと好きになってくれるとは思えない。ていうか、好きじゃないと思う。一応付き合うことになったのは、俺が無理矢理なことを言ったからで、ナツの意志じゃない。

でも、もし俺のことが嫌なら、とつくに拒否られてるよな？ 休みの日にわざわざデートしてくれないよな？

それに……

『旬が……あたしの彼氏だったらよかったのになあ……』

俺にはあの時のあの言葉がある。

いくらナツが酔ってた時の言葉でも、ナツが覚えてなくても、ああやって言ってくれたということは、俺のことを好きになってくれる見込みがあるってことだ（と思う）。

まだまだ先は長い。ゆっくりでも、頑張ろ。

俺は一人で気合いを入れた後、昼飯の場所を探す。

そこで目に入ったのは、入り口に美味しそうなケーキの写真の看板が立てかけてある店だった。

ケーキバイキングの店らしい。

行きてえ……

甘いもんが好物な俺はその看板に釘付けになる。

いや、でも今探してるのは昼飯の店だし。流石にケーキはちょっと、な。それに、男の方から誘うのも……引かれたら困るし……
ああ、でもしばらく行つてねえからなあ。

俺は心の中で葛藤した。

店の前を通る時も、視線は釘付けのままで、通り過ぎたあとも、なかなか離れない。

我慢だ、俺！ 耐えるんだ！

「旬君」

ナツに話しかけられて、俺は我に返った。

「なっ何？」

やっと店から目をそらしてナツを見た。

「もしかして、そこがいいの？」

ナツはそう言つて店を指差した。俺が見ていたケーキバイキングの店……

「え、何で？」

内心ドキドキしながら、聞き返してみる。

「だって……すごい見てたから。甘いもの好きなの？」

「うん……まあ」

聞かれると、答えるのが恥ずかしかった。

店をずっと見てたのを見られてたのも、少し恥ずかしかった。本当に、引かれたらどうしよう。昔付き合っていた彼女に、引かれたことあるから怖かった。

「じゃあ、行く？」

ナツから出たのは、予想外の言葉だった。

「え……」

俺は驚いて、すごい間抜けな顔になっていたと思う。

「お昼、ここにしようか」

ナツはさつきとは違う言葉で、同じことを言った。

「いいの？ てか、昼飯だし、ケーキは……」

内心は物凄く嬉しかったけど、俺は何でかそんなことを言っていた。

「いいよ。ここってケーキだけじゃなくて軽食も置いてるし。それにあたしもちょっと甘いもの食べたいから」

「いいの……？」

「うん」

ナツは笑って頷いてくれた。

やったーーーーー!!!

嬉しかった。本当にもう嬉しかった。

昼時で店の中は混んではいたけど、すぐに入ることができた。

店員に席に案内されて荷物を置いてから、俺らはバイキングに向かった。

「え……旬君、いきなりケーキ？」

軽食のあるほうに行こうとしていたナツに、目を丸くして言われた。

「うん！」

頷いて、俺は目の前のケーキを皿に乗るだけ乗せた。

久々のケーキバイキングに、俺はテンションが上がりまくりだした。

「いただきます」

席に戻ると、俺は早速フォークを持ってケーキに食らいついた。

ショートケーキを一口食べて、口の中のクリームが広がる感じに幸せな気分になった。

「あれ？ ナツ、食わねえの？」

俺はもう二つ目のチョコレートケーキを食べ始めてるのに、ナツはまだ自分の皿に手をつけていなかった。

ナツの皿には、パスタとサンドイッチが二つ乗っていた。

「うん。……美味しそうに食べるなあって思ってた」

「うん。本当に美味しいよ」

俺は何でナツがそういう風に言うのか分からなかったけど、思ったままの感想を言った。

「うん……そうよね」

ナツは笑顔でそう言って、自分の皿のパスタを食べ始めた。

その笑い方が、自然なのにくすぐったいぐらいにすごく優しくて、俺も笑った。

ケーキを食べながら、すぐ目の前にはナツ。
今までで一番幸せな状況かもしれない。

「旬君、飲み物ココアにしたの？」
ナツは俺のカップを見て言った。

「ケーキだったら普通コーヒーか紅茶じゃない？」
そういうナツのカップには、紅茶が入っていた。

ここの飲み物は、ドリンクバーになっていて、あったかい飲み物はコーヒーと紅茶とココアがあった。それで俺はココアを選んだ。

「俺、ココア好きだから。ケーキの時でも普通にこれだよ」
ケーキとココアは、俺には当たり前前の組合せだ。他の人はあんまりしないみたいだけど。

「それに俺、紅茶はともかくコーヒーは飲めねえの」

「そうなの？ 苦いからダメとか？」

「それもあるけど、飲んだら腹壊すから。多分、合わねえんだな。飲むんなら、砂糖三つと半分以上牛乳入れないと無理」

「えー？ そんなのもうコーヒーじゃないよ」
「そう言いながらナツは笑った。」

「本当に甘いのが好きなんだ。珍しいね。男の子でそんなに甘いもの好きって」

「みたいだよな。俺の周りも嫌いなヤツ多くてさあ。男同士ではこういうとこってめったに来れねえし、今めちやくちゃ嬉しいんだ」
「ナツも一緒だし。と心の中で付け足した。」

「そっかあ。でも、そんなに甘いのはっかりだったら体に悪くない？」

「全然！ それよく言われるけど、俺、虫歯ですら一回もなかったことねえの。病気も全然したことねえし」

「へえ……すごいね」

これは本当に自慢だ。生まれてから一度も風邪だってひいたことがない。

バカだからひかないって周りによく言われるんだ。

「でも次はメシ系取ってこよっかな。ナツは何のヤツ食べてんの？」

俺の皿の上のケーキはあと一つになっていた。ナツの皿を見ながら聞いた。

「カルボナーラと……パスタは他にも色々あったよ。それと、ハムサンド」

「ハムサンド？ いいなつ。俺ハム好きなんだ。あとで取りに行こつ」

好きなものだらけで、俺のテンションはさらには上がる。俺は皿の上の最後の一個のケーキをフォークで刺した。

「サンドイッチはなくなってたよ。あたしが取ったのが最後だったから。また違うのに変わってたよ」

「えっ!？」

ナツの言葉に、俺はショックを受けた。

はたからすれば、そんなことで……って感じだろうけど、俺には結構重要なことだ。

ないのか……そうか……

「……はい」

ナツが、サンドイッチを俺の皿に置いた。

「え……」

「旬君、食べていいよ。あたし、また他の取ってくるから」

「いいの？」

「うん。好きなんでしょ？」

ナツの優しさに、俺はものすごく感動した。

「ナツ、ありがと！ いただきまーす！」

俺はすぐにそのサンドイッチに食いついた。

特になんでもない、どこにでもあるような普通のサンドイッチだったけど、ナツがくれたというだけで、今まで食べたことのないくらい美味しく感じた。

それから、俺達はケーキやメシを食べながら、色んな話をした。

「ナツは食べもんで何が好き？」

「んー……特にこれが好きっていうのはないかなあ。その時の気分で変わるから……あっさり系が食べたい時は和食だし、こってりしたのが食べたい時は中華とか……」

「へー。俺はこってり系が好き」

そんな風に、ラーメンでは俺は豚骨、ナツは醤油が好きで、焼き肉は俺がカルビ、ナツはタン塩、カレーは二人とも辛い方がいい……

…と、何故だか食べ物のことばっかだったけど、俺達はたくさん話した。

話している間、ナツはたくさん笑っていて、それを見て、俺はすごく嬉しくて、楽しくなった。

そんないい感じの雰囲気を、ケータイ着メロがぶち壊した。

「あ……俺だ」

Gパンのポケットの中で震えていたからすぐに分かった。

この着メロは、電話の方だ。

こんな時に誰だよ……と思いながら、俺はケータイを取り出して、サブ画面を見た。

表示されているのは、バイト先の先輩^{カフェ}だった。今日、ナツとのデートのために、俺と日にちを変えてもらった人だ。

「ごめん、出ていい？ バイト先の先輩からなんだ」
しょうがなくナツにそう聞いた。

「うん」

「ごめんな」

頷いたナツに、もう一度謝ってから、俺は電話に出た。

「もしもし？」

「沖田か？ 悪いけど、今日はバイト無理になった」

「えっ!？」

先輩の言葉に俺は思わずでかい声をだしてしまった。

「だからお前行け。店長にもそう言っただけだから」

「そんな……先輩！ 俺だって無理っすよ!」

俺は必死に言い返した。

今、ナツとめちゃくちゃいい感じになってるのにバイトなんて冗談じゃない！ 絶対に嫌だ！

「無理じゃねえだろ。元はと言えばなあ、お前がシフトも確認せずに彼女と約束したとか勝手なこと言っただろ。それをお前が俺に『このデートに懸けてる』とか言っただけで土下座までしたからこっちは出て来る限りで予定変えてやろうとしたんだろ。それが無理なんだからしょうがねえだろ」

返す言葉がなかった。全部本当のことだ。

でも、それだけ本当にナツとのデートに懸けてたし、それに、こっちから誘っておいて勝手に無理になったとか言えないし……

「そっいうわけだから。ちゃんと行けよ！ じゃあな」

「ちょっと……待っ……」

耳に返ってきたのは、ツー、ツーという音だった。

どうしょ……

ケータイで時間を見ると、二時前だった。バイトは三時からだ。あと一時間ちよつと。

誰か他の人に頼もうにも、今からだったら流石に無理に決まってる。ていうか、絶対に無理だ。この前も、全員に頼んで、全滅で、それだから必死になんとかかなりそうなさっきの先輩に頼んだんだから……

「どうしたの？」

ナツが首を傾げて聞いてくる。

もう諦めるしかない。

「ナツ、ごめん……バイト入っちゃった」

「本っ当ごめん！ こっちから誘つといて……マジでごめんな！」

店を出て、ナツを家まで送りながら、俺は何度もナツに謝った。

「いいよ、そんなに謝らなくても」

謝るたびに、ナツはそう言って首を横に振った。

「だって、バイトでしょ？ それならしょうがないよ」

ナツの優しさが目に染みるくらいだった。

本当は違う。俺が勝手なことをしたからこうなったのに……

あっという間にナツのコーポ前に着いてしまった。

「じゃあ……バイト前なのに、送ってくれてありがとう」

「ううん。まだ時間あるから……」

本当にあっという間だった。

ていうか、デートで二時半解散とか有り得ねえだろ。（いや、俺のせいだけだ）

もっと、ナツと一緒に居たかったけど……今日はしょうがない。

「ナツ、あのさ……」

ナツに話しかけると、ナツは俺を見上げるようにして見る。

「今日、付き合ってくれてありがとな。俺、すっげー楽しかった」

今日は、買い物も食事も、全部ナツが俺に合わせてくれたんだ。

ナツは、笑ってくれてはいたけど、もしかしたらつまらないと思っただかもしれない。

それでも俺は、ナツのおかげで今日は楽しかったんだ。

「あ……あたしもっ」

ナツは、そう声にしてから俯いた。

「あたしも……今日、楽しかった、よ……」

俯いたまま、恥ずかしそうに小さな声で、そう続いた。

その言葉とその様子が、とても可愛くて、とても嬉しかった。

ナツも、俺との時間を、楽しいと言ってくれた。たったそれだけなのに、もうこのまま死ぬんじゃないかってぐらいに、嬉しかった。

「また……また行こうな！ 今度、ちゃんと埋め合わせするから！」
俺がそう言うと、ナツは顔を上げて、笑って、

「うん」

と、頷いた。

それだけでまた幸せになった。

「それじゃ、終わったらまた電話するな」

「うん。待ってる。……旬君、バイト頑張ってるね」

さり気なく、俺からの電話を『待ってる』と言ってくれたこと、ナツが『頑張ってるね』と言ってくれたこと。それだけが俺のやる気になった。

「あ」

頭の中で、ナツのセリフを繰り返して、一つだけ引っ掛かった。

「ナツ。俺のこと、次からは旬って呼んで」

ナツは、ずっと俺のことを君づけで呼んでいた。あの日の夜は、

呼び捨てだったのに、その時のことを覚えてないからか、ずっと呼んでくれそうにはなかった。

本当は、もっと近い感じで呼んで欲しかったんだ。

「えっ……」

ナツは目を丸くしている。

「呼んでみて」

「いつ今!？」

「うん。今」

ナツの顔が、赤くなっていた。

「……………し」

発音するかしないかのところで、ナツは固まった。口は旬の『しゅ』の形だ。

ナツは、どんどん真っ赤になって、もうゆでダコとそんなに変わらないくらいだ。

「……………やっぱり今は無理!」

ナツはそう言って俯いてしまった。

でも、名前を呼ぶぐらいで恥ずかしがってるナツは……

「可愛いから許す!」

俺は思ったことを素直に口にした。

「なっ何言ってるのっ……」

狼狽えてるナツが可愛くて俺は笑った。

「もうっ！ 早くバイト行かないといけないんでしょ！」

「はいはい」

見え見えの照れ隠しに俺は笑いながら頷いた。

「じゃあまたな！」

「うん。またね」

俺が手を振ると、ナツも小さく振り返ってくれた。

そうしてくれただけで、俺も今からのバイトを頑張ろうと思えて、歩き出す一歩が軽かった。

今日のデートで、確かに俺とナツの距離が縮まったと思う。
ていうか、むしろ絶好調^{のはず}。

今日も、俺はナツのことを知って、もっとナツのことを好きになった。
った。

それと同じように、ナツも、ほんの少しでも、分からないくらいでもいいから、俺のことを考えて、好きになっていてほしい。

簡単に上手くいぐことはないので分かってはいるけど、俺はそんな風に思っていた。

8 初デート（後書き）

今回は初デート・奈津美サイドです。次回もちよつと長い予定なので、更新が遅くなるかもしれません（汗）

9 初デート（奈津美サイド）

明日、何着て行けばいいんだろ。

あたしは、ベッドの上にクローゼットの中の服を広げて悩んだ。

パンツかスカートだったら、絶対スカートよね。あ、先週買ったやつにしよう。トップも何枚買ったやつで合わせて……後はブーツ出しとかないと。

よし！

悩みに悩んで完成した服を見て、あたしは一人で頷いた。

……て、何気合い入っちゃってるのよ、あたし！？

自分でも驚くほど完璧にしているのに、あたしは愕然とした。

こんな、デートじゃあるまいし……いや、デートらしいけど……

旬君にコーポまで送って貰った日……

部屋に着いてから、化粧を落として、丁度一息ついた時、鞆の中で携帯が鳴った。

鞆から出して見てみると、電話で、着信は『沖田旬』。
ここで初めて彼の名前を漢字で知った。

そう言えば、電話するって言われてたんだっけ。思い出しながらあたしは電話に出た。

「……はい」

「あ、ナツ？ 俺、旬。家着いた？」

出るなり、電話の向こうの声はハイテンションだった。

「もうとつくに着いてるよ。だって三階なんてすぐじゃない」
ちよっとおバカな発言に、あたしは思わず吹き出してしまった。

「あ、そっか。へへっ。俺は今帰ってきたの」

旬君も、笑ってそう言った。

「そう……」

今着いたということは……旬君の家はそんなに遠くないということか。

そんな風に考えながら、あたしは向こうの言葉を待った。

電話するって言われても、昨日の今日の出会いであたし達には話すような話題がない。少なくとも、あたしにはない。

「なあ、ナツ。今度の土曜、ヒマ？」

唐突に、旬君が言った。

「え……土曜？ ……特に予定はないけど」
あたしはそのままの予定を言った。

「じゃ、どっか行こ！ ナツとデートしたい」

「え」

デート……？ デート！？

さらりと言われて、一瞬意味が分からなかった。

こないきなり誘われて、断るかそうじゃないかと言ったら……

「うん。いい、けど……」

断れないに決まってる。

予定を先に聞かれて、特にないって言っちゃったのに、断れるわけないでしょ！？

「じゃあどこ行く？ ナツ、どっか行きたいところある？」

「あたしは……特に……」

「んじゃ、俺考えとく。でも、ナツが土曜日までに行きたいところ出てきたら言ってくれな！」

「うん……分かった」

どんどん進んでいく話に、あたしはついていけず、ただ適当に返事をするだけだった。

そして、デート当日。

あたしは鏡の前で髪を巻いていた。丁寧に、丁寧に……

巻き終えた髪を、横を向いたりして確認する。

巻けてないところはないか、変になっているところはないか……

……て、何また気合い入りまくりみたいになってんのよ？

鏡の中の真剣な顔と目が合って、あたしはうなだれた。

顔を上げて、鏡の中の自分をもう一度見てみる。

上下ともおろしたての服に、ネックレスなんか付けて、髪は緩く
だけど、完璧な巻き髪。化粧だって、平日のベージュ系のナチュラ
ルメイクじゃなくて、ピンク系のアイシャドウを使って、チークも
塗って……

これじゃ今日が楽しみで楽しみでしやうがなかったみたい。

違うそんなつもりは全然ない。

別に、デート云々って言う前に、休日に出掛けるんだから、いつ
もと違って当たり前じゃない。服だって、このためだって買ったわ
けじゃないし。あたしが欲しいから買って、あたしが着たいから着
るのよ。うん。

あたしはまるで自己暗示のように、自分にそう言い聞かせて頷い
た。

さてと、とりあえず待ち合わせになってるから、そろそろ行こうかな。

別にこれだって仕方なく行くのよ？ 自分でした約束なんだから

……

自分の行動に、いちいち言い訳をしながら、あたしは用意をして家を出た。

待ち合わせ場所の時計広場の近くに来て時間を見ると、まだ約束の時間の十五分前だった。

ちょっと早く来すぎたかもしれない。旬君はまだ来てなさそうだな。何か嫌だな……これこそ気合い入ってるみたい。

時計広場が見える所まできて、そっちのほうを見てみた。

え……？

あたしの視線の先には、もう既に旬君が居た。

ちよつと……早すぎじゃない？もしかして、あたしが時間を間違えた？

まさかそんなことはないと思いながら、見てみると、どうも旬君は落ち着かない様子で、時計を見上げている。

うそ！？ まさか本当に間違えた！？

あたしはそう思い、焦りながら走って旬君の所へ行った。

「旬君っ」

あたしは思わず大きな声を出していた。

旬君はすぐに反応してこっちに向いた。

「ナツ！ おはよ！」

旬君は、何でか満面の笑みで朝の挨拶をしてきた。

「ごめんっ……遅れちゃった？ 約束、十時だと思ってたんだけど……」

あたしは、旬君とは対照的に、ものすごく慌てていた。

「え……？ ああ、違うよ。俺が早く来すぎただけ。ナツは時間より早く来てくれたんだよ」

旬君はあっさりとそう言った。

「なんだ……そうなの……」

ほっとしたような……拍子抜けしたような……

て、これじゃあたし、やっぱりデートに張り切って早くきたみたいになってる？ ほんの十メートルぐらいだけど、走って来ちゃって……

いやでも別に、実際に張り切ってたわけじゃないし、約束に遅れないようにするっていうのは当たり前じゃない。

だいたい、この人一体どんだけ早く来てんのよ。

「ナツ……すっげー可愛い……」

その言葉に、あたしは我に返った。

「えっ……」

旬君が、物凄く熱い視線をあたしに向けていた。

「髪巻いてる？ 化粧も前と違う？」

すぐにそうやって聞かれた。

「あ……うん。今日は休みの日だから、ちょっとね」

あたしは、自分にした言い訳と同じようなことを言っ
て、誤魔化しながら答えた。

決してデートだからこんなに気合い入った格好じゃないとい
うことを。

「すっげー似合う！」

旬君は力強く言った。

褒められてるのはあたしなのに、旬君の方が嬉しそうだった。

あたしは面と向かってそう言われるのが恥ずかしくて、下を向
いた。

「あ……ありがとう」

それでも、嬉しくないと言ったら嘘だ。

少しだけ、気合い入れてきてよかったと思った。

「旬君……それで、今日はどこ行くの？」

あたしは話題を変えて、照れくさいのを誤魔化して、顔を上げた。

「んー……買い物とかしよっかなーって。ナツ、何か欲しいものとかある？ 服とか」

旬君にそう聞かれ、あたしは困ってしまう。

「え……あたし、丁度先週に買い物に行ったから、特に必要なものなんてないんだけど……」

現に今着てる服は、先週買ったばかりのやつだし。

あたしが答えると、旬君は固まってしまった。

あたし、何か変なこと言った？

「旬君？」

何も言わない旬君に、あたしは首を傾げて声をかけた。

「あ……じゃあ、ナツ。俺に付き合ってくんない？」

旬君は思い出したようにそう言った。

「うん。いいよ」

特に異論もなく、あたしは頷く。

「じゃあ、行こう」

旬君はあたしの隣に立って歩き出し、あたしはそれに付いて行っ
た。

「買い物って、服とか？」

歩きながら、あたしは聞いた。

「うん。しばらく買いに行ってなかったから見てみよっかなーって
思っ」

「そっか……」

大学受験したって言ってたし、ずっと勉強で買い物とか行ける暇
なかったんだろうな……

そう思いながら、あたしは旬君に付いて歩いた。

しばらく歩いて着いたのは、旬君がいつも行っているというメン
ズのショップ。

「何買うの？」

中に入ると、あたしは聞いた。

「えーっと……Gパンとか」

ショップの中を見回しながら、旬君は言った。

言った通りのGパンの棚に向かうのに、あたしは付いて行った。

棚の前で、選んでいるらしくGパンを眺めている旬君の隣で、あ
たしも同じように棚を眺めた。

「……ごめんな？ 付き合わせて。ナツ、暇だよな。すぐ終わらす
から」

気を使ってくれたのか、旬君が言った。

「うん。しばらく買い物してなかったんでしょ？ それならゆつくり見ていいよ」

あたしは首を軽く横に振って言った。

確かに、やることはないけど、あたしは別に人の買い物に付き合うことは嫌いじゃない。むしろ好きだ。

特に、自分の系統じゃない店で、色々と品物を見るのは楽しい。一人だと、明らかに買う目的はないというのが店員にもバレバレで、嫌な視線を浴びてしまうけど、誰かの付き添いなら、どれだけ見ても構わない。

だから、何気にあたしは楽しんでた。今日は特に、滅多に来ないメンズのショップだから、あたしは物珍しく店内を見回していた。

そこで、目に入っただのは、セールの文字。品物はダウンジャケットだった。

もう冬物はセールの時期かあ。そう言えば、先週行った時も、セールしてたところもあったっけ。そんなに安くはなってなかったけど……

そんな風に考えながらあたしは見ていた。

「ナツ、どしたの？ 何かあんの？」

「うん。ダウンが安くなってるなーって思ってた」

旬君に聞かれて、あたしは答えた。

「時期的に冬物は安くなるけど、まだ寒いからしばらくは着れるし、今買った方が得なのよね」

流行り廃れがありそうなのは躊躇するけど、ダウンなら今買っても来年も着られそうだし。

男物だから、買うつもりはないけど、こんなことを考えるのが好きだ。

「買おっかな……」

旬君は呟くようにそう言いながら、ダウンの方へ向かった。

「買うの？」

あたしもそれに付いていく。

「うん。これ、もう袖とかボロボロだし、そろそろ替えよっかと思つて。ちょうど安いし」

旬君のダウンを見てみると、袖口が破れて、ほつれている。確かに、買い換えた方がいいかもしれない。

「じゃあ、どれにするの？」

ここにあるのは黒、カーキ、茶色、紺だけだった。もつとあったらうけど、売れてしまったみたいだ。

「どうしよっかなー」

「今のとは違う方がいいんじゃない？」

「やっぱそうだよなー。ナツはどれがいいと思う？」

軽く意見を出したら、今度は旬君から意見を求められた。

「ん……」

考えてみても分からないから、あたしはダウンを一着ずつ取って、旬君に合わせてみる。

黒……は、似合わないことはないけど、今からの時期に着るんだったらちよつと重たいかなあ。

茶色……は、ダメだ。この色は、明るすぎるし、旬君の髪の色とも合わない。

紺……は、あ、結構いいかも。寒々しいかとも思ってたけど、意外とそうでもない。茶色い髪の色にも不自然なことはないし、何にでも合わせられそうだ。

「紺かなあ……」

この中では紺が一番いい。それがあたしの感想だ。

「じゃあ、紺にする」

一瞬で返事が返ってきた。

「えっ……いいの？」

決断の早さにあたしは驚いた。

選んどいてなんだけど、本当にあたしが言ったのでいいんだろうか。

「うん。紺がいい」

でも、旬君は笑顔でそう言った。

「そう……？」

まあ、本人がいつて言うならいつか。

旬君は結局、Gパンは買わずにダウンだけ買ってもういいらしく、あたし達はお店を出た。

「ナツ、どっか飯食いに行かない？ 俺、腹減った」
お店を出るなり、旬君は言った。

「そうね。もうお昼時だし」
確かに、あたしも空いてきた。お店の中の時計を見ると、十二時を過ぎている。いつの間にか、こんなに時間が過ぎていたみたいだ。

「どこ行く？ 何か食べたいのある？」

「何でもいいよ。この辺って何があるの？ あたし、あんまりご飯食べには来たことないから」

「色々あるよ。歩きながら探す？」

「うん」

当たり前のようにそう言葉を交わし、並んで歩く。

何か、デートみたい。……って、そういえば、これってデートじゃ……

あたしは今になって気づいた。何てことだろう。何故か今まで、

そんな自覚がなかった。

ていうか、あたしってば普通に楽しんでなかった？

何よ、このほのぼの感は。

でも、何ていうか、旬君って、緊張感を感じさせないっていうか、年下だからかもしれないけど、気を使わなくて済むっていうか……彼氏って感じが全くしない。

……あ、そうだ。旬君で、あたしの彼氏ってことになってるんだっけ……

あたしは、またしてもそんな重大なことを忘れていた。さっきから、こんなんばっかだ。

でも、それだけ実感がない。今、あたしの横に居るのが彼氏だなんて……

横目で旬君のことをを見ると、旬君の顔は、どこか違う方に向いている。

何かあるのかと思って見てみると、旬君の視線の先には、ケーキバイキングのお店があった。

もう一度旬君を見て見ると、旬君の顔は張り付いたようにお店の方に向けられたままで、歩いて通り過ぎながらも、顔だけは残ったままになっている。

物っ凄い見てる……

このままだと本当に首だけでも行ってしまうそうだった。

「旬君」

放っておけずに、あたしは声をかけた。

「なっ何？」

旬君の首がこつちに戻ってきた。

「もしかして、そこがいいの？」

あたしはお店を指差して言った。

「え、何で？」

何でって……

「だって……すごい見てたから。甘いもの好きなの？」

「うん……まあ」

旬君は少し照れくさそうに頷いた。

やっぱり。この様子だと、よっぽど好きなんだろう。

「じゃあ、行く？」

「え……」

旬君は目を丸くして、きょとんとした顔になった。

「お昼、ここにしようか」

ここではないけど、同じお店に行ったことがある。確か、バイキングはケーキだけじゃなかったはずだ。

「いいの？ てか、昼飯だし、ケーキは……」

遠慮しているみたいにそう言った。

「いいよ。こっつてケーキだけじゃなくて軽食も置いてるし。それにあたしもちよつと甘いもの食べたいから」

旬君は、明らかに行きたいはずだ。あたしだって甘いものは好きだし、久々に行きたい。

「いいの……？」

「うん」

まだ遠慮がちの旬君に頷くと、旬君は何も言わずに、まるで花が咲いたように満面の笑顔になった。

それだけで、嬉しいんだなあってことは、すぐにわかった。

「え……旬君、いきなりケーキ？」

バイキングに行くなり、旬君はいそいそとケーキの方に向かっていたのに驚いた。

「うん！」

旬君は笑顔のままで頷いて、そのままケーキを取りに行く。

さっきは、お昼ご飯にケーキは、って言ってたのに……

周りは殆ど女の子だったのに、うきうきとした様子でケーキを取る旬君は、何故かその中に違和感を感じさせなかった。

「いただきまーす」

旬君は元気よくそう言うとフォークを握ってケーキを食べ始めた。

旬君のお皿の上には、器用なぐらいぎゅちりと、乗るだけのケーキが乗っている。

ショートケーキを一口食べただけで、旬君は今までにないぐらい顔を緩ませていた。

本当に好きなんだなあ……

「あれ？ ナツ、食わねえの？」

あつと言う間に一つ目を平らげた旬君は、次のチョコレートケーキを食べながらこつちを見た。

思わず見入ってしまった、自分のことを忘れてた。

「うん。……美味しそうに食べるなあって思ってた。あたしは、見たままの素直な感想を言った。」

「うん。本当に美味しいよ」

旬君は少しきょとんとした顔で、そう言った。

「うん……そうよね」

こんなに幸せそうになってる。聞かなくても、丸分かりだ。

そんな旬君を見ると、思わず顔が緩んだ。

旬君は、ご満悦という表情で、ケーキを食べ続けていて、あたしはそれを見ながら、自分のお皿の上の Pasta を食べた。

ふと旬君のカップに目が行った。中に入っていたのはココアだ。

「旬君、飲み物ココアにしたの？」
「ちょっと驚いてあたしはきいた。」

「ケーキだったら普通コーヒーか紅茶じゃない？」
「しかも、丁度今食べてるのもチョコレートケーキ……甘過ぎじゃないだろうか。」

「俺、ココア好きだから。ケーキの時でも普通にこれだよ」
「旬君はなんてこともないというように言ってるのけた。」

まさか、そこまで甘いもの好きだったなんて……

「それに俺、紅茶はともかくコーヒーは飲めねえの」
「旬君はせつせとケーキを食べながらそう続ける。」

「そうなの？ 苦いからダメとか？」

「それもあるけど、飲んだら腹壊すから。多分、合わねえんだな。飲むんなら、砂糖三つと半分以上牛乳入れないと無理」

「えー？ そんなのもうコーヒーじゃないよ」
「旬君の言う味を想像してみて、あたしは笑った。」
「多分それはカフェオレにもならない、コーヒー味の甘い牛乳だ。」

「本当に甘い好きなんだ。珍しいね。男の子でそんなに甘いもの

好きって」

あたしの周りの男には、いや、女の子にだってこんなに甘いもの好きな人はいなかった。特に男は、苦手な方が多い。そうじゃなくても、食べれるけど好きじゃないとか、そんな人ばかりのイメージだ。

「みたいだよな。俺の周りも嫌いなヤツ多くてさあ。男同士ではこういうとこってめったに来れねえし、今めちやくちや嬉しいんだ」
本当に嬉しいということが、顔だけでなく雰囲気でも十分伝わってくる。

「そっかあ」

旬君って、分かりやすい。そう思った。

「でも、そんなに甘いのはびっくりだったら体に悪くない？」

旬君のこの食べ具合を見ていたら、糖尿病とか（それはまだ若いから大丈夫だろうけど）具合が悪くなりそうだ。

「全然！ それよく言われるけど、俺、虫歯ですら一回もなかったことねえの。病気も全然したことねえし」

旬君は少し自慢気にそう言った。

「へえ……すごいね」

若いからなのか、そういう体質なのか、とりあえず、そういうことで痛い目を見たことがないから、旬君の甘いものの好きに拍車がかかったのかもしれない。

「でも次はメシ系取ってこよっかな。ナツは何のヤツ食べてんの？」

いつの間にか、あんなにあった旬君のケーキは、もう残り一つになっていた。

あんなに食べて、まだ食べるんだ。

「カルボナーラと……パスタは他にも色々あったよ。それと、ハムサンド」

あたしは、自分の取ってきたものを答えた。

「ハムサンド？ いいなつ。俺ハム好きなんだ。あとで取りに行こつ」

旬君はまた嬉しそうに言っ、お皿の上のケーキをフォークで刺した。

そんな嬉しそうところで、言いくいけど……

「サンドイッチはなくなってたよ。あたしが取ったのが最後だったから。また違うのに変わってたよ」

ここのバイキングは、品切れになっても続けて同じものは並ばない。丁度あたしが取った後に、確かサラダサンドに変わっていた。

「えっ!？」

そのリアクションだけで、旬君の心情が分かる。

ハムサンド一つで物凄く落ち込んでる。

たかがハムサンド、されどハムサンド。旬君にとってはそうなのだろう。

「……はい」

あたしは、旬君のお皿の上に、ハムサンドを置いた。

「え……」

旬君は目を丸くして、ハムサンドとあたしを交互に見比べた。

「旬君、食べていいよ。あたし、また他の取ってくるから」

「いいの？」

「うん。好きなんでしょ？」

そう言つと、旬君の表情は再び明るくなった。

「ナツ、ありがと！……いただきまーす！」

旬君は、どこにでもあるような、正直、コンビニにあるのとそんなに変わらないそのサンドイッチを、嬉しそうにとっても美味しそうに食べていた。

多分あたしは、旬君のその表情を見たくて、旬君にハムサンドをあげたんだと思う。

そしてあたし達は、ケーキを食べながら、雑談をした。

「ナツは食べもんで何が好き？」

「んー……特にこれが好きっていうのはいかなあ。その時の気分で変わるから……あっさり系が食べたい時は和食だし、こってりしたのが食べたい時は中華とか……」

「へー。俺はこつてり系が好き。腹減ってたらず豚骨ラーメンとか、食べたくなる」

「ああ、お腹空いてたらなるよね。でも、あたしは豚骨より醤油かな」

何でか知らないけど、食べ物の話だけだった。初デートで、こんなに砕けた話をしたのは初めてだ。でも、楽しかった。

今までの彼氏との初デートは、どこか緊張して、控えめにしていた。少なくとも、いきなりラーメンとか焼き肉の話にはならなかったし、できなかったと思う。

でも今、旬君には包み隠したりすることなく、話している。多分、旬君の雰囲気が、そうさせるんだと思う。

いきなり、携帯の着メロが聞こえた。

「あ……俺だ」

旬君がすぐに反応して、携帯を取り出した。ほんの少し不機嫌そうにしながら、着信を確認している。

「ごめん、出ていい？ バイト先の先輩からなんだ」
申し訳なさそうに旬君が聞いてきた。

「うん」

バイトの先輩……それなら出ないでしょうがない。あたしは頷い

た。

「ごめんな」

もう一度謝ると、旬君は電話に出た。

「もしもし？ …………… えっ！？」

電話の向こうの言葉を聞いてか、旬君がいきなり大きな声を出して、あたしは驚いた。

「…………… そんな…………… 先輩！ 俺だって無理っすよ！」

旬君は物凄く必死な様子でそう言っている。

何かあったのかな…………… そう思いながら、見ていると、旬君は黙り込んでしまった。

「…………… ちょっと…………… 待つ……………」

やっと出た言葉がそんな感じで、多分、相手側に無理矢理電話を切られてしまったのだろう。

旬君は呆然として、携帯を見つめ、何か考えているようだった。

「どうしたの？」

気になって、あたしは尋ねた。

旬君は、悲しそうな目であたしを見て、言った。

「ナツ、ごめん…………… バイト入っちゃった」

「本っ当ごめん！ こつちから誘つといて……マジでごめんな！」
デートが打ち切りになって、旬君はあたしを家まで送ってくれて
いる。

でも、さっきからこんな調子で謝ってばかりだ。

「いいよ、そんなに謝らなくても」

謝られても、あたしは別には腹の立てようがない。

「だって、バイトでしょ？ それならしょうがないよ」

そうだ。しょうがない。いきなり入ってしまったのなら、旬君が
悪いわけじゃないんだから。

そうやって分かってて、別に腹が立ってたりするわけじゃない。
でも、あたしは、どうもすすきりしないというか、沈んだ気持ちで
いた。

多分それは、旬君がバイトだと聞いて、あの時間が終わることを
思って、残念に思った自分がいたからだ。

あたし自身も驚いた。

そして今、何でもないフリをしている。

あつという間に、あたしのコーボの前まで来てしまった。

「じゃあ……バイト前なのに、送ってくれてありがとう」
あたしは、立ち止まって、旬君に言った。

「ううん。まだ時間あるから……」

旬君はそう言うと、少し寂しそうな顔になった。

「ナツ、あのさ……」

口を開いた旬君を、改めて見上げた。

「今日、付き合ってくれてありがとな。俺、すっげー楽しかった」
旬君は、表情を明るくして、笑顔でそう言った。

そっか……

楽しかった、か……

「あ……あたしもっ」

知らない間に口をついていた。

この先に続く言葉が恥ずかしいと気付いて、あたしは下を向いた。

「あたしも……今日、楽しかった、よ……」

自然と声が小さくなったけど、それがあたしの正直な気持ちだった。

あたしも楽しかった。

旬君に会うのはまだたったの三度目で、旬君のことは殆ど知らない。そんな相手と一緒にいてそう感じることはないと思ってた。なのに、今日はとても楽しくて、今日が終わるのが寂しいと思う自分がある。

「また……また行こうな！ 今度、ちゃんと埋め合わせするから！」
旬君は今日一番の笑顔になって、そう言った。

「うん」

あたしもつられて笑って、頷いた。

頷いたのは勢いとか、こう言うしかないからじゃなくて、確かにあたしの意思だった。

「それじゃ、終わったらまた電話するな」

「うん。待ってる。……旬君、バイト頑張ってるね」
そういうことも、自然と言えた。

「あ」

旬君は何かを思い出したように声に出した。

「ナツ。俺のこと、次からは旬って呼んで」

「えっ……」

何の脈絡もなく言われて、あたしの心臓は跳ね上がった。

「呼んでみて」

旬君は、にっこりと笑っている。

「いつ今!？」

「うん。今」

笑顔を崩さずに旬君は頷いた。
そんな笑顔で言われても……

「……………し」

呼んでみようと思っても、それが精一杯だった。
どんどん顔が熱くなるのを感じる。

「……やっぱり今は無理！」
恥ずかしくて下を向いた。

何で、名前を呼び捨てにするぐらいで恥ずかしがってるんだろう……そんな自分が尚更恥ずかしかった。

「可愛いから許す！」
旬君はいきなりそう言った。

「なっ何言ってるの……」
あたしは、自分でも分かるぐらいに目が泳いで、狼狽えてしまった。

旬君はそんなあたしを見て笑ってる。

「もうっ！ 早くバイト行かないといけないんでしょ！」

「はいはい」
必死になってるあたしに、旬君はまだ少し笑っていたのがちよつと悔しかった。

「じゃあまたな！」
旬君は最後にそう言って、大きく手を振りながら歩き出した。

「うん。またね」
あたしも、そう返して、手を振った。

そして、あたしは離れていく旬君の背中を、見えなくなるまで見つめていた。

今日、旬君と一緒にいて、あたしは旬君のことを好きになったのか……それは分からない。

ただ一つ、はっきりとしたのは、あたしは旬君のことを、嫌いになることはないだろうということ。何故かは分からないけど、そんな気がした。

今のあたしは、旬君との『また今度』を楽しみにしていて、今日が始まるまでの自分と違うのは、明らかだった。

だから、大丈夫。これから、ちゃんと付き合っていけると思う。
旬君……じゃなかった。旬、と……

こんな複雑な気持ちを抱えているあたしが、一年後にはどう変わるかなんて、今のあたしには、想像もできないことだった。

10 卒業の日

「沖田。お前、本当にそれでいいのか？」

俺の目の前で、深刻な顔をしている担任。いや、正確には元担任。

「はい。俺的には特に問題ないです。ていうか、むしろこうじゃないと嫌なんで」

元担任の深刻な顔とは逆に、俺はいつもの調子でそう答える。

「だがなあ、やっぱり専門学校に行った方がいいんじゃないか？
今ならまだ間に合うし……」

今日は、高校の卒業式の日だ。

といっても、式は一時間前に終わって、最後のHRもあつという間に済んだ。

他の奴らは解放感に浸っているのに、俺だけ呼び出しをくらってしまった。もう卒業したつてのに。

呼び出されたのは、進路の話で、だ。

昨日、卒業式の事前指導で久々に学校に行った俺は、担任に専門学校には行かないで働くということを口で伝えた。

その時の焦りようといったらむしろ笑えるぐらいで、放課後に残れと言われたのを、俺は面倒臭くて忘れてしまい、帰ってしまった。だから今日、終わるなり職員室に連行されたというわけだ。

「だいたい、ご両親とはちゃんと話し合ったのか？」

「はい」

「……何も言われなかったのか？」

「はい」

元担任は、物凄く顔をしかめている。

でも一応嘘じゃない。

専門学校に行かないっていうのは伝えだし、渋々って感じだったけど、了承はしてくれた。だから問題ないはずだ。

「沖田。どうして今更進路変更なんだ」

元担任は真剣な顔になった。

「どうしてって……まあ、今って就職厳しいじゃないですか。専門行って、資格取ってもそんなに変わんないし。だからもう今のうちから働く方が得策かなーって思って」

俺は思い付いたことを適当に並べてそれっぽく言った。

何でって言われても、ナツと見合うような男になりたいから。それだけしかない。

「沖田。そう言うことは、就職になんか当てでもあるのか？」

「え、ないっすよ。だから言ったじゃないですか。今、就職厳しいって。そんな中で当てなんてあるわけないでしょ」

速攻ではつきりそう言っと、担任の顔が引きつった。

マズいこと言っただけだ。

「ていうか、行きたくないのに専門行つたって、金が勿体無いだけだってことですって」

俺は無理矢理フォローを入れて担任を誤魔化そうとする。
親にもこう言ったら納得された、いわば切り札だ。

「……じゃあ、沖田。お前は本っ当にそれでいいんだな？」

念押しするように担任は言った。

やっぱり、経済的なことを言われたら何も言えないらしい。

「はい」

「……つたく、お前は一年間で進路を変えすぎだ。春の進路希望では専門学校。夏前にいきなり大学受験するとか言い出したかと思つたら、今度は就職。俺が受け持った生徒の中でそこまで変えたやつは沖田が初めてだよ」

元担任がため息をついている。

「んじゃ、センス。もう帰っていいってこと？ つうか帰ります」
俺は鞆を持って椅子を立ち上がった。

「……………じゃあとりあえず、就職決まったら連絡しろよ。進路調査に必要なんだか」

「さいならー」

「おい！ 人の話を聞けー！」

なんか喚いてる担任の声なんて、俺には聞こえてなかった。

「あ、匂。やっと解放されたかー」

「クラスの打ち上げ、六時からカラオケだつてよ」
廊下で同じクラスのダチが俺に声をかけてきた。

「俺、パス！ 予定あるから」

俺は迷うことなく断った。

「え、来ねえの？ 珍し」

「バイトでも入っちまったのか？」

二人とも不思議そうに俺を見る。

確かに、俺はいつも行事の打ち上げとか、クラスの集まりには参加してたから、最後で最初の、不参加だった。

「バイトじゃないけど、ちょっとヤボ用！ んじゃな！」

そう言つて俺は軽く走つて最後の学校を後にした。

今日は、高校卒業よりも、クラスの打ち上げなんかよりも、大事な用がある。

それは、ナツの家に、初泊まりをするということ！

五日前、ナツと電話をしてた時……

「あのさ、ナツ……」

俺は意を決してナツに切り出した。

「何？」

「あの……次の金曜日、俺、卒業式なんだ」

「あ、そっか。まだ式は終わってなかったのよね」

「うん……それで、その日、さ……会える？」

ガラにもなく、めちゃくちゃ緊張した。

「うん。大丈夫。……あ、でもいいの？ 高校最後なんだし、友達とかと遊んだりはしないの？」

俺の緊張をよそに、ナツはそんな気遣いをしてくれる。

「いや……それは特に、ないんだけど……」

まだ知らないけど、俺はいつぱいいつぱいになりながらそう言った。

「その、もしナツがよければなんだけど……」

この先の言葉が一番緊張する。でも、言っつて決めたから、言わないと……

「泊まりに行ってもいい？ ナツんちに……」

言っつた……！ ついに言っつた！

俺とナツは、付き合い始めて、まだ一度も……してない。キスすらしてない。

いや正確に言えば、付き合い合うことになってすぐ、俺が嬉しくてキ

入したけど、それは何か一方的だったし、何か違うつていうか……
そもそも、俺らは付き合う前にやっちゃったわけだから、そこから
順番がおかしくなってるわけだし……

だから、次にナツとセックスするときは、ちゃんとナツが俺のこ
とを好きになってくれてから。そう決めて我慢していた。

ナツとは初デート以来、お互いに上手いこと都合が合わなくて、
一度も会えてない。

でも、メールか電話は毎日していて、そのナツの俺に対する態度
とかは、日に日に良くなってるんじゃないかと思う。

ちゃんと俺のことを『旬』って呼んでくれるようになったし（最
初に電話で呼ばれた時の、ナツの恥ずかしそうな声は物凄く可愛か
った）、たまにナツの方からメールをくれる。

だから、もうそろそろいいんじゃないか。つつか、もうそろそろ
俺の方が我慢できない。

それで、これでも悩みに悩み抜いた後、丁度俺の卒業式が金曜日
だからというのもあって、その日を選んだ。

勿論、ナツが良ければだけど……

「え……」

ナツは、電話の向こうで、明らかに困惑してるようだった。

ダメ……か？

俺の心臓はかなり速く鼓動していて、無意識に、拳を握り締めていた。

つつか『泊まりに来ない？』ならともかく『泊まりに行ってもいい？』なんて、男として格好がつかなさすぎだ。

でも、俺の家は親居るし、絶対好きにできないから呼べない。

それに、ナツの家に行ってみたっていう願望もあつたわけで……

「あ……あの、その……」

ナツの一言一言に、俺は神経を通して聞いた。

「あたしの家……狭いし何もないから、来てもつまんないかもしれないよ？」

これは、遠回しに断られてるんだろうか……それとも……

「それでも……匂がいいなら、あたしは、いいけど……」

で、ことは、いいのか？ いいんだな？

「うん！ 全然いい！」

部屋がどうとか、関係ない。ナツさえいれば、それで十分なんだから。

てなわけで、泊まりが決定したんだけど……

泊まりOKってことは、つまり、夜のあれの方もOKってことだよな？

ナツだつてそれぐらい分かつてるだろうし……ダメなら、泊まりOKになんてしないよな？

俺が気にしているのはそのことだけだつた。

でも、ダメにしろいいにしろ、泊まりなら絶対そういう空気になるだろうし……ていうか、絶対そついう空気にするし。

その時のことを思うと、楽しみで楽しみでしうがなかつた。

とりあえず、一度家に帰る。

ナツとは、五時にナツの会社の前で待ち合わせということになる。だから、重たいアルバムとか卒業証書を一度置きに戻つたのと、いるものを取りに戻つて来た。

「ただいまー」

そう言つてリビングへ行くと、母さんがワイドショーに食いついていた。

「あら、おかえり。早かつたのね」

母さんはそう言つて、ちらつと俺を見ただけですぐにワイドショーに視線を戻した。

「うん。またすぐ出るけど。昼飯は？」

もうすぐ三時だけど、呼び出しをくらったせいで遅くなって、まだ食べてない。流石に腹が減ってる。

「チャーハンが残ってるから自分で温めて食べて」

息子のために動いてくれるような気配はないから、俺は言われた通りに自分でやろうと台所に向かった。

「あ、母さん。俺、今日は泊まりだから」

忘れる前に伝えておく。どうせダメだとは言わないだろうし。

「はいはい」

案の定の返事が返ってきた。

いつもとは変わらないけど、何か、俺が専門学校に行くのをやめるって言うってから、軽く見放されてる気がする。

まあ、別に気にしてないけど。

チャーハンを食べたあと、俺は自分の部屋に行き、泊まりの準備を始めた。

着替え……は、いいや。制服で行こう。スウェットだけ持つてくか。

俺は、プリントとか文集やらの冊子とか、鞆の中身を取り出していった。紅白饅頭を見つけたから、それは開けて食べる。

食べながら、空になった鞆に、その辺に落ちてたスウェット上下

を押し込んだ。

あとは何もいらないか。どうせコンビニ寄るし、そんな時に買えば十分だ。

楽しみだなあ……

時間が経つ度にその気持ちは強くなっていった。

五時五分。

そろそろだな。

時間を見て、俺はナツの会社を見上げた。

今日もまた、三十分も早く来てしまった。でも暇だったし……途中で寄ったコンビニで少しだけ立ち読みしてたけど、頭の中がナツだらけだったから、漫画の文字が全く入らなかった。

それよりは、何もすることがなくても、こうしてナツを待ってる方が楽しかった。

好きな人を待つのは、楽しいことだと思う。

今日は、どんな服を着てるのかな、とか、今どの辺にいるのかな、とか、向こうも俺のことを考えていてくれるのかな、とか……好きな人のことだけを、ずっと考えていられる時間だから。

「旬」

はっと気付くと、ナツが出入り口から出てきて、小走りでこっちに向かってきていた。

「ナツ！」

久しぶりにナツの姿を見て、自分でも顔の力が緩むのが分かった。

「ごめんね。待った？」

「ううん！ 全然」

俺は首を横に振った。

ナツとの待ち合わせは、いくらナツが遅れても、全然待ったことになんかならない。ていうか、俺が早く来てるだけだし。

「あれ……旬、制服なの？」

ナツは俺を見て言った。

「うん。もう着納めだし。あ、そうだ」

俺は制服を着てきた一番の理由を思い出し、学ランの第二ボタンに手をつけた。

少し強く引っ張るとブチッという音をさせて、ボタンは取れた。

「はい」

俺は、それをナツに手渡す。

「え？」

ナツはきょとんとしている。

「貰ってよ。俺、夢だったんだ。彼女に第二ボタン渡すの」

これが目的だった。

卒業の定番だけど、中学の時はブレザーだったから、やったことがなかった。

高校に入ってから、年上の卒業式の時に、ボタンを貰いにいく女子を見て、初めて知った。

第二ボタンは、その人の心に一番近いから欲しいものなんだって。

だから、それなら俺が一番好きな人にそれを渡したいと思ったんだ。

俺の気持ちを、好きな人に……

ナツは、暫くじつと俺を見て、吹き出した。

「え、何？　どうかした？」

吹き出した意味が分からず、俺は首を傾げてナツに聞いた。

「だって、それ女の子の夢みたい。好きな人の第二ボタンを貰うって」

クスクスと笑いながら、ナツは言った。

確かに普通は女子だけみたいだけどさ……こういうのに拘るの。

「ナツは、あんまり気にしない？　こういうの……」

だとしたら、かなり恥ずかしいことをしたのかもしれない。

「ううん。気にしないっていうか、あたし、初めてだから。中学の時も高校の時も、男子はブレザーだったし、貰えるような人、居なかったから気にすることもなかったの」

「てことは、俺が初めてってこと？」

「……そうなる、かな？ 少なくとも、こういう風に言われたのは初めて」

そう言って、笑いながら、手を差し出した。

「貰ってくれんの？」

「だって、くれるんでしょ？」

ほんの少し唇を尖らせたナツが、可愛くて、俺は笑った。

「へへっ……はい」

差し出されたナツの手に、俺の第二ボタンを置いた。

「ありがとう」

少し照れくさそうになって、ナツは言った。

「どういたしまして」

俺はもう満足だった。

ナツが、俺の気持ちを受け取ってくれたということだけで。

「あ、そうだ。旬、卒業おめでとう」

ナツは思い出したようにそう言った。

「普通、こつちが先よね」

「あ、そっか。忘れてた」

ナツに言われて、俺も思い出した。

卒業したっていうのは頭でちゃんと分かってたけど、気持ち的にはあんまり実感がなかったっていうか、それがめでたいことなんて感じはなかった

「何それ」

ちよつと呆れた感じでそう言ってナツはまた笑った。

「へへっ」

俺も一緒に笑った。

俺は、ナツと一緒にいると、それだけで笑えるようになっていた。

11 彼女の部屋で（前編）

ナツが晩飯の材料を買おうと言って、俺達はナツの家の近くのスーパーに寄った。

「旬、何食べたい？」

買い物カゴを持って俺に尋ねるその姿は、まるで新妻で、物凄く可愛い。

いいなあ。新妻かあ……

「旬？」

「え？ ああ、何でもない。てか、カゴ持つよ」

ナツの声で、俺は妄想の世界から返ってくる。

そしてナツの持つカゴに手を伸ばした。

「いいよ。そんなに買わないだろうから大丈夫」

「でも、彼女に荷物持たせて歩くわけにもいかねえもん。俺が持つよ」

男として、彼氏として、ちょっといいところを見せようと思って、俺は言った。

「……じゃあ、ありがとう」

少し照れくさそうにナツは言っ、俺にカゴを渡してくれた。

「それじゃあ、何食べたい？」

改めて、という風にナツは言った。

「俺が決めていいの？」

「うん。だって、旬の卒業祝いだし」

そんな名目があったのか……

俺は単に、初めてナツの家に行けると泊まれるのと、それぐらいしか考えてなかった。

でも、それなら、初めてナツの手料理も食べれるわけだ。

俺のための料理かあ……

いいなあ、この響き……

「じゃあ、肉食べたい」

ナツの手作りなら何でもいい。でも今は、腹が減ってるから、がつつり食いたい。

「肉？ 何の？」

「それは何でもいいよ」

「……んー。じゃあ先に肉のところに行こう。時間ちょっと遅いから、なくなっちゃうかも」

キビキビと動いて、ナツは俺を肉のコーナーへと連れて行った。

「あー……やっぱりあんまりないかなあ。昨日買い物しとけばよかった」

ガランとしているコーナーを見て、ナツが残念そうに、ちょっと悔しそうに言った。

ポツポツと残ってる肉のトレイを見て、考えている。

「何かナツ、主婦みたい」

俺は思ったままの感想を言った。

「えっ……それっておばさんくさいってこと？」

かなりシヨックを受けたみたいに、ナツは言った。

「うっん。新妻っぽいってこと。ナツっていい奥さんになりそうだよな」

そう言っていると、ナツは赤くなった。

「なっ何言ってるのっ。……それよりどうしよつか、晩ご飯」
明らかに誤魔化そうとする様子でナツは言った。

バレバレな感じが何か可愛い！

「豚挽き肉と鶏挽き肉ぐらいしかないなあ。合い挽きがあればハンバーグでもできるけど……」

「そうだなあ……」

可愛い奥さんのナツを見ながら、俺は相づちを打った。

ふと、見てみると、隅の方に餃子の皮のパックが置いてあった。

「ナツ。餃子は？ 餃子って豚だよな？」

餃子の皮を見せながら、ナツに言った。

「え……うん。そうだけど」

「じゃ、餃子にしよ。餃子パーティー！」

思いついたままに、俺は提案した。

そう考えると、すごく餃子が食べたくなってきた。

「……いいの？ 包むのとか時間かかるし、遅くなっちゃうよ？」
ナツは、微妙な表情になって言った。

「いいよ。俺も手伝うし。あ、もしかしてナツは嫌？」

「嫌ってわけじゃ……その、餃子でもいいんだけど……」

「何？」

俺が聞くと、ナツは物凄く真剣な顔になって、俺を見上げた。

「その……にんにく抜きでいい？ 臭い、きつくなっちゃうから」

その表情で何を言うのかと思ったら、そんなことだった。

いや、女の人にとっては『そんなこと』ではないか。俺は別に気にしないけど……どうせ同じもん食うんだし……

あ、でも、今日は初泊まりだし、やめといった方がいいかな。に

んにく臭さでムード壊したくないし。

ていうか、俺がナツに臭いって思われたくないし。

「うん。いいよ」

俺は頷くと、ナツはほっとした表情になった。

「それじゃあ、今日は餃子ね。他の材料も買わないと」

一気に張り切り出したナツは、やっぱり新妻みたいだった。

「じゃあ……もういるものないかな……」

食材を入れていっぱいになったカゴの中身を見て、ナツは買い忘れがないか確認してる。

「あ、旬。歯ブラシとか買わないと。うちにはピンクとかしか予備の分ないから……」

「もう買ってるよ。待ち合わせの前に、コンビニ寄ったから」

「えっ、準備いいね」

「だろっ?」

そう言われたけど、コンビニには歯ブラシを買いに行ったわけじゃなくて、他のものを買う予定で行った。

そしたら、偶然歯ブラシが目についたから買ったただけだ。

「あ、そうだ。ナツ、酒買おう！」

大事なものを忘れてた。

今日はパーティーだから、パーツとやらないと。

俺は酒売り場を見つけ、カゴを持ったまま向かった。

「ちよっ……旬！ 待って！」

ナツは俺の腕を掴んで引っぱ張った。

「未成年が堂々とお酒のコーナーに行かない！」

少し強めの口調で注意するように、ナツは言った。

「何だよ。未成年だから酒はだめって？ 固いこと言うなよお」

いや、普通にダメだけだな。（酒は二十歳になってから！）

「そうじゃなくて！ 旬、今制服でしょ！ 一人で勝手に行かないの！」

怒っているようで、まるで小さい子供に叱るみたいな口調が可愛い。（それが俺に向けられてるのはちよっと気になるけど）

本当に、ナツは色んな表情するなあ。

「ほら、行くよ」

ナツは、俺の腕を引っ張ったまま、酒のコーナーへ行った。

これって、腕組んでるみたいでちよっという感じじゃ……

て、思ったけど、ナツがビールをカゴに入れる時に、その腕は自然と離れてしまった。

買い物を済ませた後は、いよいよナツの家だ。

「旬、大丈夫？ ごめんね、重い方持ってもらって……三階だから、ちよつとキツいかもしれないけど」

ナツのコーポのエントランスを抜け、階段に差し掛かったところでナツが言った。

「ううん！ 俺が持ちたいから持つんだし。それに、全然重くないから大丈夫」

俺は、余裕の笑みを浮かべた。

いつもバイトじゃ瓶ビールが入ったカゴを持ち運んでるし、缶ビール四本が入ってる袋くらい本当に余裕だ。

でもこれで少しはナツにいいところを見てもらえたかな。

ナツの部屋は、三階に上がって右に曲がって、二つ目にあった。

「本当に、あんまり期待とかしないでね。一応掃除したけど、本当に狭いし、何もなから……」

部屋の鍵を開けながら、ナツは念を押すように言った。

「そんな言わなくても大丈夫だよ」

ナツの部屋ってだけで、俺には十分だから。心の中でそう付け足した。

「じゃあ、どうぞ」

ナツがドアを開けて、俺を中に進めてくれた。

「お邪魔します」

さすがにドキドキしながら、俺は部屋に入った。

綺麗に整頓されてる玄関で靴を脱いで、中に上がった。そこから短い廊下が伸びていて、部屋に繋がっている。

ナツが部屋に行く後ろについて、俺も部屋に向かった。

ナツは薄暗い部屋に電気を点けて、エアコンをつけた。

「旬。荷物、こっちに持ってきて」

そう言ってナツは台所の方に行く。

俺は、じっと部屋を見回した。

ナツの部屋は十畳ぐらいの1Kだった。

壁際にベッド、真ん中にローテーブル。端の方にテレビ……そんな感じで、ナツは狭いと言ったけど、一人暮らしなら十分ぐらいだ。

それに、建物自体はそんなに新しくはないけど、それでもナツが綺麗に使ってるの是一目瞭然で、部屋のどこを見てもきちんと整理整頓されてむしろ広く感じた。

俺とは大違いだ。

「……旬。あんまり見ないで」
ナツが恥ずかしそうに言った。

「いやー。やっぱり女の人の部屋だなーって思って。すっげー綺麗だし」

「そう？ よかった。掃除して……」
ほっとした様子でナツは言った。

そう言いながらも、ナツのことだから、普段からちゃんとしてそうだけど。

「じゃあ、すぐに準備するからね。あ、包むの手伝ってくれるんだったら、手、洗つといてね。廊下出て右側が洗面所だから」
ナツはスーパールの袋から材料を取り出しながら、そう言った。

「うん。分かった」
俺は、ナツに言われた通りに、洗面所へ向かった。

洗面所は、脱衣所と一緒になってるみたいで、すぐ横には風呂があった。

そこでふと思った。

今日、泊まりってことは……もしかして、ナツと一緒に風呂にも入れちゃったりするかもしれないのか!?

てことは、体洗い合ったり、一緒に湯船浸かったり、あんなことしたり、こんなことまでしちゃったり……

俺の妄想は膨らんでいく。頭の中に、リアルなナツの裸まで浮かんだ。

すっげー楽しみ！

まだ一緒に入るとは決まってるのに、俺（と俺の下半身）は、張り切りまくっていた。

手を洗って部屋に戻ると、ナツは台所で挽き肉をこねていた。

俺に気づいたのか、すぐにこっちを向いた。

「ねえ、旬。餃子なんだけど、そっちでホットプレートで焼く？ そっちの方がパーティーっぽいでしょ？」

ニコツと笑ってナツはそんな提案をした。

「あ、いいな、それ。そうしょ！」

俺はすぐに頷いた。

「じゃあ、もうちょっと待っててね。すぐ持ってくるから。テレビでも見てて」

「うん」

俺は、ローテーブルの横に用意されていた座布団に座って、テレ

ビをつけた。

ちょうどゴールデンタイムだったから、テレビに映ったのは人気のバラエティーで、俺はそれを見始めた。

でも、タイミングが悪かったのか、すぐにCMに入ってしまった。

何となく、部屋を見回していると、ふとベッドに視線が行った。

白いシーツに、薄いピンクのかけ布団と枕。

シンプルだけど、女の人のだとすぐに分かるベッドはシワ一つなく整ってる。

あと何時間かしたら、俺とナツはそこに居んのかな……

今度は、前にホテルで触れた、リアルなナツの感触まで蘇ってきた。

ヤバイ……ナツの部屋のものって全部（っていつても、風呂とベツドだけ）エロい妄想に繋がる。

でも、正直飢えてるから、しょうがない。

「旬」

「うお!？」

後ろからナツの声が聞こえ、俺の心臓が跳ね上がった。

「何? どうしたの?」

振り返ると、お盆を持ったナツが目を丸くしていた。

「いや！ 何でも！」

俺は首を横に振って目一杯で否定した。

「そう？」

首を傾げながら、ナツはお盆をローテーブルに置いた。

お盆の上には、ボウルが二つと、餃子の皮と、皿が乗っていた。

「この二つって違うの？」

俺はボウルを指さしてナツにきいた。

「うん。こっちが、ニラと白菜ので、こっちは、大葉とネギ」

ナツは一つずつ指さして教えてくれた。

「大葉？ 大葉って、シソだよな？」

「うん。あ……もしかして嫌いだった？」

「ううん。嫌いじゃないけど……でも、餃子にシソって食ったことない」

「そうなの？ これ、さっぱりしてて美味しいんだよ」

「へー……楽しみ」

ナツのちよつと珍しい具材に、俺は興味津々だった。

「じゃあ、旬はそっち詰めてね。あたしはこっちをやるから」

そう言って役割分担を決めて、早速ナツは手際よく詰め始めた。

ナツの方は、慣れてるみたいで、綺麗に早く出来上がっていく。

俺の方というと……

「旬、そんなに包んだら皮が破けちゃうよ」

ナツに注意を受けていた。

「大丈夫だって」

俺は笑って言いながら、皮の上に乗った山盛りの肉を包んでいく。

破かないように、慎重に伸ばして……

「ほら、できた」

破かずに包めた俺は、それを皿に置いてナツに見せた。

「なんか不細工……」

ナツはちよっと口を尖らせた。

確かに、ナツのに比べたら、丸々と太ってるみたいだ。

「食ったら一緒だって」

俺が言くと、ナツは小さく『もうっ』と言って、笑っていた。

でも結局、俺のデブ餃子は包むのに時間がかかって、さっさと自分の方のを終わらせたナツが半分ぐらい手伝ってくれた。

「……もうそろそろかな」

そう言って、ナツはホットプレートの蓋を取った。
すると白い湯気が立ち上る。

「おおー！」

湯気の中から現れた餃子を見て、俺は声を上げた。

「お皿に移すね」

そう言って、ナツはフライ返しを使って皿に餃子をのせた。

「こっちが、ニラと白菜で、こっちが大葉とネギね」

二つに分けて皿を置くと、ナツはホットプレートに次の餃子を乗せようとする。

「ナツ。先に乾杯しよー！」

ナツを止めて、俺は缶ビールを持ち上げた。

「あ、そうね」

ナツは手を止めて、缶ビールを手を取った。

「じゃあ、旬。改めて、卒業おめでとう」

「うん。ありがとう」

カッソンと缶が当たって、乾杯をした。

ブルタブを開けて、俺は一口ビールを飲んだ。

「あー！ うまい！」

久々のビールに、声が出た。

「旬、おじさんみたい」

ナツもビールを一口飲んで、笑いながらそう言った。

「だって、楽しい時の酒って美味しいじゃん。いったただっきまーす！」
俺は早速箸を持って、シソ入り餃子をつまんだ。

ポン酢とラー油をつけて口に入れた。

「……美味しい！ これ、すっげー美味しいよ、ナツ！」

口の中に広がった味に、俺は絶賛した。

ナツの言った通りシソの味がさっぱりしていて、それでも物足りないことはない。この組み合わせは絶妙だった。

「ね。スタンダードなのと一緒にいたら飽きないでしょ」

ナツも、次の餃子を焼きながら、嬉しそうに言った。

「うん！ つうかこれ、ビールに合うなあ」

俺はビールを飲み、餃子を二個目三個目と食べていった。

「やっぱりおじさんみたい」

ナツが笑って、俺も笑った。

それから、俺達は、ご飯を食べて、酒を飲みながら、色々喋ったり、テレビにつっこんで笑ったり……とにかく楽しい時間を過ごした。

気がつけば、もう九時半を回っていた。

「なあ、ナツ。もう一本開けよー」

俺は、二本目の空になったビールを振って、ナツに言った。

「ダメ。未成年がそんなに飲んだら体に悪いでしょ」
ナツはそう言って、首を横に振った。

「俺、酒は結構強いから、大丈夫だって」

「そんなこと言って、酔ってるじゃない」

「ほろ酔いだからあと一本ぐらい大丈夫」

「ダメ」

ナツはなかなか首を縦に振ってくれない。
ていうか、かなり年下扱いされてる気分だ。

「なんだよ」。ナツは居酒屋で悪酔いするくらい飲むくせに
ちよっといじけて俺はあの日のことを口にした。

「なっ……何言って……」

「あの時さあー……俺、本当は十時上がりだったのに、閉店までいることになっちゃったし」

本当はそれほど気にしてない。

あの日の分は、店長が給料に上乘せしてくれたし、それに何よりも、ナツに出会うことができたから。

しかし、ナツは黙ってしまった。

空気が微妙なものになる。

「ごめんっ……ちょっとふざけすぎて……」

俺は慌てて謝った。

ナツにとって、あの時のことは言っていないことじゃなかったよな…

「ううん……」

ナツは首を横に振ってくれたけど、微妙な空気はそのままだった。

「なあ、ナツ……その、そんなにショックだった？ 元彼と別れたこと……」

聞いていいことなのかどうか迷った。というかこのタイミングで聞くのはどう考えてもおかしい。

でも、どうしても気になってしまって、しょうがなかった。

ナツが、俺という時でも、元彼のことを忘れないんじゃないかって……

「ショックっていうか……そんなんじゃない、やっぱり悔しいの」
ナツは下を見ながらそう言った。

「あたしは、相手にあんな風に思ってもらいたくて付き合ってたわけじゃないのに……あたしなりに、相手のことを考えて付き合ってたのに……」

「ナツ……」

辛そうなナツを見て、俺も何だか胸が痛くなった。

「それなのに、あんなデリカシーのない発言する人だとは思わなかったの！」

ナツがいきなり声を大きくして俺は驚いた。

デリカシーのないって……あれか。不感症発言。

確かにそれはひどいよな。普通言わないし。つつか、ナツは全然不感症じゃないし。

「……やっぱり、付き合い方から間違えたのかな……」

ナツはそう呟いてビールを一口飲んだ。

「付き合い方……？」

「うん……元彼とはね、合コンで知り合ったの。友達に付き合い合われて行ったんだけどね。……それで、相手の一人が、友達のことを好きになって、二人が付き合うことになったの。あたしの元彼は、その人の友達で、一緒に話してて、お互いに友達が付き合うことになったから、俺達も付き合いおうか、って言われて」

「……それで付き合い始めたの？」

「うん……あたし、昔っからこんなのばかりなのよね。相手に流されるままになってるっていうか」

ナツはそう言って苦笑した。

「流されるあたしが悪いのは分かってるけど……なんか、ここまでくると男運ないのかなーって思っちゃう」

ナツは笑ってはいるけど、何だか、寂しそうだった。

俺は、ゆっくりとナツに手を伸ばして、ナツの体を引き寄せた。そして、腕の中にナツを収めて、ぎゅうつと抱き締めた。

「え……」

腕の中で、ナツは驚いたような声をあげた。

「旬……どうしたの？ いきなり……」

「ぎゅーってしたくなっただから。ナツのこと」

どうしてかと聞かれたら、ナツのことが愛しくなったから。それだけだった。

愛しいって言葉の意味が、初めてちゃんと分かった気がする。

今、俺の腕の中にいるナツみたいに、温かくて、柔らかくて、優しくくて、とても心地いいものなんだ。

俺達の出会い方も、普通じゃない。付き合い方だって俺の方から言って、ナツは流されただけだったのかもしれない。

でも、俺はそれを後悔させないよ。
絶対にナツを悲しませたりなんかしない。

俺は抱き締めていた腕を緩めて、ナツの髪を触った。
サラサラしてて、気持ちいい。

「ふふっ……くすぐりたいよ」
ナツの首に指が触れた途端、ナツは首を縮めて笑った。

「ナツ、首弱い？」

「旬の触り方がくすぐりたいの」

ナツが俺を見上げた。
思った以上にナツの顔が俺の顔の近くにあった。

俺が頬に触れる、ナツは恥ずかしそうに目を伏せた。

「ナツ……好きだよ」

そして、俺達は、恋人になって初めてのキスをした。

11 彼女の部屋で（前編）（後書き）

ブログ始めました！ 執筆状況などをお知らせしていきたいと思っています。 作者紹介ページからHOMEにリンクしてあります。ぜひ覗きにきてください

12 彼女の部屋で（後編）（前書き）

ほんの少しですが、エッチなシーンがあります。苦手な方はご注意下さい。

12 彼女の部屋で（後編）

唇を離して、俺達はお互いの顔を見合った。

ナツの頬は、ピンク色に染まってて、温度も少し高かった。

俺は、その頬に軽くキスをして、もう一度、ナツと唇を合わせた。

今度は、そつと舌先でナツの唇を舐めた。

同じものを食べたせいかな、あんまり味という味はしなかった。

ナツは、俺の舌を受け入れてくれて、俺に合わせて、優しく舌を絡めてくる。

この間みたいにな、されるがままだったら嫌だから、俺もナツを、精一杯かき回した。

「んっ……」

ナツが苦しそうに声を漏らすと、俺は角度を変えて、何度も何度も繰り返した。

ヤバイ。興奮してきた。

だんだんと激しくなってきた、俺は理性が飛びそうになっていた。

……この雰囲気なら、飛ばしても大丈夫かな？

俺はそつとナツの背中から腰を撫でた。

ナツの体がピクリと動く。

そのまま手を進め、ナツの服の裾から、侵入していく。

「やつ……ダメ！」

ナツが体を後ろに引くようにして唇を離した。

俺はびっくりして固まるしかない。

ダメ…？ この状況で…？ しかも、いやって言った…？

俺の頭が真っ白になる。

ナツに拒否られた。

それだけがショックだった。

「さっ……先にお風呂入る？ それに、後片付けもしなくちゃ」
ナツは目を泳がせながらそう言った。

その言葉を理解するのに、少し時間がかかった。

お風呂…？

「あ、そっか」

そういえばそんな楽しみもあったんだ。と、俺は思い出した。

続きは風呂の中でってことか。

ちよつと想像して、にやけてしまふ。

「じゃあ、お湯溜めるから……溜まったら、匂、先に入ってね」
ナツは俺の腕の中からするりと抜け、立ち上がりながら言った。

「え！？ 一緒に入んねえの？」
俺は思わず声をあげてしまった。

ナツは目をぱちくりさせ、顔を少し赤くしている。

「入んないよ。片付け、先にやつちやいたいし」
ナツはテーブルの方に目をやりながら言った。

「えー。一緒に入ろーよ。片付けなんか後でいいじゃん」
俺はナツの手を握って言った。
せっかく楽しみにしてたのに、おあずけなんてあんまりだ。

「ダメ。お風呂入った後はゆっくりしたいじゃない」

「じゃあ、片付け終わってから一緒に入る？ 俺も手伝うから」

「それだと時間かかるでしょ？ ……匂、一人じゃお風呂に入れな
いの？」

「入れるけど……」

ナツの言い方はずるい。
そんな風に言われて、入れないなんていったら、彼氏としてかつ
ご悪い。

ただでさえ、たまに年下扱いされてるのに……

「じゃあ、先に入っておいてね」
ナツはそう言っ、風呂場の方へと行ってしまった。

あーあ……かなり期待してたのに。

脱衣所で服を脱ぎながら、俺はまだ少し納得できないでいた。

しかも、ナツの態度って結構あっさりしてないか？
チューしてる時はかなり激しかったのに……

ん……？ 待てよ？

（お風呂入った後はゆっくりしたいじゃない）

あれって……ゆっくり『したい』って……

俺の頭の中に、妄想ビジョンが溢れ出す……

そういうことか。

そっか。ナツもやっぱりそうだな……

俺の中の勝手な妄想で、俺は納得できた。

まあ、後でゆっくり楽しめると思えばな！

俺は、いつもより念入りに体を洗って、風呂を出た。

スウェットを着て部屋に行くと、ちょうどナツも片付けを済ませたところみたいだった。

「あ、匂。出た？」

ナツは台所から部屋に顔を出して俺に言った。

「ドライヤー、そこに置いておいたから使ってね」

「あ、うん。ありがとう」

「じゃ、あたしも入っちゃうね」

そう言って、ナツは部屋の端にあるチェストから、パジャマと下着らしきものを出して、風呂場へ行った。

ナツって寝る時、パジャマ派なんだ……

パンツとか、ブラジャーは下から二番目か……

ちょっと引き出しを開けてみたい衝動に駆られたけど、そこまでしたら変態だし（否定はしないけど）やめておいた。

俺はナツが用意しておいてくれたドライヤーで、軽く頭を乾かす。

あ、そうだ。

肝心なことを思い出し、俺はドライヤーを止めて、持ってきた鞆をあさる。

中から出したのは、コンビニの袋。

さらにその中から取り出したのは、箱入りのコンドーム。

ナツとの待ち合わせの前にコンビニに行ったのは、これを買っためだ。

それで近くの棚に歯ブラシがあったから、ついでに買ったというわけだ。

俺は箱を開けて、考える。

何枚いるか……

ちなみにこの箱は十枚入りだ。

何枚必要になるか、まだ分からない。

俺的には何回でも大丈夫な気はするけど、さすがに十回もしないだろうし……

二、三回ぐらいか？ いや、でももしかしたら四回かも……

考えても分からないから、俺はとりあえず五枚を、枕の下に入れておいた。

あとは、ティッシュとゴミ箱を、さりげなくベッドに近づけておく。

よし！　こんなもんかな。

俺は、床の準備が整ったことに、一人頷いて満足する。

あ、歯磨いてない。

コンビニの袋の中にあった歯ブラシを見て、今更になって思い出す。

まだナツは出てこないだろうから大丈夫か。

そう思って、俺は歯ブラシを持って洗面所へ行った。

そーっと洗面所を覗いてみると、まだナツが出てないことが分かった。

チャポンという音が聞こえて風呂の方を見ると、シルエットでナツが浴槽に浸かっているのが分かる。

なんか、逆に残念だな。

漫画みたいなお風呂でばったりとかあればいいのに……

とか、そんな淡い期待をしていた俺は、ちよつとがっかりする。いいけどさ、別に。

俺はいつもより念入りに歯を磨いて、いつもより念入りにうがいをした。

洗面所に置いてあるコップに、ナツのピンクの歯ブラシが入れている。

俺はそこに俺の歯ブラシを入れた。

うん。ピンクと青。ナツと俺。いい感じた。

何度も角度を変えて見て、頷いた。

その時、カチャッと音がして熱気が漂ってきた。

ふと見ると、風呂場の扉が開いて、白い湯気が流れてくる。

そこから、濡れ髪、濡れ全裸のナツが出てきた。

バチツと一瞬で目が合った。

「……っ！ きゃああー！」

ナツは顔をひきつらせて、悲鳴を上げ、勢いよく中に引っ込んだ。

「うおっ！？」

俺はその悲鳴に驚いた。

「何でそこに居るの！？」

風呂の中からナツの声が聞こえた。

「何でって……歯あ磨いてて……あ！ 別に覗こうとしてたわけじゃないよ！？」

俺はあらかじめ弁解しておく。

そりゃあわよくばとは思ってたけど、確信犯じゃない。そんな誤解されるのはごめんだ。

「……みつ見た!？」

「へ？」

「あ……あたしの……」

ナツの声が恥ずかしそうに小さくなる。

ああ。裸か。

「大丈夫だよ。一瞬だったし、見てないから」

俺はそう言っておく。

嘘だけど。

本当は、一瞬だったけど、上から下まで全部見た。
ナツは油断してたのか、隠してなかったし。

「じ……じゃあ早く出てって！ あたし、服着るんだから！」

俺的には別に目の前で着てもらっていいんだけど。

そもそもすでに一回見てるんだし。それにあとでまた見るんだし。

「はいはい。んじゃ、出るからなー」

俺は思ってることは裏腹に、頷きながら、洗面所を出た。

お約束バンザイ！

部屋に戻ってから、俺は一人でガッツポーズをした。

やっぱり生のナツはいいよなあ。

さっき見たナツの体を、思い浮かべた。
特に、おっぱい。

ベッドに寝ころんで、天井に向かって手を伸ばした。
そこにはないナツのおっぱいを、掴んでみる。

すっげー柔らかかったよなあ……

あの日、触った感触を思い出して、手を動かしてみる。やっぱりそこには何もないけど。

女の人っていいよなあ……あんなにいいモノついてて。

つつか、ナツのおっぱいは絶品だしな。

マジでナツが俺の彼女で良かった。

これからは好きに触っていいわけだし……

あ。……てことは、あのおっぱいは俺のものってことか！

うわっ！ マジで？ マジでいいの？ これからは俺だけがナツのおっぱいにいろんなことしていいの！？

（妄想中）

うわー……最っ高！

テンションの上がった俺の頭の中には、ある歌が浮かんだ。
俺は気分がよくて、口からでるままに歌った。

「ナツのオッパイいいオッパイ・すごいぞ〜すごいぞ〜」

某童謡のリズムにのせて、そのタイトルは『ナツのおっぱい』

「巨だ〜いマシユマロでできている・でかいぞ〜でかいぞ〜」

「できてないから」

「うお!？」

突然聞こえてきた合いの手(?)に俺は驚いて跳ね起きた。

いつの間にか、ナツがパジャマ姿でそこに立っていた。
ちよっと引いた感じの目で俺のことを見ている。

「あ……あはっ。聞いてた？」

俺は笑ってごまかそうとする。

「もう……なんて歌を歌ってたのよ」

ナツは呆れたように言って、タオルで髪を拭きながら座布団の上に座った。

「ナツのおっぱいが最高ってことを歌った歌」

「そうじゃなくて。……もう。何言ってるのよ」

ナツは顔を赤くした。

そして、ドライヤーで髪を乾かし始める。

「めっちゃくちゃ誉めてんのに……」

「え？ 何？」

ドライヤーの音で聞こえてなかったみたいで、ナツは聞き返してくる。

「ナツはめっちゃくちゃいい女だって誉めたの！」

俺が言つと、ナツは一瞬キョトンとしてすぐにさっきよりも真っ赤になった。

「なっ……何で匂はそんな恥ずかしいこと言っの！」

「本当のことなんだから、恥ずかしくなんてないよ。あ、ナツ。もしかして照れてる？」

「照れてない！」

そう言つて、ナツは俺に背中を向けた。

ムキになって……やっぱり照れてる。

そんなナツの背中を俺は横になってじーっと見ていた。

ドライヤーの音が止み、ナツはコンセントを抜いて片付け始めた。

「ナツ、終わった？」

俺は待ってましたと言わんばかりに起き上がった。

「うん」

ナツは髪をブラシでとかしながら頷いた。

「おいで！」

俺は両手を広げてナツを待った。

下心が丸出しかったのは自分でも分かったけど、隠すような余裕なんてなかった。

「……あたし、犬とか猫じゃないのよ」

口を尖らせながらもナツは俺のそばに寄ってくる。

「犬とか猫より可愛いよ。ナツは」

俺はナツを抱き締めた。

ナツはすっぽりと俺の腕の中に収まった。

「もう……また変なこと言う」

ナツが俺を見上げる。

その瞬間に、俺はナツの唇にキスをした。

「ナツ……」

俺はナツをベッドに倒して、その上に重なった。

「いい……？」

この期に及んで、聞いてしまった。

情けないけど、慎重にいきたかったんだ。

ナツのこと、大事にしたいから……

「……うん……」

ナツは、視線を下にして、頬をピンク色にして、小さく頷いた。

「ナツ……」

俺はもう一度ナツの名前を呼んで、キスをした。

この名前だけは、何度でも呼びたい。ナツとだけは何度でもキスをして、抱き締めあって、繋がりたい。

心からそう思った。

そっと、ナツのパジャマの上からおっぱいを触った。

やっぱり、柔らかい……布越しでも、それは十分に分かった。

でも……あれ……？

驚きで手が止まった。

「旬……？」

ナツが、不思議そうに俺を見上げてくる。

「……ナツ。もしかして、ノーブラ？」

パジャマ越しの感触は、予想以上に柔らかかった。
そこに、あると思ってたものがなかったんだ。

「あ……その、お風呂場に持って行くの忘れちゃってて……ていうか、いつもは寝るとき着けてないから……」

ナツはしどろもどろになりながら必死に言い訳しようとしている。

「え……じゃあパンツも？」

「パンツは穿いてます！ 何でそうなるのよ！」

ナツは真っ赤になりながら言った。

そついやそうだ。さっきパンツ出してるの見たんだつた。

「ま、いいじゃん。脱いだら一緒なんだし」

俺はナツのボタンに手をかけた。

「あ、待つて。電気……」

「消した方がいいの？」

「だって……恥ずかしいから……」

顔が赤いのを隠すためなのか、ナツは両手で顔を覆っている。

かわいーい！

「んなの気にしなくても大丈夫だよ。一回全部見たんだから」

そう言ったけど、俺はナツのために、ベッドからおりて電気を消した。

オレンジ色の電灯だけで、部屋がぼんやりと薄暗くなる。

「あ……あの時のことは忘れて！ あたしも覚えてないんだから……」

ベッドの上のナツが体を起こしてそう言った。よくは見えないけど、どんな顔をしてるのかは大体分かる。

「無ー理。忘れらんないよ」

俺はベッドに戻り、ナツを抱き締めて、そのまま倒れた。

「だからナツ……今日は忘れんなよ」

そう言って、俺はナツの首筋にキスをした。

「ん……うん」

一度肩を震わせてから、ナツは頷いた。

俺は、ナツの首筋に顔を埋めながら、パジャマのボタンを外していく。

弾けるように、大きなおっぱいが生で姿を現した。

暗いけど、白くてきれいなのははつきりと分かる。

手で触って、掴むようにして揉んだ。小さく、ナツの声が聞こえる。

「ナツ……」

俺はスウェットの上を脱ぎ捨てて、ナツの上に重なり、キスをし

た。

舌を絡めて、お互いに口の中をまさぐって……

自然と、ナツの腕が俺の首に回って、俺達は更に密着した。

ナツの柔らかい肌が、俺の体に擦れて気持ちいい。その中でナツの乳首だけが固くなって、俺の胸を転がってくすぐりたい。

俺はゆっくり唇を離しナツの胸に顔を埋めて、そこにたくさんキスをした。

「あ……旬……」

ナツが甘い声で、俺の名前を呟いた。

もう意識がぶっ飛びそうになった。

そんな風に俺の名前を呼んでくれるってことは、俺は、ナツの特
別になれたってことなのかな？

俺は、ナツの下半身に手を伸ばした。

パジャマのズボンに指をかけ、ずらしていく。ピンクのパンツが
見えて、思わず生唾を飲み込んだ。

そして、パンツの上から、ナツに触ろうとした。

「あつ……ダメッ」

ナツは腰を引いて、小さく抵抗した。

それに構わず、俺は指をナツに当てた。

「あっ」

ナツが高く、声を上げた。

ナツのそこは、触れただけで分かるくらい、濡れていた。

俺に感じてくれてる……

それが、嬉しい。

俺は、ナツからパンツを抜き取って、そこに顔を埋めた。

「やつ……匂っ！」

ナツが体を半分起こした。

「匂……ダメっ……そこは、いいから……」

ナツはまた腰を引いて逃げようとする。

でも、俺はそれを追いかけた。

「俺がしたいんだ。俺が、ナツをもつと気持ちよくさせたい」
そう言って、俺はそこに唇をつけた。

「あ……」

ナツの起こした体が、ギシツと音をたててベッドに沈んだ。

ナツのためと言いながら、本当は俺のためだった。

俺が、知って覚えたかったんだ。

ナツの色も形も、その温度も感触も、匂いや味も……

ナツの全てを俺の体に刻み込んでおきたくて、俺は、ナツの真ん中に口づけて舌を絡め、指を埋めた。

「……っ！」

甘くて細い声がして、ナツの腰が浮いた。
それと同時に、指を埋めた場所が収縮した。

ナツが、果てたみたいだ。

「ナツ……」

俺は指を引き抜き、ゆっくりと体を起こして、ナツの顔を見た。

ナツは、目をつぶり、眉間に皺を寄せ、肩で息をしている。
うつすらと汗をかいて、おでこに髪がはりついていた。

「ナツ……」

そのナツの姿がきれいで、俺は吸い寄せられるようにナツの唇にキスをした。

「ん……」

ナツの腕が俺の背中に回った。

舌の絡まる音だけが部屋に響いた。

それだけで、俺の気持ちは高ぶっていく。

「ナツ……いい？」

唇を離してそう聞くと、ナツは小さく頷いた。

俺は、枕の下に手を突っ込んで、コンドームを一つ取り出した。

ナツが、いつの間に、という顔をしたから、

「準備いいだろ？」

と言うと、ナツは『もうっ』と言って、笑った。

俺はナツのこの顔が好きだ。

俺も自然と笑顔になれる。

「ナツ……大好き。超好き……」

心からそう言っ、俺は、ゆっくりとナツの中に埋まった。

ナツの中は、凄く熱くて、でもその熱さは、気持ちよかった。

その感触を噛み締めて、俺は大事に大事に、ナツを抱き締めた。

最後まで終わった後、ナツは俺の腕の中で小さく肩を震わせて、

息をしていた。

「ナツ、大丈夫？ しんどかった？」

髪を撫でながら、俺はナツに聞いた。

ナツは、小さく首を横に振る。

「ううん……大丈夫」

「……じゃあ、気持ちよかった？」

そう聞くと、ナツの肩の動きが止まった。

「……何でそんな恥ずかしいこと言つたのよ」

ナツは俺の胸に顔を押し付けて小さな声で言った。

「……何でそんな可愛いことするのよ。」

「だって……俺、ナツに気持ちよくなって欲しいから……前の彼氏みたいな風には思ってたほしくないし」

そう言つてナツの背中に手を回そうとしたら、ナツは俺の胸から顔を離して、寝返りをつつて俺に背中を向けた。

「え……ナツ？」

「……………」

もしかして……怒ってる？

ナツの雰囲気は、そんな感じだった。

「……何で、今そんなこと言うの？」

「え？」

俺は体を起こして、ナツの顔を覗き込もうとした。

「すごく、いい気分だったのに、思い出しちゃったじゃない」
俺からは顔を背けるようにして、ナツは言った。

「あ……」

俺、言っちゃいけないこと言っちゃったんだ……

いや、普通に考えて、言っちゃダメなことじゃん。元彼のことなんて……

さっきも話題に出して、すっごい空気変わったってのに……つい
元彼のことを意識しすぎちゃって……

「ナツ……ごめんな」

俺はナツを後ろからぎゅっと抱きしめた。

「俺、バカだから、変なことばっか言っただけ……」
これじゃあ、ナツに最低発言した元彼と、大差ない。

本当に、最悪だ。

「でも、ナツ。俺、バカだけど……バカだけどさ……絶対、ナツの

こと大事にする。ナツのこと振ったりとか、そんなバカなことだけはしないから……」

俺がナツのことを振るなんて、有り得ない。
それこそバカだ。

「……もういいよ」
ナツの手がそつと俺の腕を触った。

「ちょっとだけ、嫌だっただけ……もう大丈夫だから」
そう言って、ナツはまた寝返りをつって俺の方に向いてくれた。

「ナツ……」

俺は、今後はちゃんと正面からナツを抱き締めた。
腕の中に収まるナツの小ささと、柔らかさと、匂いに、俺は幸せを感じた。

今までナツと付き合って別れた男達は皆バカだ。
ナツはこんなにもいい女で、こんなにも幸せにしてくれる存在なんだから。

ふと目を覚ますと体が重い。まぶたも重くて目が開かない。

あ、そうだ。あの後、二回したんだっけ。

昨夜の感覚を思い出して、俺は思わずにやけてしまう。
そして、俺は隣にいるはずのナツを手探りで探し、そばにあった
柔らかいものを抱き寄せた。

それをぎゅっと抱き締めて、違和感に気づいた。

あれ……？

ナツにしては、手応えがない……
それに足の方の感触もない。

不思議に思っただけで細く目を開けると、俺が抱き締めていたのは、枕
だった。

「あれ……？」

体を起こして見てみると、ベッドの上にはナツがいなかった。

何？　もしかして、今までの全部夢？　夢オチなの？

寝ぼけてそんなことを思いながら俺は部屋を見回す。
間違いなくナツの部屋だ。絶対あれは夢じゃない。

「ナツー？　……ナツう」

俺はどこにナツがいるのか、呼んでみた。

台所の方で音がする。

「匂？」

やっぱり、台所の方からナツが顔を出した。

「匂、起きたの？」

ナツがこっちの方にやってくる。

「まだ寝てるー」

俺はもう一度布団に潜って言った。

「起きてるんじゃない」

ナツが近寄ってくるのが足音と気配で分かった。

「匂ー。そろそろちゃんと起きてー」

ナツが俺を揺さぶってる。

何かこれって新婚みたいでいいかも。

「もー……匂ってば……きや！？」

俺はナツの腕を掴んで、布団の中に引っ張り込んだ。

捕獲完了。

「ちょっと、匂……」

驚いた様子のナツの唇に、俺は自分の唇を押し当てた。

ナツの動きがピタリと止まる。

「……おはよ、ナツ。起きるの早いね」

唇を離して、顔だけ布団から出しながら俺は言った。

「……おはよ。早いって言っても、もう十時過ぎよ。そろそろ起きないと」

ちよつと顔を赤らめてナツは言った。

「いいじゃん。休みなんだし、ちよつとぐらいゆっくりしても。それよりさ、ナツ」

「何？」

「昨日のこと、覚えてる？　また忘れてない？」

ナツは目を丸くしている。そして更に顔を赤くした。

「おつ……覚えてるに決まってるじゃない！　もうっ、匂ってば本当に変なことばっかり言い過ぎ！」

「へへっ……ごめんごめん。でも、よかった」

ナツがちゃんと覚えててくれて。って言うと、ナツは怒るかな？

俺は、ぎゅうつとナツを抱き締めた。

すると、ふわりと甘い匂いがした。

「何かナツ、すっぱーいい匂いする」

俺はナツの胸に顔を埋めて、鼻から息を吸った。

勿論ナツは元々いい匂いだけど、そのナツの匂いに混じって、あまーいバニラのような匂いが分かる。

「あ……朝ご飯にフレンチトースト焼こうと思って、準備してたの。」

その匂いかな……？」

「へー……フレンチトーストか。楽しみ」

って言っても、今の俺はこの状態にいるだけでお腹いっぱいになれそうだ。

「だったら……匂。今から焼くから、ちゃんと起きて着替えてね」

ナツはそつと俺の腕を解いて体を起こした。

俺はそんなナツを見上げて、思わず息を呑んだ。
ナツが、昨日までよりすごくきれいになってた。

「匂？ 分かった？」

ナツがそつと俺の顔を触った。

「う……うん。分かった」

俺はただ頷いた。

ナツは、優しく微笑んで、台所に戻っていった。

何！？ 今日のナツ！？

いや、ナツはいつも可愛くてきれいでセクシーだけど！

でも今日のナツは、いつもの三割増で可愛くて、いつもの六割増できれいで、いつもの九割増でセクシーだった。（当社比）

何だろう……昨夜のナツを見たから？ 俺にそう見えるだけ？

でもそれでもいいや。

俺だけが、ナツのすつばいところ見えるんだから。

ナツは、フレンチトーストと、ココアを用意してくれた。ココアは、わざわざ昨日買っておいでくれたらしい。

「いただきまーす」

俺はフォークを手に取って、フレンチトーストを口に運んだ。

「んまい！」

甘い味が口に広がって、幸せな気分も大きくなる。

「匂って、本当何でも美味しそうに食べるわよね」

「だって、本当に美味いもん」

でも、今日は格別かもしれない。

昨日の最後にナツを見て、今日の朝一番にナツを見て、それで一緒にていうかバンだけどご飯食べて……

幸せだ。たったこれだけで、すごく幸せだ。

「ナーツちゃん」

「……何？ いきなり」

こっちを向いたナツの頬に、俺は軽くキスをした。

「へへっ」

ナツはきょとんとしている。その顔が可愛かった。

「なっ何すんの、いきなり!？」

すぐに真っ赤になって、ナツは頬を押さえる。

「ナツが可愛かったから」

俺は笑いながら答える。

「意味分かんないつ。もう! ご飯中にやめてよね! しかも砂糖でベタベタじゃない」

そう言いながら、ナツはふきんで頬を拭いた。

ちよつと必要以上に拭いてるけど、多分恥ずかしがってるだけだ。

……そうだな? ……そういうことにしちゃおう。

でも本当にいいな、こういうの。

ナツと結婚して、一緒に暮らし始めたら毎日こんな感じにできるのかな……

いや、こんな感じどころか、毎日あんなことやそんなこと……こんなことまでできちゃうか?

……それって、かなり最高かも!

でも今すぐ結婚ってわけにもいかないし……せめて一緒に暮らしたいけど、それだって無理だろうし……

「……あ、そうか」

色々考えて、俺はいいことを思い付いた。

「何？ どうしたの？」

ナツは首を傾げて俺のことを見ている。

そんなナツを見つめ返して笑うと、ナツは更に不思議そうな顔になっていた。

13 一人暮らし

「こっちはどうですか？」

「んー……あ、風呂とトイレが一緒になってるからダメです」

「じゃあこっちは……」

「……築四十年って古くないですか？ それに、××町から少し遠いし」

「では……」

「予算オーバーなんで無理です」

「……お客さん。本気で部屋探してるんですか？ そんなこと言ってたらいつまでたって決まりませんよ」

不動産のおじさんはため息をついて言った。

今日、俺は不動産に来ていた。

それは、もちろん、物件を探すためだ。

俺は、一人暮らしを始めることにしたのだ。

何でいきなりそう決めたのかというと、それは、ナツと一緒にいる時間が増やしたいから。

今まで通り、実家で親と住んでるより、俺が一人で暮らした方がいちいち気を使うこともないし、ナツとの時間は増えるんじゃないか。そう思った俺は、即決で、微妙な顔した両親を納得させた。

で、今こうして物件を探してるわけなんだけど……なかなかいいところがない。

「だいたい、お客さんの言う条件だったら厳しすぎてなかなかありませんって。少しぐらい妥協しないと」

「そうっすかねえ」

俺が求めた条件は、家賃八万以内で××町の近くで彼女を呼んでも恥ずかしくない部屋、だ。

家賃があんまり高いと生活が厳しくなる。××町はナツのコーポのある場所だ。せつかくだからその近くに住みたい。それでナツを呼ぶんだから、狭いとかボロいとかは却下だ。

でも、やっぱり世の中そう甘くない。条件通りにはいかないみたいだ。

「……じゃあ、家賃上げます。八万五千円」

場所と部屋の状態は譲れない。そうになると、妥協できるのは、家賃だけだ。

「五千円ぐらいじゃそう変わりませんよ」

おじさんはファイルを捲りながら言った。

「じゃあ……九万で」

これ以上は無理だ。正直、九万でもかなり厳しい。貯めてたバイト代があるにはあるけど、これから色々使っだらうし、生活が苦しくなりそうだ。

でも、ナツのために頑張る！

「あ、これはどうですか？」

おじさんがファイルをめくる手を止めて俺にそこを見せた。

「部屋自体はそんなに広くないですけど、一人暮らしなら十分なくらいだし、五年前に出来たから新しいし、場所もお客さんの希望通りだし」

「マジですか？」

おじさんの言葉に俺は食いついた。

見せてくれた物件は、ナツのコーポから十五分ぐらいで着けそうな場所にあるマンションだった。

写真を見ると、写りによるのかもしれないけど、それでも十分綺麗だ。

間取りも、ちゃんと風呂とトイレは別になってるし、別に不具合はない。

いや強いて言えばナツの部屋より狭そうだけど……そこはしょうがない。妥協する。

「ここでお願いします！」

と、いうわけで、俺はなんとか一人暮らしのための第一歩を踏み出すことができたのだった。

そしてその一週間後。

マンションへの引っ越し日。

「おお！ すっげー。思ったよりキレイじゃん」

部屋の中に入って、俺は思わず一人でそう言った。

でも、本当に築五年目ということもあってか、壁は真っ白だし床はピカピカだし新しい匂いがする。

もしかしたら、この部屋は俺が一番最初に使うのかもしれない。

やっぱり家賃ギリギリまで上げてよかったかも。

……で、そんなことを考えてる場合じゃなくて。早く荷物運ばねえと。

引越し業者に頼むと、金がかかる。ってわけで、俺は自分で荷物を運ぶことにしたのだ。

まさかこんなとこで家賃のしわ寄せがくるとは……

しかも、自分が引越したいって言ったんだから、作業は全部自分でしろって言って、親すら手伝ってくれない。

いいけどさ、別に。その通りだし。

とりあえず、家の車だけは貸してくれたから、荷物はマンションの下まで運んできた。

今後はそれをこの部屋まで運んでこないとイケない。

さっさとやって終わらせよう。俺は荷物の運搬作業に取りかかった。

数時間後……

「疲れたー……すっげー腹減ったし」

昼過ぎに引越し作業を始めて、時間を見るともう六時過ぎだった。

いくらエスカレーターがついているとはいえ、この部屋は四階だ。やっぱり一人で荷物を運ぶのは時間がかかるし体力もいる。

それにしても、何も食べるもんじゃないし、コンビニ行かねえと。

あ、でもベッド組み立てねえと寝れないし……

一人じゃ思った以上にやる事が多くて苦戦した。

とりあえず俺は、今日はベッドを組み立て、コンビニで食料を調達してそれを食べて、風呂に入ってすぐに寝た。

ピンポーン……

聞き覚えのないインターホンが聞こえる。

あ、そういえば俺、引越したんだっけ。ここのインターホンってこんな音だったのか。

ピンポーン……

また鳴った。誰だ、こんな時間に。

俺は枕元に置いてあった携帯で時間を見してみる。

十時ちよつと過ぎ……なんだ、もうこんな時間か。

そう思いながらまた目を閉じた。

ナツの声が聞こえる。

「土曜日引っ越しなの？」

そうだ……ナツと電話で引っ越しのこと話した時だ。

「ごめんね。土曜日は用事で実家に帰らないといけなから……でも日曜日は大丈夫だから、日曜に行くね」

そう言ってた。だから今日来てくれるんだよな。

「じゃあ、十時頃に行くから」

うん。分かったー……って……十時！？

俺はバチツと目を開けた。

やっべ！俺としたことがうつかりしてた！

昨夜までは覚えてたはずなのに、アラームのセット忘れてた！

俺は飛び起きて玄関に向かった。

「いつて！」

向かう途中でその辺に置いてあったダンボール箱に足の小指をぶつけた。

ピンポーン……

もう一度インターホンが鳴る。

「……ちょっと待って。今出る！ 今出るから……」

痛さで涙目になって、足を引きずりながら必死に玄関に向かった。

「はい……！」

俺は必死になりながら玄関のドアを開けた。

そこには案の定、ナツがいた。

「あ、旬。やっと出てきた。まだ寝てたの？」

寝起きにナツはかなりの効果だ。今日も相変わらず輝いてます！

「旬……？」

「あ、うん！ ごめん！ ちょっと寝坊してさ……本当ごめんな」
現実に戻った俺はとにかくナツに謝った。

「ううん。いいよ。旬、昨日引越しだったから疲れてるんじゃない？ ……あ、お蕎麦買って来たの。お昼に食べよ」

ナツはそう言ってスーパールの袋を持ち上げて、笑いかけてくる。

その顔、反則ですから！

「それにしても、ここってうちから本当に近いのね。歩いて二十分もかからなかったし……それに新しいから綺麗だし。旬、いいところ見つけたね」

ここがナツに好評なのがすごく嬉しかった。

やっぱり、家賃妥協した甲斐があった。

「あ、とりあえず上がったよ」

いつまでもこんなところで立ち話をしてるのもなんだ。俺は早速ナツを部屋の中に促した。

「じゃあ、お邪魔しま……」

中に入ったナツは固まった。まるで電池切れのおもちゃのように止まってしまった。

「ナツ？」

俺はナツに声をかけた。そして、部屋の中を見た。

「あ……」

俺の部屋は、ナツの部屋と違って、玄関から廊下はなくてすぐに部屋の中が見えるようになってる。

それを俺は今初めて見て、部屋の状態に気づいた。

部屋の中は、俺が思った以上に……というか、引越してきて二日目だとは思えないほど散らかっていた。

さっきぶつかったダンボールが倒れまくってるし、昨夜食べたコンビニ弁当の容器はそのままだし、タオルとかスウェットとか探していくつか箱を開けて中身を全部出したものが散らかってるし……とにかく、彼女を部屋に招くという状態ではなかった。

「あ……いやその……昨日あんまり片付ける暇とかなくてさっ……」

ちょっと引き気味なナツに俺は必死に言い訳した。

正直、今までの俺の部屋の状態に比べればマシだとは思うけど、初めてでこれはないよな……

せめて弁当のゴミはちゃんと片付けておくんだった。

「まあ、しょうがないよね。引越して大変だし。片付けるの手伝うね」

ナツはそう言って靴を脱いで部屋に上がった。

荷物を台所に置いて、ナツは散らかっている方にやってくる。

「旬。服とかはどこに収納するの？」

その辺に落ちてた服を拾い集めながらナツは俺に聞いてくる。

「ああ、クローゼットあるし、今まで使ってきたケース持ってきたからそれでいけるかなーって思って」

「そう。じゃあ、とりあえず服から片付けていった方がいいかな」
ナツは話しながらテキパキと俺の服を畳んでいった。

「旬、服はどこに入れたの？」

「えー……どこ入れたっけ。適当に入れたから覚えてねえかも」
俺は近くにあったダンボール箱を開けてみる。

「適当って……ちゃんとしないとダメじゃない」

「それ、よく言われるんだけどさー……苦手なんだよなあ。あ、これだ」

ちょうど開けたやつに服が入ってた。

「ちょっと……旬。どんな入れ方したのよ」
箱を覗いたナツが眉をひそめた。

「どんなつて、適当」
俺はやったまんまを答える。

「適当にもほどがあるでしょ？　もう……ぐちゃぐちゃじゃない」
ナツは呆れた口調で言った。

うん。確かにこれはやりすぎたかも。
俺の服は、部屋に散らばってて畳んで置いてあるものはほとんどなかった。だからそのまま入るだけ放り込んで持ってきた。

その結果、ダンボールの中身はひどいことに……

「あー……やっぱり絡まってる……」

ナツが服を出そうとしたら、ごっそりと箱の中身全体が出てきた。

「おお。すげー。釣れてる釣れてる」

「もう……そんな呑気に言える状態じゃないでしょ」
ナツは絡まった服をほどき出していく。

……バサッ……

と音がして、何かが落ちた。

「もう……何で雑誌が服と一緒に入って……」
落ちたそれを見て、ナツは固まった。

「あ……」

俺も固まった。

箱から出てきたのは、確かに雑誌だった。

でも、それは、ただの雑誌じゃなくて、青少年のバイブル（しかも無修正もの）だった。

落ちた拍子に開いたページでは、巨乳のお姉さんがマッパで隠すべきところをさらけ出していた。

「ち……違う！ ナツ！ これ俺のじゃなくて……友達のもの！ 俺、エロ本は買う派じゃなくて借りる派だから……」

俺はすぐにそれを回収し、後ろに隠した。

言い訳のつもりがあんまり言い訳になってなかった。

「……別にいいよ。どっちでも」

ナツは冷たい視線で俺を見ている。

「ナツ、誤解だって！ 俺にはナツしかないから！ ナツと付き合ってからエロ本もＡＶも一回も見てないし！」

「だからそんなの言わなくていいってば」

「ナツー！ 信じてくれよお」

何だかもう冷え切った感じのナツに、俺は抱きついて必死に訴えた。

「俺、マジでこんなに浮気しないから！ 妄想と手だけで十分だ

から！ つつか、これ借りたの大分前だし」

「だから気にしないからいいってば！ 何そこまで言ってるのよ！」
ナツは真っ赤になって俺の腕の中でじたばたしてる。

「て……旬。大分前に借りたのにそれが何であるの」
ナツはピタリと止まって真剣な顔で俺に言った。

「返したつもりだったんだけど、今発掘されたんだよ。俺だって久しぶりに見た」

「……旬。人に借りたものをそんないい加減にしてたらだめじゃない」

呆れたような口調でナツは言った。

「うん。今度ちゃんと返しとく」

でも誰に借りたんだっけ？

そう思いながら俺は頷いた。

ナツはその後エロ本のことには一切触れずに、テキパキと体を動かして、引越しの片付けを手伝ってくれた。

……正確に言うと、ナツがほとんどやってくれて、余計なことはつかした俺は怒られてばかりだった。

でも、昼には大体片付いて、二人でナツが持ってきてくれた蕎麦を食べた。

「なあ、ナツ」

食べ終わってちょっと休憩して、俺はナツにすり寄った。

「なに？ 匂」

ナツはテーブルの上を片付けながら返事をした。

「よく考えたらさー、今日は大事なことでないよな？」

「大事なこと？」

「一回もチューしてない」

首を傾げたナツに、俺は答えた。

「え……」

ナツはきょとんとしている。

俺はそんなナツを抱きしめて、頬にキスをした。

「ちょ……匂っ！ 何考えて……」

ナツは顔を赤くして俺がキスした場所を手で押さえた。

「いいじゃん。二人きりなんだし」

そう言っただけ俺はナツの顔に俺の顔を近づけた。

「もう……匂ってば」

そう言いながらも、ナツはそっと目を閉じた。

好きだなあ。ナツのこういうところ。

そう思いながら、俺はナツに唇を合わせた。

ナツの柔らかい唇が気持ちいい。

俺は堪らなくなつて、そのままナツの唇を割って舌を入れた。
抵抗はされなかった。

だから、片腕でそのまま強く抱き締めて、もう片方は俺とナツの
体の隙間に滑り込ませ、おっぱいを触った。

「ん……！ 待って……」

ナツが横を向いて、唇が離れた。

「何。この手」

ナツは真剣な顔で、おっぱいを触ってる俺の手首を掴んだ。

「何してんの。これは」

「え……スキンシップ？」

「もう……何考えてんの」

ナツは俺の手を引き剥がそうとした。
でも、俺はその前に手に力を込めた。

「あ……」

ナツの口から小さく声が漏れた。

それに俺は火を点けられた。

「ナツ……したい」

ナツの耳元でそう言った。

せっかく二人きりなんだから、思いっきりナツを感じたい。

この雰囲気だったら、このまま……

「だっ……ダメ！」

……このままって思ったのに、ナツはそう言って俺を突き放して後ずさりした。

「何で？」

俺はナツを追いかける。

ナツはさらに後ずさった。

「だって……まだ片付け終わってないし……」

ナツは後ろを向いて、まだ片付いてないダンボール箱が三つ重ねて置いてあるのを見る。

「そんなのすぐ終わるからいいじゃん」

「ダメよ。先にやっちゃわないと……」

「先にやっちゃわないと？」

俺は笑った。勿論、やらしい意味を込めて。

「違う！ もうっ……旬……きゃっ！？」

一瞬隙ができたのを見逃さず、俺はナツに抱きついた。

「ナツ」

そのまま俺はナツを押し倒した。

「ちよっ……旬……イタッ！」

倒れた瞬間にガッツと音がした。

ナツが後ろにあったダンボールの一番下の箱の角に頭をぶつけてしまった。

「うわっ……ナツごめん！ 大丈夫！？」

俺は慌てて体を起こしてナツを見下ろした。

「痛ぁ……もう！ しゅ……」

顔をしかめていたナツの目がぱちりと見開かれた。

「危な……！」

「え……」

ゴスッ……

って感じで頭に衝撃がきた。何が起きたんだ……

「ちよっ……旬！ 変に動かないでよ！」

俺の下でナツが慌てている。

あ、なるほど。ナツがぶつかった拍子に上の二つの箱が倒れてきたのか……

多分それを今、俺の頭で支えてるんだろうな。

「ごめん。今直すから……」

俺は首に力を入れ、頭と手を使って押し返した。

「もう！ 旬が変なことするから」

俺の下でナツが怒ってる。

こんな状況でなんだけど……怒ってもナツは可愛いなあ。

バサリ……

俺が箱から頭を離れた瞬間、何かが落ちた。
しかも、ナツの顔の上に……

「あ……」

俺はそれを見て固まってしまった。

ナツの顔の上に、今日見つけられたエロ本が開いた状態で落ちていた。あ、そうだ……その辺にほったらかしてナツに怒られたから、とりあえずこの箱の上に置いてたんだった。

「ナ……ナツ……ごめ……」

流石にこの状況がかなりヤバイのは俺でも分かる。俺が謝ろうとしたら、ナツはゆっくりと体を起こした。

それと同時にナツの顔から本も落ちた。

開かれたそのページは、さっきの巨乳のお姉さんが裸の男と激しく絡み合っているシーンだった。

「しゅーんー……！」

ナツがキツと俺のことを睨んだ。

睨んでても可愛いけど……とか、思ってる場合じゃない。

その後、俺は三十分以上謝り続けて、とりあえず許してもらえた。

ナツと一緒にいる時間を増やしたくて一人暮らしを始めたはずなのに、初っぱなからこんな雰囲気になるなんて、災難な一日だった。

14 彼氏として

ナツと付き合いはじめて約五ヶ月。

ナツとは順調に付き合ってる。……と思う。

なんで断定できないのか。

それは、最近少し不安だからだ。

ナツが、俺のことを少しでも好きだと思ってってくれているのか……
俺のことを彼氏だと思ってってくれているのか……

「旬。早く行かないと映画始まっちゃう」

「あ、うん」

今日は、ナツとデートだ。

ナツが映画の前売りを持っていたから、一緒に行かないかと誘われたのだ。

それは何でもいいんだけど……

今こうやって並んで歩いているのに、俺とナツは微妙に離れてる。

手を、繋いでないからだ。

今まで何度もナツとはデートしたり、隣を歩いたりしてる。なのに、手を繋いだことは一度もない。

それっておかしいか？

デートは勿論、今までお互いの家に泊まったりして、セックスだってしてる。

やっぱりおかしいだろ。

それで手え繋いだことないなんて。

俺は隣にいるナツを見た。

……繋ごうにも繋げないし。

ナツはいつも俺と歩くとき、俺側の手で鞆を持つ。

俺がナツの右を歩こうが左を歩こうが、悉くそつだ。

これはナツが俺を拒否してると思ったってしょうがないじゃないか。

「よかった。いい場所取れて」

「そつだなあ」

館内に入って、真ん中の見やすいところを取れた。
勿論、並んで座る。

映画が始まり、観客は静かになった。

この映画は、洋画のラブコメディーだ。有名なキャストが勢揃いで、話題にもなってる。

コメディー的な要素が多いから、たまに笑いが起きる。俺も笑ったし、ナツも笑ってた。

クライマックスでは、主役二人の甘いシーンがスクリーンいっぱいに映った。

俺の隣で……ナツが座ってる方と反対側で、ひそひそとした声が聞こえた。

横目で見てみると、俺の隣もカップルだった。

その二人は、手を繋いで、映画そっちのけでベタベタしてる。

ラブコメディーということもあってか、館内には、カップルが目立って何組かいた。

まあ、映画館のカップルってこんなもんだよな。

そう思いながらふと別のところへ目をやると、俺の三列ほど前にもカップルがいて、その二人は、何とキスをしていた。

スクリーン上では、主演二人が激しくキスを交わしていて、それに誘発されたのか、そのカップルも激しかった。

……ていうか、後ろの方ならともかく、そんな前の方だったら丸見えじゃん。なのにあんなに堂々と……

すっげーうらやましいんですけど……

公の場であんな堂々と、カップルしかないことをできることは、すごくうらやましかった。

俺はナツの方を見た。

ナツは、カップルの方には気付くこともなく、映画のスクリーンをじっと見ていた。

俺達も……キスまではしなくても（いや、俺はしたいけど）手を繋ぐぐらいなら……

俺はナツの手を見る。

ナツの手は、膝の上の鞆の上に置いてある。

俺は生唾を飲み込んだ。

さりげなく握れば大丈夫……だよな。

でも、かなり緊張する。心臓がものすごい早さで動いてるのが分かる。

落ち着け俺の心臓！ さりげなくだ！

俺はナツに分からないように深呼吸をした。

……よし！

そして、俺はナツの手を握ろうと、手を伸ばした。

あと五センチ……三センチ……

あとちよっと……って時だった。

「旬」

うおっ！？

ナツの顔がいきなり俺の方を向いた。

俺はものすごい勢いで手を引っ込めて、スクリーンの方に向き直った。

「何？ どうしたの？」

「いやっ……別に何も……ナツこそどうしたの？」

鎮まれ俺の心臓！ 泳ぐな俺の目！

「どうしたのって……映画終わったから……」

「あ……」

ふと気づいたら、いつの間にか、映画は終わって、客がぞろぞろと帰っていくところだった。

「そっか……じゃ、出よっかつ」

俺は慌てまくって、急いで立ち上がった。

「うん」

ナツは不思議そうに首を傾げていたけれど、別に気にしてはいなかったみたいだった。

「面白かったね、映画」

映画館を出た後、ナツは笑顔でそう言った。

「うん。面白かった」

俺もそうやって頷きながらも、最後の方はあまり覚えてなかった。

ていうか、俺のバカヤロ……

何で手え引つ込めたんだよ!? 何でそんなうろたえてんだよ!? ナツがこっち向いたからって、そのまま手えぐらい繋げばよかったのに!

「お腹減ったね。お昼どうする?」

ナツのその声で俺は我に返った。

「あ、うん。どっか店入ろっか」

その時、ふとナツの手を見た。並んで歩いて、俺側にある手を……

いつもは、必ずといっていいほど鞆を持っている。

でも今は、何もなかった。

これはチャンスか！？　なかなか手を繋げない俺の為に与えられたチャンスなのか！？

だとしたら、繋ぐしかない！

さっきみたいに無駄に躊躇うな！　一気に行け！

俺は自分に気合いを入れて、手を伸ばした。

「あ」

ナツのその声と同時に、俺の目標としていた手が消えて、俺は空振りしてしまった。

「あのパスタ屋、すごく安くて美味しいの」

ナツは、道の向こうに見える店を指差していた。

そう。俺が掴もうとしていた、その手で。

「お昼、あそこにしよう」

「うん……」

神様。これはイジメですか。

俺はもう泣きたい気持ちだった。

パスタ屋に入って、メニューを見ると、本当に安い。一番高いのでも九百円しないほどのものだった。

「旬、どれにする？」

「んー……どれにしよう。ナツは決めた？」

「あたしはたらこクリームにする」

たらこクリーム……六百八十円か。

無意識にメニューで値段をチェックしてしまう。

「じゃあ俺、ツナマヨ」

これは六百五十円で、ナツが頼んだのと同じぐらいだ。

合計千三百三十円。

これなら俺でも払える。丁度昨日給料入ったところだし。

ナツと手を繋げないということ以外に、ナツが俺のことを彼氏として扱ってくれてるのか不安な要素がある。

それは、こうやってナツと食事とかする時に、必ずと言うほどナツが俺の分まで払ってしまうことだ。

ナツは、いつも俺が出すって言ってんのに、さっさと払ってしま
う。

そうじゃなくても、割り勘だ。

確かに、俺はフリーターだからあんまり金がない。しかも、ナツより年下だし……

でも、そんなことで彼女に払わせるなんて、彼氏として格好がつかない。

ていうかナツに年下扱いしてほしくない。

だから今日は意地でも俺が払う！

「……旬？」

「へ？ 何？」

ナツの声で俺は我に返った。

「一人暮らしは大丈夫なのって聞いたの。どうしたの？ 今日、何かいつもよりも変よ？」

ナツは首を傾げている。

「え……そんなことないよ。俺はいつも通り……って、ナツ。今さりげなくいつもよりもって言った？」

「うん。だって普段も変だから」

あっさりと頷かれた。

「あー。ひっでーの。俺のどこが変なんだよー」

「んー……何か色々」

色々って……流石に傷つくよ、俺だってさ……

「お待たせしました。たらこクリームとツナマヨネーズになります」
店員が皿を二つ持って俺達のテーブルへやってきた。

パスタは食べてみると、本当に安いのに美味しかった。俺はナツに言われたことなんてもう気にしてなかった。

「それで、どう？ 一人暮らし。旬、また部屋散らかしてない？」

ナツに言われて、俺はギクツとした。

「……うん。まあ、いつも通り」

「いつも通りってことはいつも通りなのね」
ナツは呆れた顔で言った。

「いや、俺は散らかしてるつもりはないんだけどさ……何か知らないうちになるっていうか……」

これは本当にそうだ。散らかそうとしてるわけじゃない。でも不思議なことに、部屋はどんどん汚れていく。

「旬はね、習慣がないのよ。ゴミはゴミ箱、出したものは入ったところにしまってる」

「あ、そうか」

だから俺の部屋は、いつも散らかるのか。なるほど。目からウロコだ。

「そうかって……納得してる場合じゃないでしょ？」

そうやって何だかんだと話して、三十分ほど経った時……

「そろそろ出ようか」

ナツが時間を見てそう言った。

「ああ、うん」

俺は頷いて椅子から立ち上がった。

あ、そうだ。伝票……

思い出してそれを取ろうとした。でも、テーブルの上にはもうすでになかった。

「あ……」

ナツがいつの間にか伝票を持ってレジへと向かっていた。

行動早いよ、ナツ。

俺は急いでナツを追いかけた。

「千三百三十円になります」

店員がそう言って、ナツは鞆から財布を出そうとする。

「俺が払う」

ギリギリで言うと、ナツは俺を振り返った。

「いいよ、これくらいだし」

しかしナツはそう言って、財布を出そうとする。

いつもそうだ。俺が出すって言うてもさっさと出してしまう。

でも、今日はそうはさせない！

「これくらいだから俺が全部払う」

俺はナツの手を押さえた。

「いってば。匂、お金ないんでしょ？」

それでもナツはそう言って、俺の手を押しつけようとする。

「今日はあるよ。一昨日給料日だったから」
俺は言い返して、手をどかさなかった。

「でも家賃とか払ったりしたらすぐなくなるって言ってたじゃない。
気持ちはずい嬉しいから。だから手、離して」

「やだ」

そう言えば、前にそんな話をした。

家賃のこととか、余計なこと言っくんじゃなかった。

だからナツは俺がいつも金がないとか思ってるんだ。

「……分かった。じゃあ旬の分だけ払って？ あたしも自分の分払
うから」

ナツはため息を吐いて言った。

でも、割り勘なんて意味がない。

「やだ。ナツの分も払う」

俺が彼氏として、彼女のナツの分も一緒に払わないと、意味がないんだ。

「……だから旬の分だけでいいってば」
ナツは全く頷いてくれない。

「俺が払う」

「だからいいってば」

「あ、いいって言った」

「そっちのいいじゃない！ もうっ旬！」

終いにはナツにキツと睨まれた。

「……………ぷっ」

俺らの目の前で吹き出す声が聞こえた。
店員の女の人だった。

「あ、すっすいません！」

店員の女の人が謝って下を向いた。

多分……………ていうか、絶対、俺らのことに笑ったんだ。

ふと気づくと、他の客からも注目を浴びていた。

ナツを見たら、ナツも耳まで真っ赤にしていた。

ナツはそのまま俺の手を振り払って財布を出し、金額丁度を置いてさっさと店から出て行ってしまった。

「ナツ……………！」

俺もナツを追って店を出た。

「もうっ！ 旬のせいですごく恥ずかしかった！」
歩きながら、ナツは何度も同じことを言っていた。

ナツの機嫌を悪くしてしまった。
こんなつもりじゃなかったのに……

俺はナツに何も言えなかった。

「……旬。そんなに払いたかったの？」

ナツは、呆れたような口調で俺に言った。

本当に情けない。

ナツを困らせて、ナツに呆れられて……

俺って、ナツにとって、何なんだろう……

「ナツ。俺ってナツの彼氏だよな？」

たまらず俺はそう言っていた。

「何言ってるの？ そうじゃないの？」

ナツは更に呆れた口調になっていた。

「だって……何か違うじゃん。メシとか、いつつもナツが当たり前のように払うし」

俺が言つと、ナツは目を丸くしていた。

「確かに、俺、金ないけどさ。さっきみたいに俺が出すって言つても、断つて、ナツが払っちゃうし。……それに、デートの時、手も繋いでくれないし。今も俺側の手で鞆持ってるし」

「えっ……」

「ナツって、そういうの嫌いな?」

本当に格好悪い。

男のくせにこんなこと気にして、彼女の前でグチグチ言っ……

これじゃあナツに呆れられてもしょうがないかもしれない。

「えっ……あ、別にそういうわけじゃ……今までそういう習慣なかったから……」

今度のナツは呆れてる様子じゃなかった。

少し戸惑った様子で、下を向いている。

「……嫌ってわけじゃない?」

俺はナツの顔を覗こうとしてみる。

よくは見えなかったけど、ナツの顔は赤いようだった。

「うん」

ナツは小さく頷く。

「じゃ、繋ご?」

そう手を出すと少し照れくさかった。

改めてこう言って手を繋ごうとするのは、初めてだったかもしれない。

少し間を置いて、ナツが、そっと手を出して、ぎこちなく俺の手

を触って握った。

「へへっ」

思わず俺は笑ってしまった。

ナツの手の感触を確かめるように握り返して、指を絡めた。

ほんの少し照れくさくて、でもそれ以上に嬉しかった。

ナツを見て見ると、ナツも少し照れくさそうにはにかんでいた。

手を繋いだけで、ナツがすぐ近くにいるように感じた。今まで見ていたナツと違う角度でナツを見れるように感じた。

そしてそのナツは、いつも以上に愛しかった。

15 一年

ナツと付き合い始めて、早一年。

色々あったりなかったりしたけど、ナツとは超絶好調だ。

「ありがとうございますー！」

今日の俺はテンションが高い。

店を出て行く客にかける声も、自然と明るくなる。

「沖田。今日はテンション高いな」

大川先輩が俺に言う。

大川先輩は、カフェのバイト先の先輩だ。

俺は今日、この大川先輩とシフトを組まれた。

「あ、分かりますー？」

顔の筋肉が緩みっぱなしで、今の俺の表情は、鏡を見なくても分かる。

「ああ……その理由も大体な」

「聞きたいですか？」

「いや、大体分かるって」

「聞きたくないんですか？」

「どうせ彼女絡みだろ」

「あ、分かります？」

「……お前キモい。つつかマジうぜえ」

大川先輩は引きぎみの表情で俺に言った。

でも、キモいとかウザいとか、いくら言われても今日は気にもならなかった。

「だって今日は久々に彼女が俺の家に泊まるんですよ。これじゃテンション上げるなって方が無理じゃないですかあ」

「分かったからその話し方やめろ！　つつか、あっちのテーブルの皿下げてこい！」

「はい」

俺は喜んでと言わんばかりに言われた通りの仕事をした。

最近、ナツと俺の都合が合わなくて、全然会えてなかった。

電話かメールは毎日してるけど、それだけだ。

先週末は、ナツが用事があって会えなかった。先々週末は、俺がバイトをぎっちり入れられて、会えなかった。

それに加えて、セックスはもう三週間近くしてない。

三週間前、ナツの家に泊まったけど、その時はナツが生理になつててできなかった。

だから、もう俺はナツ切れでヤバイ。

バイトが終わる時間さえも、もどかしくてしょうがなかった。

「お疲れでしたー！」

バイトが終わると、俺は速攻で家に向かう。

今日は日曜日。

だから、ナツは俺のバイトが終わって家に帰るぐらいの時間に来る。

いつもは、次の日が休みじゃないと泊まりはダメっていうナツだけど、今日は久々だからいいって言うてくれた。

あまりに嬉しすぎて、自然と足が速くなる。

「あ」

家の近くに来た時、見覚えのある後ろ姿を見つけた。

あの髪、あの歩き方、自然と出てるフェロモン……

十数メートル前を歩いていただけ、俺にはあれが間違いなくナツだということが分かった。

俺は走ってナツのすぐ後ろまでついた。

それでもナツは気付かない。

何だか面白くなって、そのままナツに抱きついた。

「ナツッ！」

「きゃあ!？」

ビクッとナツの体が震えた。

「しゅっ旬!？」

「うん！ ナツッ会いたかった」

後ろから抱きしめたまま、ナツに頬ずりする。

久々のナツの匂いだ。

香水とかはつけてないらしいのに、ナツからする甘くていい匂い

……

「ちよっ……ちよつと、匂っ……ここ外だからっ!」

ナツが俺の腕の中でパタパタと暴れる。

それが小動物みたいで可愛い。

「もうっ……驚かせないでよね!」

ナツが俺の腕を抜け出て怒る。

「へへっ」

ナツに怒られてても、自然に笑ってしまう。

ナツの全ては俺を骨抜きにしまうんだ。

「もう……」

ナツは、呆れた風に言って、笑った。

本当に、ナツは見てるだけでも飽きないなあ。

「あ、それ持つよ。晩飯の材料?」

ナツの手には、スーパーの袋があった。

俺はそれをナツの手から取った。

「あ、ありがとう」

「いいよっ。今日は何?」

俺は、袋の中身を見ている。

ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎ……

「今日はカレーにしようと思って」

あ、そうか。カレーの材料だ。

「やった！俺、ナツのカレー好きなんだ」

「そう。よかった」

ナツの笑顔に、俺はメロメロだった。

「じゃ、行こ！」

マンションまであと二、三分の距離だったけど、俺達は手を繋いで帰った。

こうやって、ナツと歩く時に手を繋ぐのは当たり前になっていた。たったそれだけのことで、俺は幸せだった。

「もっつ……やっぱり。何よ、これ」

部屋に上がると同時に、ナツが言った。

「ん……自然現象かなあ」

「どこが自然なのよ！ 匂しくないでしょ！」

部屋に来てすぐにナツに怒られる。

でも、嫌ではない。

いや別にMなわけではないけど。（むしろSだし）

だって、怒ってるナツも可愛いから。怒ってるところが可愛いなんて、そういないぞ。

「もう旬！ もうちょっとちゃんとしてよね！」

そうやって言いながらも、ナツはいつも片付けをしてくれる。

ナツは可愛い俺の若奥さん。

「しゅーんー！ 見てないでちょっとは手伝って！」

俺もちょっと手伝って（ていうか俺の部屋だけど）掃除をした。

その後ナツがカレーを作ってくれてそれを二人で食べた。

そして、風呂に入ってから、久々にナツとセックスした。

久々のナツの中は、すごく、気持ちよかった。

腕の中のナツを抱きしめると、ナツの体が、俺の体に隙間なくく

つつく。

この瞬間、俺は生きててよかったと、心から思う。

「ナツ……好きだよ」

俺は、この言葉を、ナツに何回でも言える。
何回言っても言い足りないくらいだ。

「うん……」

俺が言つと、ナツはいつも頷いて、俺のことをぎゅっと抱きしめてくれる。

そう言えば、俺はナツに好きって言ってもらったことあったっけ……？

ふとそう思って、思い出してみる。

……ないような気がする。

俺は、いつつもメールとか電話でも言っ。

それに対してナツは、今みたいに頷いたり、『何言ってんの』って言ったり、はつきり返してくることはない気がする。メールでさえそうだ。

ナツは、そういうの恥ずかしがって言わないだけだろうけど、聞いてみたいなあ……

ナツのことを見てみると、ナツはいつの間にか、俺の腕の中で小さく寝息をたてていた。

……可愛い。

こうして無防備に俺のそばで寝られるってことは、ナツの俺に対する気持ちなんて、聞くまでもないよな。

ナツはこうやって俺の腕の中にいるのに、これ以上、贅沢なこといったらダメだな。

俺は、ナツのことを改めて抱きしめて眠った。

翌朝、目が覚めるともうすでにナツはいなかった。

時間を見てみると、もう九時を過ぎてる。

テーブルの上に、メモが置いてあった。

「よく寝てるみたいだから、先に出ます。朝ご飯作っておいたから食べてね。旬もバイトに遅れないようにね。……なつみ」

ナツのきれいな字で、そう書かれている。

行っちゃったかぁ……

起こしてもよかったのに……

メモを見ながら俺は少し凹んだ。

ナツは朝起きるのがいつも俺より早い。だから泊まりの翌朝はいつも俺より早く起きて、ご飯を作ってくれている。
本当の奥さんみたいに……

それは十分嬉しいけど、朝一番にナツの顔見たいっていう気持ちもあるわけで……泊まりなら尚更……

なんか本当に贅沢になってるな、俺……

ナツにそんなにたくさんしたこと、求めてるつもりはないのになあ
……

今日のバイトは昼からだけど、俺はもう起きることにした。

ベッドから降りて、服を出そうと収納ケースをあさる。

「……ん？」

ケースの奥に赤い何かを見つけた。
明らかに服ではないだろうという、光沢がある。

俺はそれを引っ張り出してみた。

「あれ？」

出てきたのは、赤いジャケットの、洋楽のCDだった。
しかも、俺のじゃない。

これは確か……田中の……

田中は、同じ高校の奴で、高三の時に同じクラスだった。このCもその時に借りた。

俺、返してなかったのか……？ 引越しの時にも出てこなかったのに……何で今更？

まあそれはいいや。

見つかったから返した方がいいか。

俺は、携帯を開いて、田中にメールを送った。

約十分後、田中からメールが返ってきた。

『ないと思ったらやっぱりお前か。
早く返せよな』

そんな内容だった。

『じゃあ今から俺んち来る？』

俺は、そうやってメールを返した。

約三十分後。

ピンポン……

インターホンが鳴り俺は玄関へ向かった。

玄関を開けると、田中がそこに立っている。

「おー久しぶりー。一年ぶりだなあ」

「久しぶりーじゃねえよ。ったく、お前いい加減なのはかわんねえな。つうか普通借りた方が返しに来るだろ。何で俺がわざわざ来ないといけないんだよ」

久々なのに、いきなり文句を言われた。

「まあそつ言いながらも田中なら来ると思ったからさ」

「当たり前だろ。これ以上返ってくるのが先延ばしになってたまるか」

「ハハッ。まあ上がれよ」

「えっ……」

田中はあからさまに嫌そうな顔をする。

「何だよ？」

「……俺さあ、匂が一人暮らししてるって聞いてかなり驚いたんだけどさ、お前のことだから絶対汚いんだろうと思いつながら来たんだよ」

なかなか失礼なこと言うな、田中め。当たってるけど。

「別に散らかってないって。ほら」

「えー……あ」

部屋の中を覗いた田中が固まった。

「何だよ。散らかってねえじゃん。つうか、綺麗じゃん」

田中は、目を丸くして失礼なぐらいに驚いているようだ。

「だから言っただろー」

「何、お前こまめに掃除とかしてんのか？」

そう言いながら田中は部屋に上がった。

「いや、俺の彼女がしてくれた」

「彼女？ お前、彼女できたのか？」

さっきほどじゃないけど、田中はまた驚いていた。

「おう！ もう一年になるんだ」

「一年って……ミキと別れたのもそれぐらい前じゃなかったか？」

「まあ……ぶっちゃけミキと別れてすぐ後だったからな」

「へーえ。それで、誰？ 同じバイトのコとか？」

「いいや、OLさん」

「は！？ OL！？ 年いくつだよ？」

「今二十三で、今年で二十四」

「てことは四つ上か……そんな年上のOLとどこでどう知り合ったんだよ？」

「えー……？」

田中に言われて、俺は思い出す。

初めてナツに会った日の、俺がナツを好きになった、そのきっかけの出来事を……

「んなの勿体なくて言えるかよ」

誰よりも、綺麗で可愛かったナツのことは、いくらダチでも言えるわけがない。

あの時のナツは、俺だけのものだから。勿論、今もナツは俺だけのものだけだ。

「お前……キモいぐらいにデレデレしやがって……どうせまた巨乳なんだろう？」

呆れたように田中は言う。

「そうそう！ 俺の推定で、上から90・59・86のEカップなんだけどな、おっぱいすげーの！ あのおっぱいはマジですごいて！ 神様の芸術品……いや、つつかあれ自体が神様……おっぱいの神様そのものだって！」

「お前なあ……そんなにおっぱいおっぱい連呼するなよ」
田中はため息まじりに言った。

頭の中にナツのそれを浮かべると、思わず興奮してしまった。
でも、ナツのおっぱいの素晴らしさは、こんなもんじゃない。語
ろうと思えばまだまだ語れる。

「まあ、お前らしいっちゃあお前らしいけどなあ。どうせまたそこ
だけ見て選んだんだろ」

「何だよ、失礼な。俺は今も昔もそこだけで彼女選んだりしねえよ」
人聞きの悪いことを言う田中に対し、俺は口を尖らせた。

「つつか、最高なのはおっぱいだけじゃないんだって！ 顔だって
かなり美人で可愛いし、料理できるし掃除できるし、何でも出来る
あんなにいい彼女は他にいないって！」

「ふーん。お前がそこまで絶賛するのも珍しいな。……写メとかね
えの？」

「あー撮ろうとしたら嫌がるからないんだよなー」

俺的には、ナツの写メを待ち受けとか着信とか発信とか、全部の
設定画面にしたいくらいなのに、ナツは物凄い勢いで嫌がる。

代わりに俺の写メを撮っていいって言ったら、いらないって言わ
れた。

さすがにそれはちょっとショックだった。

「ふーん……つつかさ、OLって忙しくねえの？ しゅっちゅう会
えるもんか？」

「んー……まあ都合が合わなかったら会えなかったりするけど……
でも家近いから会おうと思えばすぐ会えるし」

「へーえ。そんなもんなのか」

「おうつ。ま、それよりも俺と彼女はいつも心で繋がってるからさ」

「うわつ。何だよそのデレデレ具合。なんかもう、いっそも力つくわ」

田中には、ちょっと冷めた目で見られた。

「へへっ」

それでも、ナツのことを思うと、俺の顔は緩みっぱなしになっていた。

ナツと付き合って一年。

やっと一年とも思うし、もう一年とも思うし、まだ一年とも思う。

一年というのは、長いようで、実はとても短い。

そんなことにも気づかず、俺は、このたった一年で、ナツとは本当にも心でしっかりと繋がっていると、何も言わなくてもナツのことは何でも分かると、勝手にそう思っていた。

16 ハプニング

二日後……

「はあ……」

今日も俺はカフェでバイト。

今日の俺は、切ない。ため息ばかり出る。

「おい、沖田。今日何回目だよ。そのウザい態度やめろ」

休憩中、大川先輩に言われた。今日も大川さんと同じシフトだ。

「すみません……でも、今日はちょっと……」

「何だ？ また彼女絡みか？ あ、とうとう彼女と別れたか」

「違いますよ！ しかも何でちょっと嬉しそうなんすか！」

失礼な大川先輩に俺は思わず大きな声を出してしまった。

「おい。客もいるんだから静かにしろよ。……ったく。お前が彼女と別れたらもうウザいぐらいのノロケ話聞く必要もなくなるからな」

「なんだ。ひがみですか」

「おっ前……」

先輩のこめかみが引きつった。

「彼女いるやつのそういう台詞が一番ムカつくんだよ……！」

最小限の声で言いながら、先輩は俺の頬を思いっきりつねった。

「いててててっ！ すんません！ すんません！」

あまりの痛さに俺は必死に謝った。

ちなみに、大川先輩は、ここ暫く彼女と長く続いてないらしい。
そして、今はフリーだ。

「何か言ったか？」

「言ってますんで！」

心の声まで聞こえたのか……恐ろしい。

「で、何があつてそんなため息ついてんだよ」

ようやく俺の頬を離れた先輩が言った。

「いや……その、彼女に会いたくて……」

俺はまたため息をついた。

「……は！？ お前何言ってるの？ つい一昨日デレデレしながら
彼女が家に泊まりに来るとかどうとか言ってたばかりだろ？」

先輩は目を丸くして言った。

「そうですけどお……」

「何だよ。結局彼女来なかったのか？」

「来ましたよ。それはちゃんと来ました。いつものようにちゃんとラブラブでした」

「……いちいちウザいこと言うな、鬱陶しい。……それで何でそうなってるんだよ」

「何でって……特に理由はありませんけど……」

本当にどうしたのか……

一昨日会ったはずなのに、なぜか俺はもうナツ切れ状態だ。

その前なんか二週間も会えてなかったはずなのに、今回はたった二日だ。

なんか燃費が悪いみたいだ。

「そんなにしょっちゅう会いたいもんか？」

意外なことを先輩は言った。

「当たり前っすよ！ ホントなら毎日でも一緒に居たいぐらいなんですから！」

「ふーん。俺はそういうの無理だけどな。相手にもよるけど、絶対しんどくなるし」

「俺は会えない方が無理です……」

「……俺がもし女だったら絶対お前とは合わないな。今も合ってると思わねえけど」

「俺もそう思います。……はあ……」
俺は再びため息をついてしまった。

本当に今日は気分が乗らない。

「……んため息ばかりつくんだったら彼女に会えばいいじゃないかよ」

先輩の方が呆れたため息をついて言った。

「……いいんすかね？」

「お前の彼女のことなんて俺が知るかよ。自分できけ」

そりゃそうだ。

ナツにはメールで連絡がつく。会えるかどうかなんて、それで聞けばすぐに分かる。

するだけでもしてみようかな……もしダメならダメで諦めよう。

そう思いながら、俺はナツにメールを送った。

『今日会いたい。会えない？』

今の時間帯なら、ナツは昼の休憩時間のはず。ちょっとしたら返事が返ってくるだろう。

……と、十分弱ぐらいでナツの着うたが鳴った。

メールを開いてみると、

『ちょっとだけなら……会っただけね?』

そう書かれていた。

「先輩！ 会えます！ 会えますって！」

俺は感激で思わず先輩に報告した。

「ああそうかい。よかったな。俺には全っ然関係ないけどな」
先輩はめんどくさそうにそう言う。

ナツに会えると思っただけで、俺のテンションは急上昇した。
これだけ俺のテンションを変えることができるのは、ナツしかない。

ナツはいつも俺が会いたいと言うと、都合が合う限り会ってくれる。
で、大体お泊りコースになる。

ナツは平日にお泊りは嫌らしい。

まあ、確かに次の日に仕事だとしんどいのだろうけど……

でも、俺は我慢できない。だって我慢できないお年頃なんだもの。
特にナツに対してだと、理性がきかなくなる。

そんな俺を、ナツはいつも受け入れてくれる。

ナツは、俺の期待を裏切らない。そこもナツの魅力的なところだ。

今日は四時でバイトが上がりで、俺はすぐに家に向かった。

ナツが帰ってくるまでまだまだ時間がある。

小腹がすいた俺は、途中でコンビニに寄った。
軽く食べるものを買おうと思ったけど、俺の目についたのはビールだった。

目に入ると、無性に飲みたくなった。

今日はテンション高いから、飲んじゃえ！

そう思って、俺は缶ビール一本と、つまみを買って家に帰った。

そして、約一時間後……

「ちょっと……何よこれえ！？」

部屋にやってきたナツの第一声はそれだ。

いつもと同じ、ナツの声……

「あ、ナツ」

ほろ酔いで部屋に寝転がっていた俺は、ナツに向かって持っているビールの缶を手の代わりに振った。

「ちょっと匂！ 何でこんなに散らかってるのよ？ 一昨日片付けたばっかでしょ！？」

ナツは怒った声で言いながら、ゴミ袋片手に俺の部屋のゴミを片づけていく。

二日前にも同じこと言われた。それは、俺の部屋が二日前と同じ状態だからだろう。

俺は別に散らかしてるつもりはない。本当にそうだ。
なのに、部屋は自然と散らかっていく。不思議なもんだ。

「もーっ！ なんでゴミはゴミ箱に入れないのよ！ いつも言うてるでしょ！」

そう言いながらナツは次々と片づけていく。

そんなナツを俺は下から見上げていた。

「全くもっつ……よくこんな所に寝てられるわね！」

見上げていると、ナツのスカートがヒラリとゆれて、チラチラと太股が見える。

もう少しでパンツが見えるのに、ここからだとなかなか見えない。

俺は、ナツに気付かれないようにナツの後ろに近付いていった。

あとちょっと……見えた！

「あ、今日のナツ、パンツ黒」

しかもレースで超セクシーだ。

「やだっ……ちょっと、もうっ！ 旬！」

ナツは慌てた様子でスカートを押さえて俺から離れた。

「ナツってばやらしー。あ、そのパンツって俺のため？」
ちよっとからかうつもりで俺は笑って言った。

「知らない！」

ナツは俺に背中を向けた。

耳まで真っ赤になってるのが俺には分かった。

本当にもう。可愛いんだから。

「ナツちゃん」

たまらず俺は後ろからナツに抱きついた。

「きゃっ……！？ 何、旬！」

ナツが驚いて反応する。

「しょ？」

俺はナツの耳元で言った。

何を、なんて、言わなくなっただけでナツには分かるはずだ。

「えっ……」

分かってるからこそ、ナツはこんな反応を見せる。

「き……今日は会うだけでしょっ！ 明日、会社だってあるんだし……」

予想通りのことをナツは言う。

でも、ナツは俺の期待を裏切らないはずだ。

「匂っ……放して。今、掃除してるんだから」

ナツは俺の腕を解こうとするけど、そうはさせない。

「ナツのパンツ見たら発情しちゃった」

俺は腕にそつと力を入れてぴったりとナツにくっついた。

「一回だけ……」

俺は、ナツの首筋にキスをして、ナツのおっぱいを掴んだ。

「ダメだってば……あっ」

『ダメ』と言いながら、ナツはいつもの、俺しか聞けない声を出した。

「ナツ……」

ナツにキスをして、俺はそのままいつものようにナツに埋もれていった。

気付いたらもう朝だった。

「……あれ。ナツ、もう起きたの？」

目を覚ましてみると、ナツはもうすでに服を着て、化粧をしていた。

「だってもう七時よ。旬も起きなくていいの？」

ナツは鏡に顔を近付けながら言った。

七時か……

「ん……今日バイト昼からだし、まだいい。だるいし」

俺はまだ少し眠くて枕に顔を埋めた。

「……そう」

まだ寝る時間あるのに、早くに目が覚めてしまうと、なんだか損した気分になる。

あ、でも今朝は早く起きないとナツに会えないところだったからよかった。

「あれ……ナツ、掃除したの？」

部屋を見てみると、昨日ナツが途中で掃除をやめた（俺がやめさせたんだけど）はずなのに、なぜかきれいになっていた。

「うん」

ナツは頷いた。

「あ、朝ごはん作ったから、食べたかったら食べて」
続けてナツがそう言った。

一体ナツはいつ起きてるんだろう。

いつも俺が早いつもりで起きても、絶対にナツの方が早いし、
今日なんて掃除と朝ごはんを作る時間があつたなんて。

「ちゃんとラップはゴミ箱に捨てるのよ？分かった？」

「うん」

ナツに言われたことに、俺は頷いた。

ナツは、鏡の方をじっと見て、口紅を塗っている。
俺はそれをじっと見た。

「何？ 旬」

ナツがチラッとこつちを見た。

「ん……女の人が口紅塗るところって色っぱいなあって思って、
でもナツのは他の人の三倍キレイ」

俺は思った感想を言った。

「もう……何言ってるの」

ナツはそう言って軽く笑った。

女の人が口紅を塗る仕草は、その人の女らしさが強調されると思う。特にナツの仕草なんて、女の人セクシーさを凝縮したような感じだから、ものすごくいい。

それに、唇に意識が集中するせいなのか、すごくそこがセクシーに思えて、すぐくキスをしたくなる。

勿論、ナツとならいつでもどこでもしたいのは当たり前だけど。

「あ。ナツ、今日、チューしてないよ」

俺はちよつと思ひ出して、ナツに言った。

俺としたことが、肝心なことを忘れるところだった。

「チューしよっ」

俺はベッドから下りてナツのそばに寄った。

「もう……リップ塗ってから言わないで」

「一回だけ一回だけ」

そう言つて、俺はナツの唇にキスをした。

ゆっくりゆっくり時間をかけて、ナツを味わっていく。ナツはもう歯磨きをすませていたらしく、ミントの歯磨き粉の味がした。

「もう……リップ塗り直さなきゃ」

唇を離すと、ナツはクールに言つて鏡の方を向いた。

「ナツ」

俺はほんの悪ふざけのつもりで後ろからナツに抱きついた。

「きゃっ!」

ナツは予想通りの可愛い反応をした。

「旬！ 離してっ。リップ塗れないでしょ！ ……やだ、ちょっとどこ触ってんの！？」

太股と腰に触っただけで、ナツは敏感に体を震わせる。

「ダメ！ あたし今から仕事なんだから…」

「触るだけっ」

俺はナツのおっぱいを掴んだ。

「やだっ……あっ」

「ナツのエッチっ。感度いいんだからなあ」
そこがナツの最高なところだけど。

「もうっ！ ふざけないで！」
真っ赤になったナツが、腕を振り上げた。その手には、口紅があった。

そしてナツが腕を上げた拍子に、それがナツの手から落ちていく。そのあとのことは、いくらバカな俺でも予想できた。

「あ……！」

ナツの口紅は、落ちた衝撃で二つに折れてしまった。

その瞬間、さっと頭の血が引くのが分かった。

「ナツごめん！ 本っ当ごめん！」

俺は謝ろうと意識する前に謝っていた。

とんでもないことをしてしまった。まさかここまでするつもりなかったのに……

「もういいよ」

ナツは静かにそう言った。

そして黙ってティッシュで折れた口紅を拾って床を拭いている。

いつものナツと違う。

いつもなら、こういう時もっと怒るのに……

もしかして、本気で怒らせた……？

「ごめん……」

どうしていいか分からなくて、俺は下を向いて謝るしかできなかった。

「別に怒ってないから……もういいよ？ 私も注意してなかったし」
さっきよりは優しいナツの声が聞こえて、俺はナツの両手に顔を挟まれて顔を上げた。

ティッシュで、軽く唇を擦られる。その後のティッシュがピンク色になっていて、俺の唇にナツの口紅がついていたようだ。

「じゃあ、行ってくるね」

コッソンとおでこ同士が当たって、ナツが言った。

「うん……行ってらっしゃい」

俺はただそう言って、ナツを見送るだけだった。

17 多分大丈夫

「はぁ……」

ナツが出て行って玄関のドアが閉まったあと、俺はため息をついた。

ナツは怒ってないって言ったけど……あれって怒ってるかもだよな？ つうか、呆れられたかも……

いや、いつもナツは俺に対して呆れた風な態度見せるけど……でもいつものはもつと『しょうがないなあ』って雰囲気だし……今回は流石にそれではすまないことしちゃったし……

「はぁ……」

下を向いてまたため息をつく、俺の裸の下半身も同じようにしよぼくれていた。

シャワー浴びて服着よう……

今の格好が情けなくなつて、俺は立ち上がって風呂場に行った。

シャワーを浴びたあと、ナツが作ってくれた朝ごはんを食べようと台所に行った。

ナツは、サンドイッチをラップに包んで置いていてくれた。

ああ、だから『ラップはちゃんと捨てるのよ』か。
今更になってナツが言っていたことの意味が分かった。

ラップを開けて、サンドイッチを一つ取って食べた。
中身は俺が好きなハムとチーズだった。

ナツは、いつも俺が好きなものを用意していつてくれる。しかも、それは全部おいしい。
どんなものでも、ナツが作ってくれたものなら、他のものと比べものにならないくらいおいしくなる。

それはもちろん、今日のサンドイッチも同じだった。

おいしかったけど、俺の口から出るのは、ため息だけだった。

「はぁ……」

ナツ、どうしたら許してくれるんだろう……

「おはよー。 沖田君」

今日は十二時からカフェの方でのバイトだ。ちょっと早めにきて
控え室にいと、声をかけられた。

「あ……なるちゃん。おはよ」

声をかけてきたのは、今日同じシフトのなるちゃん（本名・鳴海美奈子ちゃん。俺と同年）だった。

なるちゃんは、小さくて、可愛くて、バイト仲間の中で人気がある。でも、俺は知っている。一見Dカップのそのおっぱいは、パットできているということを……

俺には服の上からでもそれが本物か偽物か（それが寄せて上げてできたものか）がわかる。これはちよつとした特技だ。

「どうしたの？ 元氣なくない？」

なるちゃんが俺の正面の椅子に座り、首を傾げて聞いてくる。

「……うん。ちよつと……」

あ、なるちゃんに相談してみようかな。なるちゃんなら真剣に考えてくれそう。（大川先輩と違って）

「なあ、なるちゃん。ちよつと相談んだけど……」

俺はなるちゃんに今朝あったことを簡単に話した。

「……そっかあ……それで元氣ないんだ。沖田君、彼女さんのこと大好きだもんね」

なるちゃんは頷きながら聞いてくれた。（やっぱり大川先輩と違って）

「それで、どうしたら許してくれると思う？ なるちゃんなら、ど

うされたら許そうと思う?」

なるちゃんには彼氏がいる。だからそう聞いたら参考になるかと思っ
てきいた。

「……うーん。あたしなら……謝られたんなら別にもついいけどな
あ」

腕を組みながらなるちゃんは言った。

「まあ、物に因るけど、口紅ぐらいなら……よっぽど大事にしてた
とか、高価なものじゃないなら別にいいかなあ。それに、謝られて
るのに怒るのって結構気が引けるし……」

「……そういうもんなの?」

でも、ナツは結構怒る。いや、可愛い怒り方だけど……。

あ、でも、ナツが怒るのって、俺がふざけた時だよな。俺は遊ん
でるつもりだからちゃんと謝ったりはしないし……

それになんかで謝った時はだいたい『いいよ』って言うってくれる
し……

引越しの時にバカやったのも、かなり謝って許してくれたんだよ
な。

なんだ。特に難しく考える必要ないのか?

「それにさ、沖田君の彼女さんもあんまり些細なことで喧嘩とかし
たくないと思うよ? あたしだってそうだもん」

なるちゃんが、俺の背中を押してくれるようなことを言ってくれ
た。

「ここはとりあえず、いつも通りにしてて大丈夫だと思うよ。逆に沖田君が変に意識してたら、彼女さんは嫌なんじゃないかな？」

「……そっか」

俺は時計を見た。

今ならナツは休憩中のはず。

「俺、彼女にメールしてみる」

ポケットから携帯を取り出して、俺は操作する。

「うん。頑張れ」

なるちゃんが笑顔で応援してくれた。

『ナツ』

今昼休み？俺は今からバイト

朝はホントごめんな？

サンドイッチめちゃくちゃウマかったよ！さすがナツだな　ありがとな！』

いつも通りのノリで、それでも一応朝のことはもう一度謝っておく。

それで俺はナツにメールを送信した。

すると、五分後ぐらいにナツからの返信があった。

『どういたしまして』

朝のことは本当にもう怒ってないよ
バイト頑張ってるね。ちゃんとしてくるんだよ?」

ナツからのメールも、可愛い絵文字が使ってたって、いつもと同じだった。

思わず、にやけてしまった。

「彼女さんから?」

「うん!」

なるちゃんに返事をしながら、俺はナツに返信した。

『うん! ナツ最高! ! 愛してる』

ハートマークの絵文字をたくさん使った。

それでも、今の俺の気持ちは、この画面だけにはおさまらないくらいだ。

でも、これならなるちゃんの言うとおり、大丈夫そうだ。

やっぱりナツは優しいな。やっぱり、俺に比べると……

「どうしたの? 急に無表情になったけど……」
なるちゃんがいつて、俺は自分の表情に気付いた。

思ったことが表情に出てしまったようだ。

「いや……俺の彼女、俺より年上だからさ……当たり前だけど、考え方とか俺より大人で……だからこういう時も、彼女がすんなり許してくれるから、喧嘩にならずにすんでるっていうか……」

これは、ずっと不安に思ってきたことだ。

「俺、ただでさえ年下だからさ、彼氏として恰好つかないのなんてしょっちゅうだし、今回みたいに彼女がいつて言ってくれなかったら収まりがつかないし……彼女のために結局何もしてないし、できないから……情けないよな」

俺は自分で言ってるため息をいつてしまった。

本当に、情けない……

俺がナツのためにできることって、なんなんだろう……

「あ、そうだ」

なるちゃんが思い出したように声をあげた。

「ちょっと待ってて」

なるちゃんは、そう言って椅子から立ち上がって控え室を出て行った。

一分もしないぐらいでなるちゃんは戻ってきた。

その手には、女の人向けのファッション雑誌があった。

「何、それ？」

なんでいきなり雑誌なのか分からず、俺は首を傾げた。

「えっとね……確か……」

なるちゃんは雑誌を開いてページを捲っていく。

「あ、あった。……これ！」
開かれたページを、俺に見せる。

そのページには、『この冬一押しのコスメ』と大きく書かれている。

これを見せられても、俺には何のことかわからなかった。

「ここ！　ここ見て」

なるちゃんは雑誌の左ページを指さした。

そこには色々な口紅の写真が載っている。

「沖田君、彼女さんのリップ折っちゃったんでしょ？　だから、新しいのをプレゼントしたらどうか？　日頃のお詫びとかも込めて」
なるちゃんが言って、やっと理解できた。

「なるほど！　いいな、それ！」

俺は雑誌で口紅を試してみる。

色々な種類があるんだな……

口紅一本でこんなにあるということ、俺は初めて知った。

あ、これナツが持ってたのと似てる。ていうか、多分これだ。

見覚えがあるのを見つけて、俺はその横の文字を読む。なににな……

『色んなシチュエーションで使えるカラーが揃ったナントカ（多分

ブランド名。ブランド名が英語だから読めない）は、超人気。特に一番人気のローズピンクはお店で売り切れのことが多いんだとか』

……へえー……そうなんだ。

あ、値段も書いてある。

「えー!？」

俺はそれを見て、目が飛び出すかと思った。

「く……口紅ってこんなに高いもんなの!？」

ナツが持っていた、俺が今朝折ってしまった口紅の値段は、三千五百円もした。

「……ああ、これ？ でも、こんなもんだよ。ブランドでも安いのだと千円しないのもあるけど。でもいいやつは大体それぐらいしちゃうかなー」

なるちゃんがそう教えてくれた。

……知らなかった。

だって口紅って消耗品だろ？ それに百貨でも売ってるの見たことあるし、絶対こんなにはしらないと思ってた。

こんなに高いのを、俺は折っちゃったんだ。

「はあ……」

「ほら、元気出して！ 選ぶんでしょうっ」

あ、そうだった。落ち込んでる場合じゃない。なるちゃんに励まされて俺は雑誌に目を戻す。

「これ、彼女が持つてると同じなんだ」

俺はそれを指さしてなるちゃんに言った。

「あ、そうなんだ。じゃあ、これにするの？」

「……うーん」

俺は雑誌を置いて悩んだ。

「何に悩んでるの？」

「いやさ、俺、実は彼女にちゃんとしたプレゼントするのって初めてだからさ」

「え？ そうなの？」

なるちゃんは驚いた顔で俺を見る。

「今まで誕生日プレゼントとかどうしてたの？」

「その時は……俺が金ないの彼女も知ってるから……『旬が祝ってくれるんならプレゼントなんかなくても嬉しいよ』って言われて、逆にプレゼントはいらないみたいな雰囲気です。でも、何もあげないわけにはいかないから、ここのケーキ、店長にちよつと安くしてもらって買ったのをあげたんだ。それで十分喜んでくれたから」

それ以来、イベント事の俺からのプレゼントは、いつもケーキになっちゃった。しかも、ホールは流石に高いからカットされたや

っ。

でもまあ、うちのケーキは結構評判いいし、選ぶのも考えて季節限定物とか、新商品とかにしているから、ナツは喜んでくれるけど。

「だからさ、初めてのちゃんとしたプレゼントだから、もうちょっと選びたいっていうか……」

「そっかあ」

確かに、俺が折ったのと同じのを選んだ方が、ナツの好みにはずれることはないだろうけど……でもそうすると、ただの弁償だし、プレゼントっぽくない。

せめてもうちょっと考えてから決めないと。

「……でも、どれがいいかってイマイチわかんないんだよね……」

問題はそこだ。

化粧品のことなんて全く分からない俺には、なるちゃんが貸してくれた雑誌のものはどこがどう違うのか、違いが分からない。

「うーん……でも、それに載ってるやつは全部モノはいいよ。あとは好みの問題だから、沖田君が彼女さんに合うと思ったやつでいいんじゃない？」

なるちゃんも雑誌を覗きながら考えてくれている。

ナツに合いそうなやつか。簡単なようで難しいな……

ていうか、これって、俺のセンスが試されるんじゃない……あと、俺

がどんだけナツのことを分かってるか……

ナツの好みを知ってるかどうかはまだ自信なくはないけど……それで選んだやつがナツの好みじゃなかったらマジでショックだし……

そう考えるとプレッシャーだ……

俺は、間違いのないように、一つずつじっくりと見る。

……これは形が絶対ナツの好みじゃないし。これは俺的に微妙だな。

あ、でも、化粧品は見た目ってあんまり関係ないよな。使ったら一緒なんだし。

ナツってどういう基準で化粧品選んでるんだ？

案外俺はナツのことを分かってないのかもしれない。でも、こんなことまで普通は知らないよな？

ちよつと不安になった。

『CMでも話題の新商品』

ふとその文字に目がいった。

「あ」

その口紅を見た瞬間、ピンときた。

これなら、ナツは好きかもしれない。

細くて、黒に金色の模様がはいっている。

「いいのあった？」

「うん。これ」

俺はなるちゃんにそれを指さして教えた。

「あ、これ？　CMでやってるよね」

「そうなの？」

「え、見たことない？」

「いやー？　あんのかなあ」

雑誌にも書いてるけど、俺は普段口紅のCMなんて特に気にして見ないから、見たことがあっても思いつかなかった。

「これって、落ちにくくっていいんだって。友達が使ってるんだけど、ご飯の後も塗り直しとかしなくてもいいから楽だって言ってたよ」

「へえ……そうなんだ」

塗り直ししなくてもいいのか。

そう言えば、今朝、キスした後にナツ、塗り直そうとしてたっけ。それで俺がふざけたから……

「決めた！ これにする！」

俺がこれをあげて、ナツがこれを気に入ってくれたら、もう同じようなことにならないですむだろうから。ナツを嫌な思いにさせることも少なくなるだろうから。だからこれにする。

「うん。いいんじゃないかな。じゃ、このページあげるね」

なるちゃんは俺が選んだ口紅が載っているページをビリビリと破いている。

「え？ いいの？」

「うん。いいよ。もうこのページは見ないから。はい」

なるちゃんは破いたページを俺に渡してくれた。

「ありがとう。なるちゃん」

「どういたしまして。頑張ってね、沖田君」

なるちゃんは笑顔で応援してくれてる。うん。頑張らないとな！

「お疲れでしたー」

五時にバイトを上がって、俺はカフェを後にした。

今日は、これからまだ居酒屋の方でバイトがある。六時からだか

ら、このままゆっくり行っても十分間に合う。

居酒屋に向かいながら、俺は悩んでいた。

さつき気付いたけど、俺がナツにあげようと決めた口紅も、そこそ高い値段だった。ていうか、正直ナツが持ってたやつよりも高かった。

どうすっかなあ……給料日、まだ先だから金ないし……すぐに買えないぞ。

いや、急ぐ必要はないのか。別に誕生日とかのプレゼントってわけではないし、いつまでにして決まってるわけじゃないもん。暫くちよこちよこと金貯めて……

いやいや、んなこと言ってたら、絶対、今更？　って時期になるよな。それじゃあ、意味ないだろ。

じゃあ、いつにしよう。ナツの誕生日はまだまだ先だしなあ……

俺は色々考えて、頭の中にカレンダーを思い浮かべる。

……あ。三月十四日。ホワイトデー。

そうだ！　その日だ！　今月のバレンタインにナツからチョコもらう（予定）だし、そのお返しだったらなんの違和感もなく渡せるし、来月までには何とか金貯められるだろうし。

決めた！　ホワイトデーだ！　それまでにいつもよりは多目にバ

イト入って……うん！ いける！

ナツのために、いつもろくに働かせない頭を働かせる。それはすごく楽しいから、全然苦じゃない。

頭の中がナツでいっぱいだと、すごく幸せ。ていうか、いつも俺の頭の中はナツで一杯だけど。

あ。

人ごみの中で、『いいもの』を見つけた。それに向かって俺は走った。

「ナーツちゃんっ」

俺はすぐに『いいもの』に抱きついた。
それは、勿論、ナツだ。俺の少し前を歩いてるのを見つけたから、追いかけてきた。

「匂！？」

ナツはすぐに俺の名前を呼んだ。

「当たり前」

すぐに俺と分かってくれるのが、すごく嬉しい。
まあ、こんなこととしていいのも、できるのも俺だけだけど。

「もうっ……旬！」

ナツは顔だけをこっちに向けていつもの様子だ。

よかった。今朝のこと気にしてないみたいで。

俺は無意識に顔を緩めて笑った。

「ナツ……。こんなところで会うとか嬉しい」

俺はその嬉しさを表現してナツのことをもっと抱き締めた。

「もうっ……恥ずかしいから離して」

ナツは恥ずかしがって俺の腕を解く。

「旬……誰か確認しないでいきなり飛び付くのはやめてっつていつも言ってるでしょ。間違ってたら変質者になるじゃない」

ああ、やっぱりこういう怒った風な顔は可愛いなあ……

「俺がナツのこと間違えるわけないじゃん」

なぜなら、ナツは輝いているから。だから、人ごみの中でも、後姿でも分かるんだ。

「ナツ、何してんの？ 帰るところ？」

「うん。旬は？」

「俺はバイト。途中まで一緒に行こっ」

俺は手を繋ごうとナツの手に触った。

「うわっ。ナツ、手え冷た！」
予想外にひやっとして俺はビックリした。

そういえば、ナツはこの時期、手足がすぐ冷えるって言ってたっけ。

「じゃあ……」

俺はいつものようにナツの指に俺の指を絡めて繋いで、俺が着ているダウンのポケットの中に入れた。

ナツの手は小さいから、すっぽりと収まった。

「これでよし！ あったかい？」
俺が聞くと、

「うん…… あったかい」

ナツはそう頷いた。うん！ よかった！

俺は多分、ナツがいないとダメなんだろうな。ナツがいなかったら、幸せにはなれないんだ。

ナツと手を繋ぐ、たったこれだけでも、幸せになれるんだから。

「旬、今からどこのバイト？」

「居酒屋だよ」

聞いてきたナツに俺は答える。

「……居酒屋って、あの？」

ナツの表情がちょっと微妙なものになった。

「そう。あの」

ナツが考えたことはすぐに分かったから、俺は思わず笑った。

ナツが思い出してるのは、きっと俺達が出会った時のことだ。

「まだ続けてたの？」

「うん。あそこ時給わりといいし。店長も気前いいし。あ、ナツのこと今度連れてこいって言ってたよ。ナツ、全然行ってないんですよ」

俺がバイトの時は勿論、それ以外でもナツは全然店に顔を出してない。

俺は知らなかったけど、店にわりとしょっちゅう店に来ていたらしい。なのにあれ以来来なくなっちゃって、店長が言ってた。

「当たり前でしょ！ 恥ずかしくて行けるわけないじゃない！」
ナツは少し顔を赤くしていた。そしてすぐに真顔に戻って、

「ていうか、店長、あたしたちのこと知ってるの？」

「うん。だって俺、言っただし」

「もー……言わなくていいのに」
そう言っただけでまた顔を赤くした。

コロコロ表情変わって……本当に可愛いなあ……

「あ。そーだ。今度行ったらさ、また帰りホテル行く？」

ちよつとからかうつもりで、俺は笑って言った。

「もう！ 何言ってるの！ あたしは行かないからね！ ていうか、あの時のことは忘れてっば」
必死なナツが可愛い。

「普通彼女との初めてのエッチのこと忘れられるわけないじゃん？ ナツは忘れてるみたいだけどさあ」

「もう！ 旬！」

ナツは顔をリングゴみたいに真っ赤にして俺をキツと睨む。でも、それすらも可愛い。

「本当、あん時のナツ可愛かったなあ」

勿論、思い出すのはその時のこと。

あの時のナツは、どこの誰よりも可愛くて、綺麗だった。

「あ、今もめちゃくちゃ可愛いけど。つつか、ナツはいつどこで何しても可愛い」

どこの誰よりも可愛くて、綺麗なのは、今も変わらない。ナツはそんなナツのまま、変わらない。

「どこが？」

突然、ナツが真剣な顔になって聞いてきた。

「具体的に、どこが？」

そうやって聞かれて、頭に浮かんだのは、やっぱりナツの全てだった。ナツの一つ一つの表情に、行動に、言葉に……

「え……そんなの恥ずかしくて言えないって」
それを言うのは、流石の俺も恥ずかしかった。

「いいじゃん。何でも！ 何がしろ、俺がナツのこと好きなのは変わんねえもん」

顔が熱いのが分かった。今の俺、多分顔が赤いんだろうな。

ナツの顔も赤くなっていて、俺とナツはお揃いなんだろうと思った。

些細なことがあっても、すぐにいつも通りになれた。

これから、ちょっとやそつとのことじゃ、俺とナツの関係は崩れることなんてないだろうと、俺らの関係はそんなにヤワじゃないと、この時の俺はそう信じていた。

18 バレンタイン前

「ナツー。どうしてもダメ？」

「ダメ」

「どーおしても？」

「ダメ」

「……と、思わせといて？」

「ダメだつてば」

さっきから電話でこればっか。ナツは全くいいっていいってくれな
い。

「何でダメなんだよう」

「だから、言ってるでしょ。平日だから」

「……せつかくのバレンタインなのにー」

そう。間近に迫ったバレンタインに、会うことは決まってるから、
俺はナツに泊まりでいいよな？ と聞いたら、

『平日だからダメ』

と、あっさりと言われてしまったのだ。

それでさっきから泊まりにしてもらおうと粘っているのだけど、ナツの意見は全く変わらない。

「旬。ちゃんとチョコはあげるから。あ、ケーキの方がいい？ チョコレートケーキ」

ナツの手作りチョコレートケーキ……

いやいやいや。揺り動かされるな俺！

俺はその日ケーキよりナツが食いたいんだ！

つつか、普通さ？ バレンタインなんだから、平日でもその日は特別じゃん。ナツの方から泊まりがいいとか思わないもんなのか？ そりゃ、ナツはイベントとか、必要最低限のことすればいいみたいだけどさ？

「旬ー？ ケーキいらないの？」

そんな……いくらケーキだからって、いくらナツの手作りだからって、心動かされるわけが……

「いる！」

ありますけど。思いつきり。

「クリームたつぷりにしてくれな？ ……あと、次の休みは絶対泊まりな？」

悪あがきでそれだけ条件をつけた。

「うん。分かった」

とりあえず、ナツがそう言うてくれたから、ここは我慢することにする。

でも……泊まりがよかったなあ……

翌日。

今日はカフェで七時までバイトだった俺は、更衣室で携帯をチエックする。

ナツにメールをしようと思ったら、すでにナツからメールが来ていた。

珍しい。ナツの方からメールくれるなんて。それでも嬉しくて俺はすぐそのメールを開いた。

『今日、これから友達と買い物行くの。
だから、帰ってきたら電話するね』

こんな内容だった。

なんだ……ナツ、買い物かあ。
ちよっとテンションが下がった。

でも、電話くれるんだ。それならいいかも！
そう思っただけですぐにテンションは上がる。

ナツから電話！ ナツから電話！ ナツから電話！ ナツから……

こんな調子で、俺は家に帰って、メシを食って、風呂に入って、その間一度も携帯を手放さなかった。

そして今は、ベッドの上に寝転がって、携帯とにらめっこ状態だ。

来ねえなあ、ナツからの電話……

時間はもう九時を過ぎるくらいだ。
買い物に行った友達とメシも食ってるのかな？

だとしても、そんなに遅くならないだろうし……そろそろくるかな？

そう思った次の瞬間。

携帯のサブ画面が光って『着信』の文字が出る。その相手は……
もちろんナツ！

「もしもし、ナツ？」

着信音が鳴るか鳴らないかで俺は電話に出た。

「うん。……相変わらず出るの早いわね。今何してたの？」

「ナツの電話待ってた」

俺はそのまんまを答えた。ナツの声が聞けただけで、すっごく嬉しい。

「そう……」

でも、なんとなく、違和感があった。

「ナツ、何かあった？」

気になって、俺はナツに聞いた。

「え……何で？」

今の答え方も、ちょっと戸惑った感じがした気がする。

「んー……何か声が元氣ない。いつもと違う。気のせい？」

全体的にそんな感じがする。いつもは、もっと明るいと思う。

「うっん。何も無いよ。ちょっと友達と飲みすぎたからかな」

「えっ……ナツ飲んだの？ 大丈夫？」

今までと違う意味で心配になって、俺は聞いた。

「どうして？」

「だってナツ、酔ったら荒れるじゃん」

うん、一年前はすごかった。

「なっ……荒れないわよ！あの時は特別だったの！」
ナツはムキになった様子で言った。電話の向こうでは、唇を尖らせて、ちよつとむくれた可愛い顔になっているはずだ。

「へへっ。そっか」
想像して、俺は笑った。

「……ねえ、匂。……匂は、何であたしなんかと付き合ってるの？」
いきなりナツがそんなことを言ってきた。

え、何で……？

「何でって……そこにナツがいるから？」
頭に浮かんだことを、まんま言ったら、こんな言葉になった。どつかできいたな、こんな台詞。

「……」
ナツは黙ってしまった。

「何か違う？」

「うん」

「えっ……つうか、何でいきなり？」

ナツがこんなこと聞くなんて珍しい。

「別に……今思ったから、何となく……だって普通引くでしょ？
酔っ払いの女とか。ていうか、匂がホテルに誘ったのって下心？」

……ちよつと痛いところを突かれた。

「ん……まあ、ぶつちやけ？」

ここで否定するのも白々しい気がしたから、俺は本当のことを答えた。

「だって、目の前でオツパイのおっきいお姉さんが『帰りたくない
っていうもんだからさ？ それでちよつと、まあ……うん』」

これってフォローになってんのか？ なってねえよな、多分。つ
うか、むしろ墓穴？

こんな言い方したら、俺、ただのおっぱい好きの軽いヤツみたい
だ。（おっぱい好きはそうだけど）

「でもさ、俺、それがナツでよかったと思ってんだ」

たしかにきつかけは下心だったけど、今ではそう思っているのは
確かだ。

「え……」

「ナツのこと、知れば知るほど好きになるから。こついつの、ナツ
が初めてなんだ」

今まで俺が付き合ってきた彼女のこと、付き合っている時は本
気で好きだったし、他の誰よりも大好きだと思っていた。

でもその大きさは、ずっと変わらないままで俺はそれが普通だと思っていたけど、ナツとは違う。

「……そんな恥ずかしいこと言わないで」
ナツは落ち着いた声で言った。

「うん。自分で言ってちよつと恥ずかった」
流石の俺も、こんなこと言ったのは初めてで、言ってみると照れ臭いもんなんだなと思った。

「ねえ、匂。十四日のことだけど……」
いきなりナツが話を変えた。

「うん、何？」

「……匂がうちに来るなら、泊まりでもいいよ」

あまりにいきなりで、一瞬ナツが何を言ったのか、分からなかった。

「え……いいの？ 平日だからダメって言ってたのに」
口から出たのはそんな言葉だった。

でも、俺がいくら言っても泊まりはダメだって言ってたのは、つい昨日だ。なのに何でいきなり……

「うん……でもやっぱりバレンタインだから、特別ね。…それに、ケーキ作るの時間かかるし、匂がうちに来るんだったらゆっくりめに作れるし……あと、朝もいつも通りにできるから」

ああ、そうか。確かにケーキ作るのは時間かかるよな。
俺はナツが言ったことに納得する。

「別に旬が嫌ならいいけど？」

ナツの言葉に、俺ははっとする。

「行く！ 絶対行く！」

俺はすぐにそう言った。

理由なんて、なんだっていい。ナツがせっかく泊まりでいいって
言ってくれたんだ。それで嫌なんて言えるわけがない。

バレンタイン、すっごく楽しみだ！

19 掛け違い

今日はバレンタイン。平日だけど、ナツの家に泊まりの日。

俺は今日が楽しみで楽しみで楽しみで……（略）しょうがなかった。

なのに……

「はあー……」

俺は更衣室で制服に着替えながらため息をついた。

なんでこんな大事な日にバイト入ってるんだよ、俺。

今日はカフェのバイトが入ってる。

バレンタインだし、みんな用事デイトとかが入ってるみたいで、入りたくないって言っていた。勿論、それは俺も同じことだ。

だけど、誰も入らないこともできないから、ジャンケンで決めた。で、俺はあっさりと負けてしまったのだ。

何でこんな日に限って……

幸い、俺は昼過ぎから夕方時間で、六時には上がれる。どうせナツが仕事終わるのも五時頃だから、ちょうどいいって言えばちょっといい。

どうせバイト入ってなかったらすることなんてなかったし、時間つぶしだと思えばいいんだ。

俺は携帯で時間を確認した。そろそろ入らないと……

「あ」

携帯の画面の端の電池の表示が、あと一つになっていた。この状態だったら、もし誰かからメールがきたり、電話が来たりしたらすぐに切れてしまうかもしれない。

バイト中は電源切っておこうかな。ナツからは多分来ないだろうし。

そう思って、俺は携帯の電源を切って、ロッカーの中に携帯を置いていった。

「いらっしやいませ。二名様ですか？」

「はい」

「ではこちらのお席にどうぞ」

今日はこのやりとりが多い。

しかも『二名様』というのは、男と女の組み合わせ、つまりカップルだ。

今日は、店長がバレンタインの特別キャンペーンをやると言って、カップルの客は二人で二百円引きという『バレンタイン割引』をしている。

そのせいでいつもより客が多い。それも、カップルの。

つつか、何、この忙しさ!?

客を席に案内して、オーダーとって、ケーキ運んで、会計して、空いた席片づけて……

いつもはわりとゆったりできる仕事も、今日は急いでやらないといけない。

次から次へと客、客、客……しかもみんなカップル。

「ねーえ？ まーは何にするう？」

「んー？ ゆんは何にしたあ？」

「あたしはあ、ショートケーキとフルーツタルトどっちにしようかなーって迷っちゃってえー」

「そうかあ。じゃあ、二つ頼んで半分コする？」

「あ、それいいかもー！ そうしょ！ そうしょ!」

「じゃ、ショートケーキとフルーツタルト一つずつ。あと、ホットティーとホットコーヒーで」

「……かしこまりました。少々お待ち下さい」

カップルのオーダーを聞いて。俺はすぐにその場を離れた。

……ちくしょう……目の前で堂々とベタベタしゃがって……

すっ……げー羨ましいっての！

俺もバイトさえ入ってなかったらナツと来たかったっての！

あーあ……早く終わんないかなあ……

そう思っていたら、なんだかんだで忙しくて、すぐに時間は経っていた。もう上がりの時間の六時だ。

やっと終わる……そう思いながら俺は下げた皿を厨房の方へ返しにきた。

「あ、沖田君！」

呼ばれた方を向いたら、店長が急いだ様子で俺の近くへやってきた。

「ごめん！ 終わりの時間だけど、もう少し入ってくれないかな？」
店長が手を合わせて俺に言った。

「……へ？」
いきなり意味が分からず俺は首を傾げた。

「実は、夜からの島崎君、インフルエンザで来れないって連絡入って……」

「ええ！？」

俺は思わず大声を上げた。

「どうしたんですか？」

なるちゃんが俺達のそばにやってきた。

「あ、鳴海さん！ 鳴海さんももう少し入れないかな？」

店長はなるちゃんの方にもそう言った。

「え？ 何ですか？ 何かあったんですか？」

「島崎君がインフルエンザで来れなくなっちゃって……それで大川君に連絡してみたら、今、別のバイトが入ってるから、それが終わったらすぐ来てくれるって言うてくれたんだ。でもそれまでまだ時間かかるみたいだし、今日予想以上にお客様が入ってるから、ちょっともたなそうだから……せめて大川君が来るまででいいから……」

二十六歳で気弱の店長は、泣き出しそうな顔になっている。

「……分かりました。少しでいいなら入ります」
なるちゃんはため息をついて言った。

これは、俺も残らないといけなさそうだな……

「じゃあ、俺も入ります」

本当は早く帰りたい。早くナツに会いたい。

でも、今の店の状態だと本当に人手が足りなくなるのは、俺にだって分かる。分かった上で、しかも女の子のなるちゃんが残るっていうのに、俺だけ帰るっていうことはできなかった。

「あ、ありがとう！ 鳴海さん！ 沖田君！」
店長はわざわざ頭を下げてお礼を言ってくる。

「いいですよ。あ、でも、ちょっと連絡だけしていいですか？ 人と待ち合わせがあるんで」

なるちゃんがそう言ってポケットから携帯を取り出す。

「うん！ それぐらい構わないよ！」

店長が大きく頷いた。

そうだ。俺もナツに連絡しておかないと。

「あの、俺も」

「すみませーん。会計お願いします」
レジの方から客の呼ぶ声が聞こえた。

「あ、はい！」

俺は急いでそっちの方に向かった。

その後も、忙しくて、ナツに連絡をする時間なんてなかった。

ただでさえ忙しいのに、今日に限って、携帯は更衣室のロッカーに置いてきてしまった。取りにいく暇なんてない。

いつもはポケットに入れてるのに、なんで今日に限って……

しかも大川先輩はなかなか来ない。もうとっくに七時を過ぎてしまった。

やばいやばいやばいやばい……

「沖田君、鳴海さん！ 大川君来てくれたから、もう上がっていいよ！」

店長の声で、俺は物凄くほっとした。

「本当にごめんね！ 助かったよ。ありがとう！」

「いえ、とんでもないです！ それじゃ、お先に失礼します！」

「お疲れ様！」

最後の方はバタバタで、俺は更衣室に戻った。

急がねえと……！ ナツに連絡……ああ！ 着替えが先だ！

俺はロッカーの中から携帯を取ったけど、そうすると着替えの手が止まってしまう。着替えてからナツの家まで走りながら電話した方が早い。携帯を置いて急いで制服から着替えをした。

今の俺は、とにかく、一秒でも早くナツに会いたかったんだ。

着替えを済ませて、俺は急いで店の裏の従業員用入り口から外に出て、表の通りに出た。

「沖田君！」

丁度その時に名前を呼ばれて、俺は振り返った。

なるちゃんが俺の後から表に出てきた。

「なるちゃん。お疲れ」

さっき言い損ねたから、なるちゃんにそう言った。

「うん。お疲れ。本当に災難よねー。まさかこんなに遅くなるなんて」

「ホントだよなあ」

「沖田君、これから彼女さんのところ？」

「うん。なるちゃんも？ デート？」

「うん。一応ね。待ち合わせの時間遅くしたんだけど……もう待ってるかな」

なるちゃんは腕時計を見ながら言った。

「あ、それでね……はい。これ」

なるちゃんは鞆の中から小さい袋を取り出して俺に差し出した。

「義理チョコ。って言ってもクッキーだけだね。皆に渡したんだけど、沖田君には渡す暇なかったから。彼氏に焼いた分の余りで、形もあんまりよくないけど、よかったら貰って」

「マジで？ ありがとうー」

俺はなるちゃんの義理をありがたく受け取った。

「あ、行かないと。じゃあね、沖田君」

「うん。バイバーイ」

手を振って、なるちゃんと別れて、俺はクッキーをダウンのポケットにしまつて、携帯を取り出そうとした。

俺も急がないと。ナツにも電話しないといけないし。

そう思つた次の瞬間だった。

「あ！ ナツ！」

ふと向いた方向に、ナツがいた。俺は目があったと同時にナツの方に走った。

「ナツ！ 何でここにいの？ もしかして迎えに来てくれた？」

ナツがここにいるなんて思いもしなくて、俺は驚いて聞いた。

「……うん」

「あ、ごめんな？ 今日、夜からの奴がインフルエンザで急に来れなくなつたらしくてさ、バイトの時間延びたんだ」

俺はとりあえず遅くなつた理由を話した。

「そうなんだ」

「でも嬉しい！ ナツがわざわざ迎えに来てくれるなんてさ」

本当に、嬉しい。ナツがここまでできてくれるなんて。

ナツも、早く俺に会いたかったって思ってくれてたのかな。

「んじゃ帰ろ」

俺はいつもの通りにナツを手を繋ごうと手を伸ばした。

ナツが俺の手を握ってくれて、俺達は歩き始めた。

「今日バレンタイン割引ってやっててさあ」

俺は今日あったことを話そうとした。

「うん。書いてあったね。200円引きだっけ」

ナツは店の前の看板を見たらしく、そんな相槌が返ってきた。

「そう。だからいつも以上に人居てすっげー忙しかったんだ。しかも皆カップルだし。……あーあ。せっかくのバレンタインなのにとんだ災難だよ」

そんな風に、いつものようにナツに愚痴っていた。

「……しょうがないでしょ。そういう仕事なんだから」

また違和感があった。この間の電話の時と同じだ。

「……ナツ、何かあった？」

俺はナツの様子を見ながら聞いた。

「え……」

「この間電話した時もあったけど……やっぱり元気ないっぽいし」

「そんなことないわよ。確かにちょっと仕事の疲れが溜ってるかもしれないけど、別に大したことないから」

「仕事きついなの？」

ナツが仕事のことを口にするなんて、珍しい。よっぽど疲れてるのかな？

「大丈夫。やらないといけないこともちゃんと片付いたし、あとはいつも通りだから」

ナツはそう言って、軽く微笑んでいた。

そっか。ナツが大丈夫って言うなら、大丈夫だよな。

「そういえば……旬。携帯、電源切ってたの？」

ナツがいきなりそのことを口にした。

「あっうん。そうだ、俺充電切れかけだったから切ってたんだ。あ、もしかしてナツ、電話くれてた？」

ナツに言われて俺はやっと携帯のことを思い出した。

「……うん。メールもしたんだけど」

「マジで！？ ごめん、まだ見てなかった」

それならやっぱり電源入れてバイト中も持っておけばよかった。そう思いながら俺はダウンのポケットから携帯を取り出した。

「……普通、それが先じゃない？」

「え……？」

ナツがいきなり言ったことの意味が、俺には分からなかった。

「女の子と話す暇はあっても、あたしに連絡しようとは思わなかったの？」

「女の子……？ あ、見てた？ あれ、同じバイトの子だよ。一緒にとぼつちり受けたんだ」

多分ナツはなるちゃんのことを言っている。変に誤解されないために、俺はそう言った。

「ああいう子、旬の好きそうなタイプよね」

「えー？ まあ、顔は可愛いとは思っけど、別にタイプではないって」

確かに、なるちゃんは可愛い。でも、おっぱいはパットだし……どっちにしろ、俺はそこだけを見てるわけじゃない。

「でも、バレンタインの……チョコか何か貰ってたじゃない？」

「貰ったけど……でもあれは義理だから貰っただけだよ。彼氏に作ったクッキーが余ったからって。皆にも配ってるし、あんまり形もよくないやつだけだって言ってたから貰ったんだ」

もし、本命でくれてたんなら、俺は貰ったりなんかしない。本命のはナツからのしか欲しくないから。

でも、ナツは何でいきなりこんなこと言っただろう。

「あ、もしかしてナツ、ヤキモチ？」
ピンときて、俺は言った。

「……別にそんなんじゃないから」
ナツの反応はつれなかった。

でも、このナツの反応は、きっとそうだ。

「ナツ、心配しなくても俺にはナツだけだって。ナツが居れば、俺は生きていけるから」

俺はナツを安心させようと、笑いながら言った。勿論、この言葉に嘘はない。

でも、こういう言い方したら、ナツはきっと照れるんだろうな。そう思っていた。

でも、ナツの反応はなかった。そして、後ろに引っ張られるような感覚がした。

「ナツ？」
急にナツが立ち止まった。俺はナツの方に振り返る。

「何ヘラヘラしてんの……？」
呟くような声でナツが言った。

「え……？」
いきなりで、俺は何のことか、全く分からなかった。

「少しは悪いとか……申し訳なさそうな態度はとれないの？」

今度は大きな声で、怒鳴るようにナツが言った。

「あたし……不安だったんだからっ。旬が……いつも時間通りなのに連絡もなく一時間以上も遅れて……電話しても繋がらないし……心配したんだからっ！」

こんなナツは初めてだった。

「あたしが……そういうの思わないとでも思ったの？ 旬が何時間遅れても、平気な顔して、簡単に許すとも思ってたの！？」

こんな街中で、こんなに大きな声で、俺に対して、こんなことを言うナツは初めてだった。

「そんなことないっ！ ごめんっ……俺、そこまで考えられなくて……でも連絡できなかったのは、客が多かったから時間なくて……終わってから、ナツの家まで走りながら電話しようと思ったから……その前に呼び止められて……」

俺はただ焦って、必死に連絡できなかったわけを話した。

「もういい！」

俺のそんな言葉は、ナツに簡単に遮られてしまった。

でも、どんなに言おうと、それが今更ただの言い訳じみてしまうのは、自分でも分かった。

「何が『ナツがいれば生きていける』よ。そう言えば機嫌とれるとも思ってるの！？ どうせ旬はあたしが身の回りのことをやってくれるから、あたしがいないとダメなんでしょ！？ そんなの別にあたしなんかじゃなくてもいいじゃない！」

「ナツ……違うよ……」

そんなこと思っ
てない。思っ
たことなんて、ないよ。

「何であたしがこんな思
いしないといけないの！？」

俺の言葉は、ナツに全
く届かない。

「旬の部屋の掃除も……料理も洗濯も、あたしがや
ってくれて当たり前前
って思っ
てんの！？あたしは旬の母親じゃないのよ！」

そこまで言われて、俺は何も言えなくなっ
てしまった。

ナツからしてみたら、全部、本当のことだ。

俺は、ナツに今までそう思われてもしょう
がないことをしてたん
だ。

「ナツ……ごめん。ごめんな……」

バカな俺は、こ
うやって謝ること以外、何もできなかった。

「もう嫌……。これじゃあ、あたしばかりが旬のこと好き
なだけみたい……」

「え……？」

ナツ……今何て……

俺が固まってしまった瞬間に、ナツの手が振りほどかれて、ナツは走って行ってしま
う。

「ナツ……！」

俺は必死にナツを呼んだ。

「ナツ！ 待って！」

どんどん遠ざかっていくナツを、俺は追いかけた。

俺にはナツしか見えてなくて、そのせいで周りの人が見えなくて、たくさんぶつかって、なかなかナツに近づけなかった。それどころか、俺とナツの距離は、どんどん離れていった。

ナツのコーポまできて、俺は階段を駆け上った。
三階のナツの部屋まで行き、ドアノブに手をかけた。

「ナツ！」

ドアノブを回そうとしても、動かない。鍵をかけられたみたいだった。

「ナツ……ごめん……」

ドアの向こうにいるはずのナツに、俺は言った。

「俺……ナツがそういう風に思ってたとか、全然考えてなくて……」
走って息が上がってるせいで、上手く言葉が出なかった。

「ねえナツ……開けて……入れてよ」

とにかく、ナツの顔を見て、ちゃんと謝って、許してほしかった。

「……帰って」

すぐそばでナツの声が聞こえた。

「ナツ……」

「帰って。旬の顔……見たくない」

ナツのその一言に、俺の頭は真っ白になった。

「帰って……」

その後、俺はどうしたのか、はっきり覚えていない。

でも気付いたら、俺は自分の家に帰ってきていた。

玄関で靴を履いたまましゃがみ込んで、ナツに言われたことが頭の中で繰り返された。

『旬の顔…見たくない』

ナツに拒絶された。初めて……

今まで俺がどんなバカなことしようと、ナツは優しく許してくれた。

なのに、今日は、そういうわけにはいかなかった。

俺はダウンのポケットから携帯を出して、電源を入れた。そして、メールの問い合わせをする。

すぐに着メロが鳴って、メールがきていたことを知らされた。それは間違いなく、ナツからの着信音だった。

そのメールを開いてみると、

『まだバイト？何かあった？
今から迎えに行くからね。』

そう表示された。

それを見たらすぐに、電池が切れてその画面が消えてしまった。

……バカだ、俺。

『ナツ！ 何でここにいの？ もしかして迎えに来てくれた？』

そんなの、このメール見てたらすぐに分かったことなのに……そんなの、言うことじゃなかったのに……

普通に考えたら分かることじゃん。一時間以上連絡しなかったら、メールぐらいは来てるだろうってことぐらい。

あの時、一分一秒でも着替えるのが遅くなって、ナツに会うのが遅くなったって、電話の一本でもかけておけば、ナツは怒ることなんてなかったんじゃない。

俺は、俺のことしか考えてなかったんだ。

ナツがどんな気持ちになっていたかなんて、考えもしてなかったし、気付きもしなかったんだ。

それなら、ナツが俺のこと、嫌になったって……

そう考えたら、目の前がぼやけた。

泣くことなんてめったなことなのに……俺は泣いてしまっていた。

「ナツ……」

嫌だよ、ナツ。

俺のこと、嫌いにならないで……

俺から、離れていかないで……

20 別れたくない

俺とナツの関係は、ナツ次第なんだ。

俺は、ナツのいうことすることにムカついたり、イライラすることなんてないから、俺から喧嘩になるようなことは言わないし、当たり前だけど別れようなんて思わない。

もし、喧嘩になったり、別れ話が出るようなことがあれば、それは全部ナツからというわけで、もし本当にナツからそんなことを言われてしまったら、俺達は終わりなんだ。

ふと目が覚めた。

俺は携帯を握りしめたまま、いつの間にか眠っていたようだ。

携帯は充電器に差しっぱなしで、開いたままだった。充電は、とくに終わってる。

あれから、俺は何度も何度もナツに電話して、メールした。

でも、ナツは電話に出てくれなかったし、メールも何の返信もない。

念のため今見てみても、寝ている間に電話もメールもなかったよ
うだ。

当たり前か。もしナツからだったら、寝ててもすぐ分かるから。

時間を見てみると、九時を過ぎた頃だった。

今日は十時からまたカフェの方でバイトを入ってる。

全然そんな気分じゃないけど、休めない。一応、バイトに生活がかかってるんだ。

俺はしょうがなく、昨日から着っぱなだった服を脱いで、違う服に着替えた。

「いつて……！」

部屋の中を歩いたら、何かに躓いた。そして、その拍子にローテールブルにスネをぶつけた。

「いつてえー……」

俺はしゃがみこんでぶつけたスネをさすった。

改めて部屋を見てみて、汚いと思った。何に躓いたのかも、分からないくらいだ。

いつもは大して気にしないけど、今朝はひどいと思った。

『旬の部屋の掃除も……料理も洗濯も、あたしがやってくれて当たり前って思ってたの！？ あたしは旬の母親じゃないのよ！』

ナツの言ったことを思い出して、俺はため息をついて、部屋を出た。

当たり前だけど、別に、ナツのことを母親だと思ったことは、一度もない。

でも、ナツが俺にしてくれていたことは、俺がナツにさせていたことは、母親とそんなに変わらなかったのかもしれない。少なくとも、ナツにそう思わせてしまうことだった。

とにかく、俺がナツに甘えていたことは、確かだったんだ。

ナツは優しいから。俺と違って、大人だから。

「おい、沖田」

「はい？」

バイト中、今日もまた同じシフトの大川先輩が俺に話しかけてくる。

「お前なあ、死んだ顔やめろよ。今はまだ客少ないけど、もう少ししたらピークなんだからな。客の前でまで、んな顔すんなよ」

「はあ……はい」

注意を受けて、俺は頷いた。

でも、こんなこと言ったらだめだけど、やる気になれない。笑うなんて、したくない気分だ。

「何だよ、落ち込んでんのか？」

俺の様子を見て流石に気付いたのか、先輩が言った。

「はあ……まあ」

落ち込んでるなんてもんじゃないけど、俺は曖昧に濁した。

「どーせお前のことだから、また彼女絡みのことで落ち込んでるんだろ。何なんだよ、今度は。つか、昨日は彼女のところに泊まるのかどうとか散々言ってたんじゃないかねえのか」

その言葉で、俺は昨日までのことを思い出した。

昨日は本当に楽しみで、嬉しくてしょうがない日だった。そして、すごく幸せになれる日のはずだった。

なのに実際は、ナツを傷つけて、ナツに拒絶されて……

「はあー……」

俺の口からは大きなため息が出た。

こんなはずじゃなかったのに……

「何だ、別れ話でもされたのか？」

「ちがいま……」

『す』と言いかけて、俺は口をつぐんだ。

まだ、別れるとはつきり言われたわけじゃない。一応、まだ俺達は付き合ってることになっているはずだ。でも、ナツの方からその話を切り出されるのも、時間の問題かもしれない。

「図星か？」

先輩はズバズバと痛いことを突いてくる。

「ていうか！ 先輩も悪いんですよ！ 先輩が昨日……」

『もっと早く来てくれてたら、俺とナツはあんなことにならなかったのかもしれないのに！』

思わず言いそうになって、やめた。

大川先輩は悪くない。先輩は本当は入ってなかったのに、無理して入って、閉店までいたらしい。それで今日も開店からのシフトだ。キツイに決まってる。さつきからあくびをかみ殺してるのを何度も見た。

それに、先輩が早く来ていようが、変わらなかったと思う。俺が最低限しないといけないことをしてなかったんだから。俺が今までナツに辛い思いをさせてたんだから。

一番悪いのは俺なんだから。

「はあー……」

先輩のせいにしてしまいそうになって、俺は自分が嫌になった。

「……なんだよ。俺、言っちゃいけないことまで言ったのか？ それなら謝るからそこまで落ち込むなよ」

俺の様子はたから見たらよっぽどらしい。先輩はいつもと違って心配しているような顔で言ってきた。

「先輩……」

先輩は、俺と違って大人だ。確かに俺より一つ年上だけど……それよりも、考え方が大人な気がする。

自分が悪いのを、人のせいにした子供の俺と違って。

「俺、先輩が羨ましいです」

「……はあ？」

俺が言つと、先輩に思いっきり変な顔で見られた。

どうしたらいいんだろう。どうしたら、ナツは許してくれる？

「うわ！ くっせ！ これ、いつのだ？」

バイトが終わったあと、俺は帰ってきた。

そして、散らかった部屋の片づけを始めた。

自分からこんなことをしたのは、初めてだった。いつもは気にしないし、やってくれるのはナツだったから。

でも、いつもナツは手早くやってしまうのに、俺がやるとなかなか進まなかった。

目につく限りのゴミをゴミ箱に入れたらあつという間にゴミ箱は満杯になってしまった。しかも、捨てても捨ててもゴミは出てきて、いつのか分からないコンビ二弁当の空の容器が臭っていた。

俺、いつもこんなのをナツに片付けさせてたんだ……

そう思ったら、自分が情けなくなった。

ナツは一度も、そんなことを言ったことなんてなかった。こんな部屋なのに、ずっと片付けてくれてたんだ。

でも、これからは、ナツにそんなことさせない。俺がちゃんと部屋の片付けをするようにする。

「えーっと……これは燃えんのか？」

俺は鼻を押さえながらコンビ二弁当の空を見て悩んだ。

ナツは、いつもゴミを分別している。俺もちゃんとそうして部屋を綺麗にすることができたら、ナツは俺のことを見直してくれるかもしれない。

多分、これはプラスチックだよな？ プラスチックって燃えんのか？ 燃えなさそうだけど……あ、もしかしてリサイクル？ ……つばいよな。材質がペットボトルに似てるし。

俺はゴミ袋にそれを入れた。

……ん？ でも普通、リサイクルってペットボトルだけか？ コンビニのゴミ箱はペットボトルだけだった気が……

「あー！ わっかんねー！」

考えてるうちに分からなくなって、俺はゴミ袋を放棄した。

したこともないことをしようとしても、俺の性格上、こんなことができるわけない。

あ、そうだ！ ナツに聞けばいいんだ！

思いついて携帯を手に取ったけど、それはダメなことに気付いた。ナツに頼ってたら、意味ないじゃん。大体……ナツに連絡しても、返ってくるかも分からないのに……

「はあ……」

握りしめた携帯を見て、俺はため息をついた。

それから二日しても……ナツとは全く連絡とれないままだった。

昨日も一昨日も、何回も何回も電話して、メールしたのに、ナツからの返事はない。

今日なんか、電話も通じなくなってしまった。

着信拒否までされてしまったのだろうか。……いや、でもナツの携帯にかけて聞こえたのはその時のアナウンスじゃなかった。だから多分大丈夫だ。少なくとも、メールは届いてるはず。ナツが見てるかは分からないけど……

これも初めてだ。ナツと連絡しない日が続くなんて。

今まで、一日だってナツと連絡したことのない日なんてなかった。俺が連絡すれば、ナツはいつも出てくれた。それが、なくなっている。

でも、ナツから連絡があるのが怖いとも思ってる自分がいる。だって、次ナツから連絡がくるのは、別れたいという話かもしれないから……

本当に、真っ白だ。ナツとうまくいってないってだけで、見える

世界がちがう。全部が真っ白で、全部が味気なくて、全部がつまらない。

ナツがいるだけで、俺の世界は変わって、ナツがいなくなったただけでも、世界は変わる。

ナツに出会う前までは、そんなことなかったのに……

きっと、ナツに出会って、知ったからだ。居心地のいい、充実した世界を……

だから、俺はもう、ナツなしではだめなんだ。

会いたい。会いたい会いたい会いたい。

『ナツに会いたいよ』

ずっと、ナツには謝りと、連絡ほしってメールだけ送っていた。

ここで初めて、俺は一番の気持ちをメールで送った。

ナツに会いたい。

会って、顔を見て、ちゃんと謝りたい。そしてできるなら、許してほしい。

もうナツに嫌な思いさせないように約束するから。

だから、別れるなんて言わないで。

こんな気持ちでもちゃんとバイトをしてる自分は偉いと思う。

でも、俺が何もしなくなったら、今度こそ本当にナツがいなくなってしまうそうだから……それだけが怖くて、俺はやらないといけないことだけはしていた。

「はぁー……」

今日のバイトを終えた俺は、着替えをしながらもため息をついた。

一応、バイトに顔を出して仕事はしてるものの、身が入らなくて自分でも分かるぐらいたくさんため息をついていた。

携帯を見てみても、ナツからはメールも着信もない。それを確認しただけで、俺のテンションはどんどん下がっていく。

もうダメなのかな……

流石の俺にも、そんな考えが浮かんでしまう。

その時、俺のロッカーからヒラリと紙が落ちた。俺はそれに気付いて拾った。

それは、前になるちゃんからもらった、雑誌の切り抜きだった。

金を貯めて、ナツにあげようと思っていた、口紅の……

俺はそれを見て、すぐに更衣室を飛び出した。

「店長！」

厨房の入り口へ行き、ケーキを作っている店長を呼んだ。

「沖田君……どうしたの？ 今日にはもう上がったんじゃない？」
店長は驚いた顔で俺の方を見た。

「あの、頼みがあるんですけど」

「え、何？ どうかしたの？」

「給料、前借りしたいんですけど、だめですか？」

「え？」

店長は目を丸くしている。そりゃそうだろう。

「前借りって……給料日、明日だよ？」

そう。カフェのバイトの給料日は丁度明日だ。でも……

「急ぎなんです。少しでもいいですから……」

明日までなんて待ってられない。今じゃないとダメなんだ。

「うーん……」

考えこんでいる店長を、俺は祈るように見ていた。

「じゃあ……今回だけ、特別ね」

「あ、ありがとうございます！」

俺はほっとして店長に深く頭を下げた。

「いいよいいよ。沖田君にはこの前、無理に残ってもらったから。そのお礼だよ。じゃあちよっと待ってて」

店長はそう言って、厨房から出て行った。

よかった……これで買える。

21 プレゼント

カフェを後にして、俺はデパートに来た。

案内版を見て、目的地を探す。

あ、あった。四階か。

俺はそれを見つけると、エレベーターで四階へと向かった。

店長は、給料を二万円前貸してくれた。十分すぎるぐらいに貰えてよかった。給料日前日だったから、金なんてなかった。

ナツに渡したいものを買うための……

ポーン

『四階です』

機械のアナウンスが聞こえて、エレベーターの扉が開く。俺はそこで降りた。そこで一緒に降りる人はみんな女の人だった。

そりゃそうだ。ここは、化粧品売り場だから。

そこに出てみて、俺は緊張した。女の人だらけで、雰囲気が……こう、男が入りにくい感じだし……ていうか、こんなとこに男一人じゃ浮くよな。

いやダメだ。こんな雰囲気だけでビビッてたら何にもなんねえじゃん。堂々としてたら大丈夫だって！

心の中で葛藤を繰り返して、俺はその空間に足を踏み入れた。

でも、足を踏み入れたはいいものの、俺には右も左も分からない。雑誌の切り抜きだけを持っていても、それがどこにあるか分からないし、こういうのってどういう風に店においてあるのかも分からない。

俺にはまるで迷路だった。

「何かお探ですか？」

後ろから声をかけられた。振り向くと、店員のお姉さんが営業スマイルを浮かべてそこに立っていた。

「あ……あの、口紅……なんですけど。えーっと、これ……これです」

俺は何となく怯えながら答えて、店員のお姉さんに切り抜きの口紅を見せた。

「これでしたら、こちらになります」

店員のお姉さんはすぐに分かったらしく、俺を案内してくれた。

何だ。最初から店員さんに聞けばよかった。

「こちらです」

店員のお姉さんは棚の前に立って教えてくれた。そこには、お目当てのものが並んでいる。

「お色が、全部で十二種類ありますが、どれになさいますか？」

十二種類……そんなにあるのか。

「えーっと……どれがいいとかあるんですかね？」

なるちゃんに雑誌を見せてもらってた時と同じで俺には全く分からない。

「そうですねえ………どれを使うかはお客様の好みですし………彼女さんへのプレゼントですか？」

「はい。まあ………」

改めて言われると、ちょっと照れ臭かった。

「ピンク系とオレンジ、ベージュは女性に人気ですが………その中から選んでみますか？」

「あ、はい」

俺は言われた通りにすることにした。

店員のお姉さんが見せてくれた色は五色でその中でもピンクだけで三つあった。濃い色と、薄い色と、ラメっぽい色だ。

そういえば、ナツが持ってたのは、ピンクだったはずだ。ナツはやっぱり、その色が一番似合うと思う。

「……じゃあ、これにします」

俺はナツが持っていたのと一番似ている色を選んで、店員のお姉さんに言った。

「はい。包装はいかがなさいますでしょうか。プレゼント用でよろしいですか？」

「はい。それをお願いします」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

ポケットの中にプレゼント用の袋に入れられた口紅を、俺はダウンのポケットにいれた。

そして、携帯を取り出した。

今、五時三十三分。

多分、ナツの仕事は終わってるはずだ。

俺はナツにメールを打った。

『今からナツの家に行くよ』

そして、そのメールの通りに、俺はナツの所へと向かった。

ピンポン……

ナツの部屋のインターホンを鳴らしても、何の反応もなかった。

まだ帰ってないみたいだ。もうすぐ帰ってくるのかな？

俺はドアにもたれかかって、ナツを待つことにした。

それから暫くしても、ナツが帰ってくる気配はなかった。

寒い……

俺は冷たくなってしまった手をすりあわせた。足が疲れてきたからそこに座りこんだ。

さすがに遅いな……

もしかして帰る途中でなんかあったとか……？

どうしよう……！ ナツにもしものことがあったら……俺……

『あたし……不安だったんだからっ』

ふとナツが言ったことを思い出した。

あ……そうか……

ナツもあの時、こんな気持ちだったのかな？ 連絡しなかった俺を、こんな気持ちで待ってくれてたのかな？

……不安に思ってくれてた。ナツが、俺のことを。

こんな時にこんなこと思ってる場合じゃないけど……でも、嬉しい。

初めて、ナツに言われた。俺のことに對して、不安だったとか、心配してたとか……

『これじゃあ、あたしばかりが旬のこと好きだけみたい』

俺のことを好きだってことも。

初めてそう言われたのにこんな状況なんて、いいわけないけどさ

……

俺は携帯を取り出して、ナツにメールを打った。

『俺、ナツが帰ってくるまでずっと待ってるよ』

ナツはあの日、ずっと待ってたんだ。だから、今日は俺がナツのことを待とう。

ナツが来るまで、ずっと……

「ぶえつくし！」

さつきから、くしゃみが出始めた。

今日は寒いな。

俺は手をこすりあわせて、ダウンのファスナーを上まで上げて、俺は小さく丸まっていた。

ナツはまだまだ帰ってこない。

本当にどうしたんだろう……

何かあったからなのかな？

あ、もしかして、俺が送ったメール見て、俺に会いたくないって思ったとか？　ずっと待っているとかが送ったから、ウザかったとか？
……有りえるかもしれない。

今日は帰ってこないのかな？

まさか、他の男の人のところに行っていたり……

嫌だ！　それだけは嫌だ！

「ぶえつぶしっ！」

嫌な考えが浮かんで、それはくしゃみと同時に吹っ飛んでいく。

……大丈夫。ナツはそんなことしない。大丈夫。

俺は、去年ナツがデートで選んでくれたダウンの腕を握りしめた。

「ぶえっぶしっ！」

またくしゃみが出た。

そうだ。ナツが帰ってきてても、ナツとちゃんと話して、許してもらえるまで、ヘラヘラしないようにしないと。ちゃんと、真剣な顔しとかないと……

その時だった。

「……旬」

俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

小さかったけど……この声は……

俺は声の方を向いた。

そこには、大好きな人が、一番会いたかった人が……ナツがいた。

21 プレゼント（後書き）

次回、サイドストーリー最終回です！

22 必要な人

「ナツ！」

俺は立ち上がってナツに近付いていった。

「お帰り、ナツ！」

よかった。ナツに何もなかったみたいで……

寒さでこわばっていた顔が、ほっとしたのもあっていつものように緩むのが自分でも分かった。

……て、だめじゃん！ ヘラヘラしないって決めたばかりだったのに……

「ただいま……」

ナツが小さな声で、俺に言った。

よかった……返事してくれた。

さらにほっとして、また顔が緩んでしまう。

「旬……本当に、ずっと待ってたの？」

すぐに帰って、とか言われると思ったから、少し安心した。

「うん」

「こんなに寒いのに……風邪ひいても知らないわよ」
そう言うナツは、いつものナツだった。

「大丈夫だって。俺、バカだから今まで一回も風邪ひいたことねえもん」

よかった。ちゃんと話してくれてる。ほっとして俺は笑っていた。

「ふえつぶしょん！」

何の前触れもなくくしゃみが出てしまった。

「やっぱちょっと寒いな」

かつこわる……大丈夫って言ったばかりだったのに。

思いつきり鼻から息を吸うと、ズルルツと鼻水が音をたてた。

「旬、鼻水出てる」

ちよつとはにかんだような顔でナツが言った。

「え……マジで!？」

ダサッ！俺、ダサッ！こんな場面で鼻水なんて出すもんじゃないだろ！

俺は手の甲で鼻の下をこすった。

「ほら、ちゃんとかんで」

ナツがティツシュを俺の鼻にもってきて言った。

俺は言われた通りに鼻をかんだ。

ジユルルツと自分でも思った以上の鼻水が出た。

「うわっ。大量」

予想以上で俺は驚いて言った。

そしたら、ナツが笑った。

「へへっ」

ナツが笑ってくれた。それが嬉しくて、俺も笑った。

「寒かったよね……早く中、入ろ」

いつも通りに優しくナツが言ってくれた。

「うん」

俺は更に嬉しくて頷いた。

「旬、こたつ入ってて」

ナツは部屋に入ってエアコンをつけてこたつの電源を入れて、コートを脱ぎながら俺に言った。

「うん」

部屋に入っただけですいぶん温かく感じた。俺は言われた通りにすぐにこたつに入った。

「旬、ココアでいい？」

台所からナツが聞いてきた。

「うん。ありがと、ナツ」

俺はナツの方を向いて答える。ココアという甘くて温かい響きに、顔は自然と笑顔になるのが分かる。

あつたけー……

だんだん温かくなるこたつが気持ちいい。俺はすっかり和んでいた。

て、だめじゃん！ 何和んでんだよ、俺！

ナツが優しいからうつかり忘れそうになってた。
俺はナツに謝らないといけないんだ。

ナツのこの様子だと、もう気にしてないのかなとも思う。何も言っていないけど、俺のことを許してくれたのかなとも思う。

でも、俺はまだちゃんと謝っていない。許してくれるナツに甘えてたらダメだ。

俺はこたつから出て、ナツの方を向いて正座した。

「ナツ……ごめんな……」

俺はナツの背中に声をかけた。

「え……？」

ナツはこっちに振り向く。目を丸くして、驚いた顔をしていた。

俺は緊張しながら口を開いた。

「俺……本当、今までナツのことちゃんと考えてなかったっていうか……いや、ナツのことは本当に好きだし、すっげー大事に思っ

てるよ！……でも、知らないうちにナツに甘えてたのは、確かだ
と思う……。ナツがどう思つかとかは、やっぱり考えられてなかつ
た……」

自分で言って、情けなくなつて俺は下を向いた。

「これじゃあ、俺、ナツの彼氏って言えないよな……」
本当にそうだ。

俺、ナツの彼氏として、ナツに何してたっていうんだろ。

でも……

「でも、これからは気を付けるから……だから……別れるとか、考
えないでほしいんだ！俺は、ナツが一番大切だから……ナツがい
ないとダメなんだ！」

ナツがいないとダメだと、この三日で思い知った。ナツがいな
いことなんて、考えられないんだ。

「旬……違うの！」

ナツがいきなり声を上げて、俺はびっくりした。

「旬は全然悪くないの！あの時は……あたしが勝手にイライラして
……それで旬に当たるみたいになっちゃって……どうかしてたの。
連絡も……何だか気まずくてできなくて……だから、旬のことを悪
く思ったわけじゃないの！」

ナツが一気に喋ったことに俺はただ驚いて、そして、ナツの言っ
たことを頭の中で繰り返す。

俺が思ってたほど、ナツは俺のことが嫌じゃないってこと……？

ってことは……

「……じゃあ、別れようとか、思っ
てない？」
念のため、ナツにちゃんと聞いて確認した。

「うん」

ナツはすぐに頷いた。

「じゃあ、これで仲直り？」

「うん」

ナツはまたすぐに頷いた。それだけでほっとした。

「よかった……」

本当によかった。ナツが別れようか
思っ
てなくて……ナツと仲直りできて……

丁度その時、ピーツつと高い音がして、ナツは慌ててコンロの方
に向いて火を止めていた。俺はそれを見て、こたつに戻った。

これで一安心だ。でも、これからは本当に気をつけるようにしな
いとな。

そう思いながら、俺はダウンのポケットに手を突っ込んだ。

あ……

ポケットの中に入れてた小さな袋に手が当たった。うっかり忘れ
るところだった。

ナツに渡さないといけないんだ。

ナツがカップに入ったココアを持ってきて、俺の前に置いてくれた。

「あ、ありがと、ナツ」

俺が笑ってナツに言つと、ナツも微笑んで俺のそばに座った。

それを見ながら俺はココアを一口飲んだ。温かさと甘さが、俺の体の中もじわりと染み渡っていく感じがした。

よし……！

「ナツ。これ……」

俺はポケットからナツへのプレゼントを取り出して、こたつの上に置いた。

「何？ これ……」

ナツはそれを見て首を傾げている。

「開けてみて」

ナツに対してこんな台詞を言ったのは初めてだった。ちょっと照れる。

ナツは袋を丁寧に開けて、手の上に中身を出した。

「旬……これって……」

ナツはまた驚いた顔をして俺を見た。

「うん。この前、俺のせいで折っちゃったから……本当は来月に渡そうと思ってただけ、その……色々、ナツに嫌な思いもさせてるから、そのお詫びっていうか、さ。あつ、でも別にこれでチャラにして貰おうとか、そういうことじゃないから！……何ての？俺なりの誠意っていうか……」

言いたいことがうまくまとまらない。言っけて自分でも何なのか分からなくなってきた。

「同じバイトの人に聞いたり、雑誌借りたりしてさ、人気あるらしいのにしたんだ。色とか、ナツに合いそうなの選んだんだけど……」そう言ってみても恥ずかしい。プレゼントするってこんな恥ずかしいことなんだ。何か色々とむず痒い。

「でも、口紅って高いんだな。俺、びっくりしたよ。女の人って大変なんだなって改めて思った」それを誤魔化そうとして俺はそう言った。

こんな場面で言うことじゃないかな？

「……ありがとう」

でもナツは、その口紅を大事そうに握りしめてそう言ってくれた。

「へへっ。どういたしまして」

よかった……気にいってくれたみたいだ。

俺はほっとしながらココアを飲んだ。

「俺さあ……あの時、ぶっちゃけ嬉しかったんだ。ナツが俺のこと心配してくれてたこととか……ナツが言ったこと」

「これじゃあ、あたしばかりが旬のこと好きなだけみたい……」

「え……?」

「何か……初めてだったからさ。ナツがはつきり俺のこと心配してたとか、好きだって言ってくれたの」

ほっとしたついでに、俺は本音を口にした。

「俺……ちょっと不安だったから……。いつも、俺だけがナツのこと好きだって言って、俺だけがナツのこと好きなんだと思ってた……。ナツが俺のことどう思ってるか、自信なかったんだ。付き合いためたのも、何だかんだ言って、俺が無理矢理ってところもあったし……。ナツは優しいから、別れようとか言えなかったりしたのかわかって思ったり? ……だったから、嬉しかったんだ」

今回のことで、初めてナツからそんなことが聞けた。だからよかった。

「あ! でも別にナツに言われたのに懲りてないわけじゃないから! 後でめちゃくちゃ後悔したし!」

こんな言い方をしてナツに誤解されたら嫌だから、俺は慌ててフオーした。

そしてふとナツのことを見てみると……ナツの目から涙が零れていた。

「え……ナツ？」

俺が驚いて声をかけると、ナツは下を向いてしまった。

ポタポタとナツの涙が落ちている。

「ナツ？ ごめん！ 俺、また変なこと言った？」

物凄く焦った。俺は気付かないうちにナツを傷つけるようなことを言ってしまったんだろうか……

俺は下を向くナツの顔を覗き込もうとした。

その時、いきなりナツが動いて、俺に抱きついてきた。

勢いが良くて、俺は慌てて後ろに手について体を支えた。

「ナツ……？」

ちゃんとナツを受け止めたものの、何がおきたのか全く分からなかった。

「ナツ……どうした？」

俺はとりあえずナツの背中に手を回した。

抱きついてきたってことは、多分俺が変なこと言ったってわけじゃないと思う。

でも、何でいきなりナツは泣いて、俺に抱きついてきたんだろう……？

「旬……ごめん。ごめんね……」

俺の耳元で、涙声のナツがそう言った。

何のごめん、なのか、俺には分からない。

ナツに更にぎゅうつと抱き締められて、ナツの髪が俺の鼻にあたる。いつものナツの匂いだ。ナツのいい匂いは、シャンプーが何かだったってことを、俺はこの時初めて知った。

「ふええ……しゅっ、匂……ごめ……ごめんなさ、い……ごめんなさい……」

ナツの涙声は更にひどくなって、ナツはまた謝ってきた。そして、そのまま泣いている。

こんなナツ、初めてだ。

「ナツ？ 何でナツが謝ってんの？ つうか、何でそんなに泣いてんの？」

俺は、何をしていたのか分からなくて、でもとりあえずナツが早く落ち着くように背中を撫でた。

「あつ、あたしも……不安……だった、の……」

涙声のまま、ナツが言った。

「あ、あたし……何でっ……匂が……あたし、と付き合っ……るのか、分かんなく、て……あたしはっ……匂、より……四つも上っ、だし……匂は……む、胸のおつきい人……好き、だから……それだけしか、見てない、のかもって……思っ……たり、それに……ほ、本当に、匂は、あたしが、匂の身の回りのこと……全部してくれるからって、付き合ってるんじゃないかって、本当に、思ったの……匂は、あたしじゃなくても……いいんじゃないかって……あたしの代わりは、他にもいるんじゃないかって……そう思ったら、すごく……嫌

だった」

ナツが言うことを、俺は黙って聞いていた。

そうか……ナツは、そういう風に思ってたんだ。ナツはナツで、ずっと不安だったんだ。

「ナツ……」

俺は片方の手で、ナツの頭を撫でた。

「前にも言ったかもだけど、俺は……ナツだから、好きなんだよ。もし他に、ナツみたいにおっぱいでかい人がいても、家事全般ができるような人がいても、それがナツじゃないなら、絶対好きになんかならないよ」

これが、俺のそのまんまの気持ちだ。

俺が好きなのはナツだけで、ナツのまるごとが大好きで、ナツだからこそこんな気持ちになる。

ナツのほっぺたが俺のとくつついた。その感触も、すごく好きだ。

「ナツ……大好きだよ。俺はナツの全部が好き。ぎゅってすると柔らかくていい匂いがして、しっかり者で優しくて、たまに怒ったり、照れたり、笑ったり……今初めて見たけど、泣いてるところも。ナツの全部は、俺の中の一部なんだ。……だから、俺はナツがいないとダメなんだ」

今回のことで、それをはっきりと思い知った。ナツは俺にとって必要な人なんだ。

ナツがいないと、俺は心から笑うとができないから。

幸せになんて、なれないから。

「旬……あたしも」

その言葉と同時に、ナツの腕にまた力が入った。

「あたしも……旬のこと、大好きだよ……大好きだからね……！」
はつきりと、ナツが言った。初めてだった。

「旬は……だらしなくて、いつも部屋行くと汚いし、エッチなこ
とばっかしてくるし……本当は、あたしの理想とは全く違うけど……」

え、そうなの？ 思わずそう言いそうになった。

「でも……それでも旬だからっ……旬だから好きだよ！ 旬じゃな
かったら、一緒に居たいって……離れたくないって、思わないから
っ……」

ナツは、初めてちゃんと伝えてくれた。俺は、ナツの気持ちを、
初めてちゃんとした形で聞いた。

それは、どんな告白の台詞よりも、甘くて、優しくて、幸せな言
葉だった。

「よかった……」

俺はナツのことを抱きしめ返した。

「よかった……ナツが、俺のこと嫌いじゃなくて……」

本当によかった。ナツの、本当の気持ちも聞けて……

「……つく……旬……」

俺の腕の中で、またナツが泣き始めた。

「えっ……！？ 何でそこで泣くの!？」

何でまたこのタイミングで……俺、特に何も言っていないのに……

「ナツ、泣きやめ？」

俺は、腕を緩めて、両手でナツの顔を挟んだ。

俺がナツのほっぺたを撫でて、ナツは下を向いたまま泣いている。

「ナツ。俺、ナツは笑ってる時の方が好きだよ？ だから、笑って？」

俺はちよつと無理矢理ナツの顔を上げた。

ナツは、目を真っ赤にしている、その周りの化粧が落ちて、黒くなっていた。

「……やっぱ泣いてるとこもめちゃくちゃ可愛い」
思わず笑いながら言ってしまった。

でも本当のことだ。ナツは泣き顔まで可愛い。

そしたら、ナツが吹き出した。

「もうっ……何言ってるの」
ナツはいつも通りにそう言った。

「あ、やっぱナツはそうじゃないとな」
まだ少し泣いていたけど、でも、ちゃんといつも通りのナツに戻
ってる。

「メイク、落とさないと」
指で目元を擦って、ナツが言った。

そして俺の腕の中から抜けていって、俺に背中を向けて、ティッ
シュで拭いている。

これで、もう今まで通り。いや、今までよりナツとのラブラブ度
が増したかな？

そう思っ
て気を抜いた瞬間だった。

ぐるきゅるるう……

いきなり俺の腹が主張を始めた。

俺は慌てて腹を押さえた。

ナツが俺の方を振り返る。

「ハハッ……そう言えば俺、まだ晩飯食べてなかった。気が抜けた
らつい鳴っちまった」

そう言っ
て誤魔化そうとしたものの、物凄く恥ずかしかった。
何でこのタイミングで鳴るんだよ、俺の腹……

ナツにも少し笑われてしまった。

「……旬、何食べたい？ 出来るものならすぐ作るから」
ナツは俺の方に向き直りながらそう言ってくれた。

「ん〜……じゃあ……」

何を食べたいか、それを考えながらナツを見ていたら、ほんのいたずら心がうずいた。

「ナツ食べたいなあ……」

もちろん、それも嘘じゃないけど。でも、軽い冗談のつもりだった。

こう言ったら、きっとナツは真っ赤になって『もう……何言ってるの』って言うだろう。

そう思っていた。

「……なーんて。……え？」

ナツが、笑った俺の唇を触っている。まさか、こうなるなんて、全く思ってたなかった。

「ナ……ナツ？」

俺はただ驚くだけで、何もできなかった。

ナツの顔が、どんどん俺の顔に近付いてくる。

「いいよ。食べても……」

ナツの息がかかったと思った瞬間、俺の唇は、ナツの唇に塞がれてしまった。

二度目だった。ナツからキスをされたのは……

ナツに初めて会って、ナツと初めてセックスした、あの夜以来で……俺は今回もあの時と同じように、目を閉じることを忘れて、俺の口の中に忍びこんだナツの舌に、されるがままになってしまった。

唇が離れてからも、俺は動けないままだった。

情けないことに、ただ動揺してどうしたらいいか分からなかった。気持ちとしては、見てはいけないものを見てしまった感じだった。

前にキスされた時のナツは大胆だったけど、それは酔ってたからだと思ってた。普段のナツは、そんなことしないから。

でも、今はシラフのはずのナツも、同じようなことをした。

ど、ど……どういうことだ？ どっちが本当のナツなんだ？

「な、なんてねっ」

ナツは少し顔を赤くして、明るく言った。

「ごめん、なんかあるものですぐ作るね」

慌てた様子で、そう言って、ナツが立ち上がった。

俺はほとんど無意識で、ナツの手を掴んでいた。

「え……旬？」

ナツは目を丸くしながら俺を見下ろしていた。

「ナツを食べる」

そのままナツを引っ張ると、俺の腕の中にすっぽりと入った。

「いただきます」

ちゃんと言儀よくそう言うてから、俺は美味しくナツをいただいた。

どっちが本当のナツなのか。それは多分ないんだ。大胆なナツも、ナツであることには変わりなくて、そして、俺がそんなナツのことも好きなんだということにも変わりはない。

とにかく、ナツに出会ってから、ナツ中毒になってしまった俺は、どんな時でも、ナツがいないとダメなんだ。

22 必要な人（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございました！感想をいただけると嬉しいです。

ダメ男依存症候群の続編を連載中です。よろしければそちらも是非お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9186b/>

ダメ男依存症候群 ～俺は彼女に中毒症状～

2011年10月3日12時53分発行